
風の葵 アサシンズコンテスト

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の葵 アサシンズコンテスト

【Nコード】

N7456E

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

水無月探偵事務所は、3人の女性のみで構成されている事務所である。但し、扱う案件は「浮気・素行調査」の類いではない。彼女達3人の正体は、日本史上最強の忍び軍団。主な仕事は要人警護や世界的な組織との戦いなのだ。そんな彼女達の元に、アフリカの小国「イスバハン」の王女の警護依頼が。だがそれは恐ろしい計画のプレリウドであった。世界中の殺し屋達が、王女の命を狙って日本に集まって来る。葵達は王女を守るのか？

ブローグ 日本国総理大臣官邸にて

7月（前書き）

いろいろと裏読みもできるお話ですが、あまり深く考えずにお楽しみ下さい。

「この情報は、確かなのか？」

橋沢龍一郎首相は、机の向こうに立っている、一人の若い官僚を見上げて尋ねた。彼の手には、

「防衛省 情報本部 極秘」

と書かれたファイルがあつた。

「はい、確かです。各国の情報部に問い合わせて、裏付けも取れております」

若い男は言った。橋沢首相は再びファイルに目を落とし、

「もしこれが事実であれば、政府として何らかのアクションを起こすべきか？」

と尋ねたのか、独り言なのかわからない口調で呟いた。

「そう判断したからこそ、私はこのファイルを直接総理のところに持ちしたのです」

若い男はきびきびとした口調で答えた。すると橋沢はフツと笑い、

「君はまだ若いな」

と言った。若い男は一瞬キョトンとした顔で橋沢を見た。橋沢は男を見上げて、

「政府は何もしない。これは年末に開かれる通常国会で審議予定のスパイ防止法案と自衛隊法改正案をすんなりと通すための、格好の起爆剤として利用させてもらう」

「はア？」

若い男はますますわからないという顔で橋沢を見た。橋沢は、

「まア、いい。報告御苦労」

と労いの言葉をかけ、ファイルを閉じ、机の上に置いた。男はハツとして、

「し、失礼します！」

と敬礼し、部屋を出て行った。橋沢首相はそれを見届けてから、シ

ガーケースから葉巻きを取り出し、

「日本は変わる。いや、日本を変えてやる……」

彼の顔に浮かんだ笑みは、狡猾なそれだった。

「まだ終わりませんか？」

「はア、後もう少しで…。4時になったら帰ります」

奇妙な会話が、ビルの一室で交わされていた。

ここは、東京都文京区本郷にあるグラントビルワンの5階、「水無月^{なづきあおい}葵探偵事務所」のフロアである。この探偵事務所は、只今本郷税務署の調査に入られているところであった。

「しかし、いくら何でも経理が杜撰過ぎませんか、水無月さん？」

現金出納帳はつけてありますが、現金残高が記入されていないのは、青色申告の用件を満たしていませんよ」

机の一つにあらゆる書類を広げて、その一つ一つを吟味していた税務署の調査官が、顔を上げて言った。

「はい。以後、気をつけます」

ニツコリ微笑んで答えたのが、水無月葵、この事務所のオーナーであり、所長である。

彼女は今年27歳の、瘦身の美人で、長いストレートの黒髪、ちよつと大きめの黒々とした瞳、高くスリムな鼻、薄くて小さめの唇の持ち主。いつも明るいスーツを着込み、職業柄かそれとも好みなのか、ヒールの低い革靴を愛用している。

「明日また来ます。請求書関係を見させていただきますので…」

調査官はまだ若い男で、葵の微笑みに顔を赤らめ、視線を外して言った。葵はそんな彼の心を見透かしたのか、クスクス笑って、

「はい、お待ちしております」

と言って調査官を送り出した。

「ひつどーい、所長つてば」

税務署員が出て行くと同時に、文句の声が上がった。それはこの事務所の経理を担当している、如月茜^{きさらぎあかね}であった。

彼女はまだ20歳の、ホントに子供子供した女の子だ。見た目は

高校生、いや化粧をしていなければ中学生に見えるかも知れない。服装は事務所の制服らしく、紺のスカートに白のブラウス、そして紺のベスト。髪がショートカットなのも、子供っぽく見える理由の一つかも知れない。

「ごめん、茜。後で埋め合わせするからさ」

葵は手を合わせて片目を瞑り、下手に出た言葉遣いで、むくれる茜をなだめた。しかし、

「あれじゃまるで私ってバカみたいじゃないですかア。出納帳もつけられない経理事務員がいるって、あの税務署の人、思ってますよ、きつと」

と茜はますますむくれていく。葵は肩をすくめて、

「まア、仕方ないのよ。ウチの経理を正直に書いたら、国税局が来ちゃうんだから。いや、検察庁かな？」

「それはわかってますけどオ・・・。せめて、現金出納帳くらいは、もう少しまでもにつけさせて下さいよオ」

茜は少し穏やかに言った。葵は自分の席の椅子に腰を下ろして、

「わかったわ。その辺は茜に任せる。うまくやって」

とウィンクした。茜はニコツとして、

「わっかりましたア！」

と嬉しそうに自分の席に戻った。

「二重帳簿を作るのは難しいからいい加減な出納帳のフリをさせてるってこと、わかってね」

と葵が言つと、茜は、

「はい。わかってます。でも私って、簿記一級なんですから、任せといて下さいよ。三重帳簿だって作れますから」

と胸を張ってみせた。葵はクスツと笑って、

「はいはい。先生の思うようになさって下さい」

「はアい！」

茜は元気よくそう返事をする、早速出納帳を書き直し始めた。

「そう言えば、美咲はどうしたの？ 遅いわね」

葵はもう一つある誰も座っていない机に目を向けて言った。茜もその机を見て、

「美咲さんは今日は外務省デーなんです。遅くなるかも知れないって言ってますよ」

と答えた。葵は頷いて、

「そうか、今日は外務省デーか。じゃ、帰って来ないわね」

「明日は私が警察庁デーです」

茜は悲しそうに言った。葵は腕組みをして、

「ということは、明後日は私が防衛省デーってことか・・・」
と表情を暗くした。そして、

「じゃ、今日はもう早じまいしちゃいましょうか」

と立ち上がった。茜はムツとして、

「何ですかア、それって！？ 私がせっかく仕事を始めたのにイ！

！」

「そんなの、あとあと。今から美咲が行くと思われるレストランに先回りよ」

葵の悪戯っぽい笑みに茜も思わずニヤリとして、

「それっていいですね。面白そう」

と出納帳を閉じ、立ち上がった。

「帰りましょうか」

と葵がロッカールームに近づいた時、ドアフォンが鳴った。

「・・・」

葵と茜は顔を見合わせた。

「お客様みたいね」

「はい」

二人はがっかりした顔で客を出迎えるためにドアに近づいた。そして、葵がドアを開くと、そこにはドアの高さと同じくらいの身長、ダークスーツを着た男が立っていた。

「わっ！」

と茜は思わず叫んでしまった。

「日本語、わかりますか？」

葵はその男が一見して外国人だとわかったので、そう尋ねた。男は浅黒い顔に白い歯を見せて、

「大丈夫です。私は日本に留学し、源氏物語を学んだことがありますので」

と答えた。葵は微笑んで、

「どうぞ。御用件を伺いましょう」

と来客用のソファを右手で示した。その外国人男性は、茜に向かつてニコツとしてから、ソファに近づいた。しかし当の茜は、まるで金縛りに合ったかのように無反応で立っていた。

「茜、何かお飲物を用意して」

葵もソファに近づきながら言った。すると外国人男性は、

「お気遣いなく。用がすみましたら、すぐに帰りますので」

と言った。そしてソファにゆっくりと腰を下ろし、フロア全体を眺めた。

「きれいな事務所ですね。女性らしさに溢れていて、それでいて実に機能的にできている」

男性のその発言に、葵は急に険しい顔つきになり、向かいのソファに座って脚を組んだ。

「この事務所を見渡しただけでそこまでわかりになった方、今まで何人もいらっしゃいませんのよ。貴方は一体どういう関係の方なのですか？」

男性は葵の反応にさほど驚いた様子も見せず、逆に微笑んでみせ、

「そう警戒なさらないで下さい。これは所謂職業病でしてね」

「職業病？」

葵は眉をひそめ、おうむ返しに尋ねた。男性は軽く頷き、

「そうです。申し遅れましたが、私は、北アフリカにある王国、イスパハンの情報部の部長で、セシオ・レ・クリオと申します」

と内ポケットから身分証明書を出し、開いてみせた。葵はそれを覗き込んで、

「イスバハンの情報部の方が、私のような一介の探偵に、一体何のご用ですか？」

とセシオの顔に目を向けた。するとセシオは急に不敵な笑みを口元に浮かべて、

「おとぼけにならなくてもいいのですよ、水無月さん。私共は、貴女方の正体、存じておりますので」

葵の顔がこわばり、ぼんやりとして立っていた茜までがサツと身構えた。まさに一触即発の空気がフロアを支配した。

「喧嘩を売るつもり、セシオさん？」

葵の鋭い目が、セシオを睨みつけた。セシオは再びニツコリして、「そうではありませんよ。私は貴女方のその類い稀な才能を知り、あることをお願いに参ったのです。早合点なさないで下さい」

「依頼をしたいってこと？」

葵は茜に身構えるのをやめさせてから、再びセシオを見た。セシオは大きく頷いて、

「そのとおりです。用件に入ってよろしいですか？」

「ええ、どうぞ」

葵は脚を組み直して促した。セシオは軽く咳払いをしてから、

「この部屋、盗聴は大丈夫ですか？」

と尋ねた。葵は頷いて、

「ええ。ご心配なら、ジャマーを作動させて、一切の通信を遮断することも可能です」

「なるほど。しかしそこまでしていただくことはないでしょう」

セシオはもう一度フロアを見渡しながら言った。そして葵に目を向け、

「実は我が国の王女、ファラ・ピクノ・ルミナが、日本に来ています」

と小声で話した。葵はソファに身を沈めたままで、

「王女様が？ 一体何をなさりに？」

と素っ気なく尋ねた。セシオは苦笑いをして、

「我が国は20年前にフランスの統治領から独立国になり、立憲君主制を採用して、王家と政治を分離して成り立って来ました。王女は法学に興味があり、様々な国の憲法を学んでいます」
「なるほど」

葵はまだ退屈そうである。セシオはそれでも、

「王女はとりわけ、日本の憲法に注目し、それを直接日本で学ぼうと考え、来日したのです」

「そうですか」

葵はあまり興味を示さない。もちろん、これは彼女一流のポーズで、依頼人に残さず話を吐き出させるための手段なのである。

「いい加減、核心に触れてもらえませんか？ 奥歯にものの挟まったような言い方、私、あまり好きじゃありませんのよ」

葵はわざと冷たく言った。セシオは肩を竦めて、

「わかりました。単刀直入に申し上げます。王女の警護をお願いしたいのです」

「警護？」

葵は少し意外そうな顔で言った。セシオは頷いて、

「そうです。王女は殺し屋に狙われております」

「殺し屋に？ 一体どうして？」

葵はとうとう身を乗り出して尋ねた。茜もソファのそばに来て、二人の会話を聞いている。

「王女が狙われる理由はわかりませんが、王女を狙う動機はわかりました」

「動機？」

と葵がチラリと茜を見て言うと、セシオは内ポケットから紙を取り出し、テーブルの上で広げた。

「王女に賞金を賭けた人物がいるのです」

「！？」

葵はその紙を見て目を見張った。そこには王女と思われる、まだ茜と同年代くらいの、可愛い少女の写真が印刷されており、そ

の下に、100万ドルと書かれていたのである。

「ファラ王女の首に100万ドル？ しかも、DEAD OR ALIVE（生死を問わず）なの？」

「はい。何者かが王女の死を願っているようなのです」

「正体はわからないの？」

葵は当然の質問をした。しかしセシオは首を横に振り、

「わからないのです。反王権派、左派、右派、フランスと様々なところに調査の手を伸ばしたのですが、全くわかりませんでした」

「そう」

葵は腕組みをし、ファラのおどけない顔を見た。

「それで、私に警護を頼む理由は？」

「日本の警察は信用できません。いえ、政府そのものが信用できないのです。だから日本で最高の実力の持ち主である貴女方に、警護をお願いしたいのです」

セシオは葵の顔を覗き込むようにして言った。葵もセシオを見て、「買い被り過ぎじゃないの？」

「そんなことはありません。貴女方の実力はよくわかっていても、りです」

セシオは真顔で答えた。葵は肩を竦めて、

「私達の事、どこまで御存じなの？」

と尋ねた。セシオはニヤリとして、

「貴女方が、政府の各機関にコネクションをお持ちのこと、そしてそれは非法すれすれのこと。貴女方が実は忍びの一族であること、そして政府の情報機関以上に裏の世界にネットワークをお持ちのこと」

と答えた。葵は茜と顔を見合わせた。そして、

「そんなことまで知っている人、日本政府にもいないわよ。一体どこからそれだけの情報を手に入れたの？」

「私共は、英国王室とはかなり親しくさせていただいておりますので」

セシオは実に楽しそうに微笑んだが、葵は不愉快そうな顔をした。そして、

「あの女が喋ったのね？」

「はい」

セシオは恐縮して言った。葵はドスンとソファにもたれかかって、「確かにとぼけても仕方ないみたいね。わかりました。依頼はお引き受けしましょう」

「ありがとうございます。それでは前金として、10万ポンド、すぐにご用意いたします」

セシオはニコツとして言った。葵はまた身を乗り出し、

「フランス領だったのに、ポンドなの？」

「はい。我が国の王室は、フランスには憎しみしか抱いておりませんので、外国とはポンドで取り引きしております」

セシオは丁寧な物言いであ答えた。

「命を狙っているの、フランスの誰かじゃないの？ 独立の時、もめなかった？」

と葵が尋ねると、セシオは首を横に振って、

「いいえ。独立は平穩の内に勝ち取りました。我が国はフランスを憎んでおりますが、フランスは我が国を憎んではおりません」と答えた。

「そう……」

葵は腕組みして考え込んだ。それから顔を上げて、

「彼女も日本に来ているの？」

「は？ 誰ですか？」

セシオはわざとなのか、本当にわからないのか、とぼけた返事をした。葵はセシオに顔を近づけて、

「大英帝国の、跳ねっ返り女よ！」

「ああ……」

セシオはニヤリとして、

「あの方も王女に護衛を頼まれて、日本にいらしてますよ」

「護衛を？ 彼女がボディガードなら、私達はいらないでしょ？」
葵は不満そうだ。「跳ねっ返り女」とは、いろいろと因縁があるためである。

「貴女を推薦されたのは、あの方なのですよ」

セシオの言葉に、葵は完全に呆れてしまった顔で、

「何て女なの。きつと自分が日本で遊びたいから、私に仕事を押しつけるつもりなんだわ」

と言い放った。するとその時ドアフォンが鳴った。葵は茜に目配せした。茜は頷いてドアに近づいた。彼女がドアを開くと、そこには太ももむき出しのミニスカートの、胸の谷間が丸つきり見えているタンクトップを着た、茶髪巻き毛の、青い瞳の白人女性が立っていた。

「やっぱり貴女だったのね？」

葵が不快そうに言う、その女性は、

「お久しぶりね、葵。一年ぶりくらいかしら？」

と嬉しそうに応じた。葵はフーツと溜息を吐き、

「相変わらずね、シャーロット・ホームズ。スコットランドヤード特別局の敏腕警部補が、何のご用？」

と尋ねた。すると二人の様子を見ていたセシオが立ち上がり、

「それでは私はこれで失礼致します。またご連絡させていただきま
すので」

と言うと、シャーロットに会釈して、事務所を出て行ってしまった。

「何よ、あの男。胡散臭いわね」

と葵が呟くと、シャーロットはソファに近づいて、

「まアまア。あのおじさんが話さなかったこと、私が教えてあげる
わよ」

とウィンクして言った。何故か葵はうんざり顔で、茜と顔を見合
わせた。

第二章 シャーロット・ホームズ 7月 1日 午後5時10分

「あーら、発育不良娘さん、お元気イ？」

シャーロットはイギリス人のようだが、実に達者な日本語で茜をからかった。茜はプウツと剥れて、

「私、発育不良娘じゃありませんてばア」

と言い返した。しかしシャーロットはそれには応じないでサツサとソファに座り、脚を組んでふんぞり返った。

「あのおじさんが話さなかったことって何？」

葵はシャーロットの横にデンと立ったまま尋ねた。シャーロットはフフツと笑って、葵を見上げ、

「まア、座りなさいよ。日本人のくせに落ち着きがないわね」

「何よ、それ」

葵はムツとしてソファに戻った。茜はバーカと声に出さずにシャーロットの背中に言うと、葵の目配せに応じて給湯室の方に歩き出した。それに気づいたシャーロットが、

「私、ミルクティーね」

と声を張り上げて言った。茜は嫌そうな顔をして、

「はアい」

と答え、ベーツと舌を出した。葵は茜が給湯室に消えたのを見届け、それから、

「貴女、あのおじさんのこと、何か知っているの？」

「ええ、イスバハンの王女様は、我が国にもいらしてるのよ。英国王室の招きでね」

シャーロットはまるで盗聴を警戒するかのように小声で言った。

葵もシャーロットの様子に気づき、

「どうしたの？」

「あのおじさん、情報部の部長だって言ってたでしょ？」

「ええ。それで？」

葵が先を促すと、シャーロットは葵に顔を近づけて、

「その前には何をしていたと思う？」

「焦らさないでよ。何してたの？」

葵は給湯室から茜が出て来たのを見てから尋ねた。シャーロットもチラツと茜を見て、

「フランスの外人部隊よ」

「えっ？　じゃああの人が、戦争屋だったの？」

葵は意外そうに言った。そして考え込むようにして、

「少なくとも、どこにもそんな臭いはしなかったわ。血の臭い、硝煙の臭い……。そして人を何人も殺した人間にありがちな、殺気のようなものもね」

「それはそうよ。あのおじさん、戦争屋って言っても、ドンパチする兵隊じゃなくて、暗殺部隊だったのだから」

「暗殺？」

葵は茜に出されたコーヒーに目もくれず、シャーロットを見た。

シャーロットはミルクティーのカップを手に取り、

「そうよ」

と応えた。葵はセシオが言っていた「王女を狙う殺し屋」の話が、眉唾ものではないかと考え始めていた。

「王女の命を狙う殺し屋の話は本当なの？」

「それは本当よ。私は何度か王女を助けているわ」

シャーロットはカップをテーブルに置いて言った。葵はコーヒーカップを手にして、

「でも暗殺のプロだった男が、王女のボディガードを他所に頼むなんて、変じゃない？」

「それはね。でも、王女は女性ですからね。男では守り切れないところもあるでしょ？」

「それはそうだけど……。何か裏があるような気がするわ」

葵はコーヒーを一口飲んで言った。

「かもね。でも、貴女は依頼を受けたのだから、王女を護衛するだ

けでいいの。他のことは考えない方が身のためよ」

シャーロットは真顔で言った。葵も真剣な顔つきになり、

「一筋縄じゃいかないってことね」

「ええ」

シャーロットは悪戯っぽく笑って、

「イスバハンについての裏情報なら、貴女の彼が私より詳しいはずよ」

と上目遣いで葵を見た。葵はキツとシャーロットを睨みつけ、

「彼って誰よ？」

と強い調子で言い放った。シャーロットは実に面白そうにクスクス笑いながら、

「防衛省統合幕僚会議情報本部の、彼よ」

と答えた。葵は顔を赤くして、

「あ、あいつは彼なんかじゃないわよ！ 変な誤解しないでよね」

「そうなのオ？ 少なくとも、彼はそう思っていないんじゃないかなア」

シャーロットは完全に葵をからかうような口調になっていた。葵はコーヒーを一口飲んでから再びシャーロットを睨みつけて、

「それはあいつの思い込みよ。私は別に、あいつのことなんか、ただの同郷の男としか思っていないし、おいしい情報源でしかないわ」

「フフーン、そうかなア」

シャーロットはミルクティーを飲み干すと、音を立てずにカップをテーブルに戻した。

「まア、その話は置いてと」

彼女はまた真顔になり、

「ここからが本題なんだけど。あのおじさん、貴女達のこと、いろいろ知っていたでしょ？」

「貴女が喋ったんでしょ？」

葵は呆れて言った。しかしシャーロットは首を横に振り、
「私は貴女達が日本で最高の探偵だとしてしか言っていないわ。」

葵の顔に驚きの色が浮かんだ。茜もびっくりしてソファに近づき、二人の話に耳を傾けている。

「私達のことを調べたのね？」

「そうね。でも、どこをどう調べれば、貴女達の正体が掴めるのかしら？」

とシャーロットが言ったので、葵と茜が彼女をジッと疑いの眼差しで見た。

「ちょ、ちよつと、本当に私は他に何も話していないわよ」

「だって他に漏洩源が思い当たらないんだもの」

葵のきつぱりとした言い方に、シャーロットは苦笑いをして、

「そうかア。でもね、もう一つ、漏洩源があるわよ」

「誰よ？」

葵は全く信用していない目でシャーロットを見た。シャーロットは肩を竦めて、

「そうは思いたくないんだけど、我が親愛なる女王陛下よ」

と答えた。葵は茜と顔を見合わせて、

「そうか。女王陛下、私達のこと、ご存じなのよね」

葵達三人は、以前イギリスでシャーロットと協力して、王室を狙うテロリストを撃退したことがある。その時、女王にだけは、三人の正体を明かしてあったのだ。

「イスバハンの王女、ファラ・ピクノ・ルミナが、英国にいらした時、女王陛下とお話なさっているわ。その時、貴女達の活躍の話が出たとしても、不思議じゃないわよね」

「そうね・・・」

葵が考え込もうとした時、シャーロットが、

「じゃあ、謝ってもらいましょうか」

「えっ？」

葵は虚を突かれたようにシャーロットを見た。シャーロットは得意満面の顔で、

「私を疑ったことをよ」

と言った。葵は仕方なさそうに、

「はいはい。ごめんなさいね、疑ったりして」

「全然気持ちが悪くもっていないなア。ま、いっか」

シャーロットのいいところは、とてもあっさりしているところだけだ、と葵はその時思った。そして、

「今度は私から質問するけど、いいかしら？」

「ええ、どうぞ。何なりと」

シャーロットはニコリして応えた。葵は軽く頷いて、

「貴女は何のために日本に来たの？」

と尋ねた。シャーロットは茜を見てカップを差し出し、ニコツとして渡すと、

「王女に同行を求められたのよ。彼女、日本に来る前に、我が国に立ち寄っているわ」

「なるほどね。イスバハンは今、イギリスと一番親しいのかしら？」

「でしようね。一番近い西欧の王国だし、不仲のフランスに対抗するには、一番おあつらえ向きの国なものね」

とシャーロットは、不満そうに給湯室に向かう茜に手を振って言った。

「セシオにも訊いたことだけど、イスバハんとフランスの間に、確執はないの？」

「ないわね。少なくとも私の知る限りではね」

シャーロットの言い回しには、含むところがあるようだった。葵はそれに気づき、

「本当は何かあった、あるいはあるのね？」

「かもね。イスバハンの独立当時のことを調べればわかるわよ」
シャーロットはフツと笑って言った。

「その辺に、王女が殺し屋に狙われる理由があると考えられるけど、セシオはそれを否定した・・・」

葵は腕組みをして考え込んだ。シャーロットは茜が突き出した力ツプをニコツとして受け取り、

「あのおじさん、信じちゃだめよ。何か胡散臭いわ」

「ええ、そうね・・・」

葵はそう言って頷きながら、

「貴女、そこまで知っていてどうして王女に同行したの？ 断れば良かったんじゃないの？」

「だって面白そうだったんだもの。それに、貴女と会えるって聞いたから」

茶目つ気たつぷりの目で、シャーロットは答えた。葵は半ば呆れ顔で、

「ホントに、貴女ってお気楽な人ね。呆れちゃうわ」

「ハハハ。よく言われる。お前、生まれる国を間違えたって言われたこともあるわ」

シャーロットは頭を掻きながら言った。

「断った方が良かったんじゃないですか、所長」

と茜が口を挟んだ。葵は彼女を見上げて、

「そうはいかないわよ。何か妙なのよね。私達の正体を探っていたらしいこと、この事務所の特別な仕組みにすぐ気づいたこと。このまま手を引いたら、今度は 私達がイスバハンの情報部に狙われることになってしまいかもよ」

「その可能性は大いにあるわね」

とシャーロットが同意した。茜は怖そうな顔で、

「やだなア。なーんか、危なっかしい仕事で」

「仕方ないじゃないの、探偵なんだから。私、浮気調査や、素行調査なんて、絶対したくないんだから。こういう仕事をするために、探偵事務所を始めたのよ」

と葵が言うと、シャーロットが、

「そオ？ ホントはさ、一番実体がわからない仕事だから、選んだんじゃないの？」

「それもあるけどね」

と葵はペロッと舌を出した。そして腕時計を見て、

「あつ、もうこんな時間。茜、行くわよ」

と立ち上がった。シャーロットも立ち上がり、

「どこ行くのよ？」

葵はロッカールームのドアを開いて中に入りながら、

「美咲のところよ」

「そう言えば彼女、いないわね。どこに行ったの？」

シャーロットは興味津々の顔で尋ねた。すると茜が、

「デカ乳女には関係ないでしょ？」

と言つてのけた。シャーロットはしかし、微笑んだまま茜を見て、

「そういうこと言つてると、早死にするわよ、発育不良さん？」

と言い返した。茜は、

「フンだ！」

と言い、ロッカールームに入つて行つた。

「ねエ、ホントにどこに行くのよ？」

シャーロットはもう一度、ロッカールームからショルダーバッグ
を持つて出て来た葵に尋ねた。葵は仕方なさそうに、

「銀座のレストランよ。美咲はそこで、外務省の官僚とデート中な
の」

「あらま、そういうこと」

シャーロットは嬉しそうに言つた。そして、

「私も一緒に行つていい？」

と小首を傾げて尋ねた。葵はしかしきっぱりと、

「ダメ！」

と応えた。シャーロットは少しだけムツとして、

「何でよ？」

「茜が言つたでしょ？ 貴女には関係ないことなの」

葵はシャーロットを無視するようにドアに近づいた。

「そんなこと言つちやつていいのかなア」

シャーロットは葵に背を向けたままで言つた。葵はドアノブから
手を放して振り返り、

「何よ？」

シャーロットはニヤニヤして、

「外務省のお偉いさんなら、イスバハンのこと知っているんじゃないの？」

「そうかも知れないわね。それがどうしたの？」

葵はかなり気分を害したという顔つきで、シャーロットを見た。

シャーロットは肩をすくめて、

「でもさ、それを教えてもらえるかどうかは信頼関係があるかないかにかかって来るわねエ」

「何訳のわかんないこと言ってますかア？」

ロッカールームから出て来た茜がバカにしたような口ぶりでシャーロットを見上げた。二人の身長差は、20cm近くあるかも知れない。

「私、時と場合によっては、とつても口が軽くなったりするのよねエ」

シャーロットは茜を無視して、葵を見つめた。葵は怒りを通り越して、呆れていた。

「私を脅迫するつもり？」

「まっさかア。そんな命知らずなことしないわよ。たださ、お夕食、一緒に食べたいなアツて、思ったりしただけよ」

シャーロットはニコニコしながら言った。しかしさすが探偵事務所所長である。葵は見事に逆襲した。

「これから行くの、中華料理のレストランよ」

その言葉はまるで呪文のようで、シャーロットの微笑が凍てついた。彼女は中華が大の苦手なのである。

「それでも一緒に行く？」

葵は勝ち誇ったように尋ねた。シャーロットは顔を引きつらせながら笑い、

「え、遠慮しとくわ。やっぱり、貴女にご馳走になるの、悪いし、気が引けるから」

と答えた。葵はニンマリとして、

「あらそう、残念ね」

と言ってから、茜を見て、

「さア、行くわよ」

「はアい！」

茜はやり込められて苦笑いしているシャーロットを鼻で笑い、ドアを開いた。

「さア、ホームズさん、お帰りはこちらですよオ」

「・・・」

シャーロットは無言のままドアから出た。

「また来るわ」

彼女はフラフラしながらビルの外廊下を歩いて行った。葵はシャーロットが見えなくなってから、

「さてと。茜、早く着替えましょ。こんな格好じゃ、フランス料理のフルコースを食べるの、恥ずかしいから」

「えっ？ 中華じゃないんですか？」

茜は呆氣にとられて言った。葵はフツと笑って、

「当然。さっきのは、あの跳ねっ返り女を追い払ったための嘘よ。まんまと引っかかってくれて、良かったわ」

「・・・」

茜は感心するよりも、葵の機転の早さに少し身震いした。

第三章 外務省の男 7月 1日 午後7時

葵と茜は、ドレスアップして事務所を出ると、通りを一本奥に入りタクシーを拾った。シャーロットがまだどこから二人を監視しているかも知れないからだ。

葵の警戒心はさらにその上を用意していた。

「新宿駅までお願い」

「はい」

茜はもうすっかり驚いていた。

「場所も違うんですか？」

「ええ。あの女に、銀座中探されたら困るものね。美咲には、メルで新宿に行くように指示出しているわ」

葵は某メーカーのピンクの携帯電話を茜に見せて言った。

「さっすが、所長ですね」

とうとう茜は褒めざるを得ないと思ったのか、そう言った。

「ただ、シャーロットが言ってた、『外務省のお偉いさん』というのは、役に立ちそうね。あいつ、美咲のためなら、国を裏切りかねない男だから」

と葵は携帯をスーツの内ポケットにしまいながら言った。茜も楽しそうに笑って、

「そうですね。あの人、ホントに美咲さんにゾッコンですよね」

「すごいエリートなのに、女にはウブなのよね」

葵はウンザリ顔で言った。ところが茜は、

「あら、美咲さんなら、ウブじゃない男だって、イチコロですよ」

「かもね。あの子、男に、『守ってあげたい！』っていう気にさせる何かを持っているのよね」

葵も同意して言った。

新宿の高層ビル街にあるホテルの最上階に、美咲、神無月美咲は

いた。軽くウェーブがかかった綺麗な黒髪を肩まで伸ばし、ややウルウル気味の瞳と、小さい小鼻、新鮮なサクランボのように潤いのある唇。葵より三つ年下の彼女は、葵と違って落ち着いた雰囲気だ。服装も性格のように、淡色系のツーピースで、スカートの丈は膝よりほんの少しだけ上程度である。

「ホントだ。このフランス料理、僕がいつも貴女と行っている銀座のものより、うまい！」

真夏日を記録し、夜になったとは言え、まだ27度ほどある日なのに、律儀にスーツを着込み、決してネクタイは緩めない。実直と言えば聞こえがいいが、要するに融通の利かない男の典型がこいつだ、と葵はよく美咲に言う。

「さすが、神無月さんだ。僕も今度からここを覇にしよう」

男は実に嬉しそうにそう言った。

「そ、そうですか」

美咲は後ろめたそうに言った。彼女にしてみれば、目の前にいる男は、雲の上の存在に近いエリートだ。それほどの男が、今こうして、探偵事務所の一調査員のために、上司に嘘をついてまで、夕食を共にしようとしてくれているのは、彼女にとって結構負担であった。

（このお店、私も初めてなのよね・・・）

美咲は心の中でそう思い、葵が来るのを心待ちにしていた。

（急に新宿に場所を変えるようにってメールで指示して来て、びっくりしてしまったわ。一体どうしたのかしら、所長達？）

「神無月さん、今夜こそお返事聞かせて下さい」

男は真面目な顔で美咲を見つめて言った。美咲はビクツとして彼女を見た。

「お返事？」

「ええ。貴女とお付き合いを始めて、もう半年近くになります。そろそろ、その・・・」

と男は言葉を濁した。美咲はこの男に下心があることを前から気づ

いていたのだが、今まではうまくかわしていたのだ。

「貴女が欲しいんです」

男は声をひそめてそう言った。美咲はカッと赤くなった。演技ではない。言ってしまうえば、彼女の方が茜よりウブなのである。

「す、すみません。ストレート過ぎました。でも、貴女に対する気持ちは遊びじゃありません。本気なんです」

美咲はここで必ずある一言を言い、この男の誘いをあしらって来た。

「でも、神戸さんにはフィアンセの方が・・・」

この一言で、神戸 神戸 典は一瞬にして萎んでしまうのだが、何故か今日はそうならなかった。

「あの女とは、タベ別れました」

「ええっ？」

美咲は仰天した。この手の男は、「遊び」は「遊び」と割り切つて付き合うものだが、何か歯車が狂い始めたのだ。

「もう貴女しかいないんです」

「そ、そんな・・・」

美咲は思ってもみない展開に、すっかりうろたえていた。

（どうしよう？ 所長はまだ来ていないの？）

「神無月さん・・・」

神戸の右手が、美咲の左手に触れた。彼女はハッとして手を引いた。

（何か口実を作つて、この場を離れないと・・・）

「う、ごめんなさい、ちょっと失礼します」

美咲はハンドバッグを持ち、席を立てて化粧室に向かった。神戸は美咲の後ろ姿をしばらく見ていたが、フーツと溜息を吐き、目を伏せた。

「やっぱり、ちょっと急ぎ過ぎたかな・・・」

彼は彼なりに、美咲に気を使つたつもりだった。

「ハア・・・」

美咲は化粧室の鏡の中の自分を見て、溜息を吐いた。

（何か、疲れているなア・・・）

他の探偵事務所に決してできない依頼を受け、それを完璧に実行する。それが葵のモットーである。そのために彼女達は、自分達の女としての魅力を最大限に生かし、官僚達の情報を引き出し、警察すら知らないような事実を入手することができる。美咲が神戸と食事をしたり、カクテルバーで酒を飲んだりするのも、「仕事」なのである。そのための必要経費は全額事務所持ちだ。だからこそ、水無月探偵事務所の経理は不明朗にしておかなければならないのである。何故なら、これはある意味で「贈賄」であり、情報のリークは相手の官僚にとって命取りになりかねないからだ。

「お疲れ、美咲」

突然、彼女の後ろに葵と茜が現れた。美咲はビクンとして振り返り、

「所長、茜ちゃん・・・。いつ来たんですか？」

美咲は二人の派手なドレス姿に唖然としてしまった。葵は背中の大きく開いた白のドレスを着ている。茜は、可愛いフリルの着いたピンクのワンピースを着ている。

「たった今よ。貴女がここに入るのを見かけてね」

「・・・」

美咲は目をいつもよりウルウルさせている。葵はその様子にすぐに気づき、

「どうしたの、美咲？ あいつが何かしたの？」

「セクハラされたんですか、美咲さん？」

茜は好奇心むき出しで尋ねた。美咲は、

「彼、本気になってしまいました。フィアンセと別れたって・・・」

「あらま・・・」

葵もさすがにびっくりしたようだ。しかし茜はケラケラ笑って、
「美咲さん、モテるウ！」

と無責任発言をしている。美咲は困った顔で茜を見て、

「茜ちゃんたら、面白がらないでよ」

「ごめんなさーい」

茜はチロツと舌を出した。美咲は葵を見て、

「どうしたらいいでしょうか？」

「まア、仕方ないわね。結婚してあげたら？」

「そ、そんなア・・・」

もう美咲は泣き出しそうだ。葵はクスツと笑って、

「もちろん、ホントに結婚する必要なんかないわ。あいつからこつちが知りたいことを全て聞き出せるまで、その気にさせとけばいいのよ」

「難しいですよ。神戸さんで、結構堅いし・・・」

「そこが腕の見せ所よ。私を悪者にしていいからさ」

葵はウィンクしてみせた。美咲はキョトンとして、

「えっ？　どういうことですか？」

と尋ねた。葵は悪戯っぽく笑って、

「ウチの所長が、どうしても聞き出して来いって言ったんですウとか、目をウルウルさせながらお願いして、ちよつとだけ胸の谷間見せるとか、あいつの腕にしがみついて、おっぱい押しつけちゃうとかすれば、外務大臣の預金口座の暗証番号だって教えてくれるわよ」

「ええっ？」

美咲はもう、まさに目を白黒させて仰天していた。

「それ、面白いですね」

茜はまたまた無責任発言である。さすがに美咲もムツとして茜を睨み、

「じゃあ代わりに茜ちゃんやってくれない？」

と言った。すると茜は苦笑いして、

「私じゃダメですよオ。神戸さんで、美咲さんみたいな、穏やかな人が好みなんですから」

「そうそう。茜を好むような男は、少しロリコンの気があるのよね」

と葵が言ったので、今度は茜がムツとした。

「何ですかア、そのロリコンてエ！ 私、20歳ですよ。ロリコン男の対象じゃありませんてばア」

「ハハハ、そうね」

葵は愉快そうに笑って言った。そして真剣な顔で美咲を見て、

「実はね、神戸君から聞き出してもらいたいことがあるのよ」

と言って、イスバハンのことを簡単に説明した。その時、二人の女性が入って来たので、葵達は話を存在しない上司の悪口に切り替え、二人の女性が出て行くと、再び本題に入った。

「私達のことをそこまで調べられる情報収集能力と、事務所のシステムに気づく勘の良さは、ちょっと危険ですね」

と美咲は感想を述べた。彼女の顔はさっきまでのオドオドした女の顔から、すっかり頭脳明晰な探偵の顔に変貌していた。葵はその言葉に軽く頷いて、

「ええ。それもそうなんだけど、もつと気になるのは、セシオの前身よ。フランスの外人部隊にいて、暗殺を担当していたらしいから」なるほど。イスバハンという国のことと、情報部のがわかれはいいんですね？」

「そうね。あと、ファラ王女のことね。どんな子なのか、知っておきたいわ」

「そんなこと聞いてどうするのって言われたらどうしますか？」

美咲が尋ねると、葵はニコツとして、

「それは教えられませんが、またおっぱい押しつけばいいのよ」

「もう、所長つたら！」

美咲は剥れた顔をして、化粧室を出て行った。すると茜が、

「所長つて、美咲さんの胸にこだわりますね？ コンプレックスですか？」

と質問した。葵はビクツとしてから茜をキツと睨みつけ、

「違うわよ！」

と怒鳴った。しかし、否定したにも関わらず、葵は自分の胸をジッ

と見つめてしまった。

「女は胸の大きさじゃありませんよ、所長」

茜がそれに気づいたのか、そう言った。葵はフーツと溜息を吐き、
「あんたに言われたくないわよ」

と言い返した。茜はペロツと舌を出して肩を竦めた。

「何かフランス料理食べるの、嫌になっちゃったなア。このまま帰ろうかなア」

葵はとぼけてそう言った。茜は仰天して、

「ええっ？　そ、そんなア。どうしてですかア？」

「何か今、すぐく不愉快な気分になったからよ」

「ええっ？」

茜は自分の余分な一言が葵の気まぐれを引き起こしてしまったのに気づき、慌てふためいた。

「ご、ごめんなさい、所長。許して下さい」

「何のこと？」

葵はまだとぼけている。茜は泣き出しそんな顔で、

「所長オ・・・」

とすぐるように葵を見つめた。葵はそれでも構わず、スタスタと化粧室を出て、レストランの入り口に向かって歩いた。

「所長つてばア・・・」

再び茜が話しかけると、葵はそこでやっと携帯電話を茜に見せて、
「あいつが接触を持ちかけて来たのよ」

「えっ？」

茜はキョトンとした。葵は茜の顔を見ないで、

「とにかくここを出るわよ。話は私のマンションで」

「・・・？」

茜はそれでもチンプンカンプンのようで、ポカンとした顔で、葵を追いかけた。

一方美咲は、神戸にイスバハンのことを話し始めたところだった。

（話してくれなかったら、所長の言ったようにするしかないのかなア・・・）

と美咲が思案していると、意外にも神戸はスラスラとイスバハンのことについて話し始めた。

「どうして貴女がイスバハンなんていう、日本人の大半が知らない国に興味を持ったのかはわかりませんが、僕とすれば、あまりイスバハンには関わらない方がいいと思いますよ」

「えっ？ どうしてですか？」

美咲はいかにも不思議そうに小首を傾げた。神戸はそんな彼女の仕草にドキツとして赤面しながらも、

「あの国とは、まだ日本政府は正式に国交を開いていません。ただ、日本人がイスバハンに行くことはできますけどね。イスバハンの一般市民は、日本に入国することはできないんです。我が外務省が、イスバハンを調査中なんです」

「調査中？」

「ええ。イスバハンは今から20年ほど前にフランスから独立した、北アフリカの小さな王国ですが、国情がよくわからないんです」

「わからないって、どういうことですか？」

美咲はついに身を乗り出して尋ねた。神戸は近づいた彼女の顔をジツと見つめて、

「イスバハンには、観光名所があるわけでも、貿易の目玉になるような特産品があるわけでもありません。でも国は富んでいて、王室はかなり優雅な生活をしていますし、国民の生活レベルもモロッコに次ぐくらいのもんです。何故そんなに豊かなのか、理由がはっきりしないんです」

美咲は背筋が寒くなる思いがした。

（所長の話と考え合わせると、イスバハンで、一体どういう国なのかしら・・・？）

「これは極秘情報なのですが、今そのイスバハンの王女であるファラ・ピクノ・ルミナが、日本に来ているんです」

「そうなんですか」

美咲はあっさりと嘘をついた。神戸はテーブルの上の料理を見つめて、

「外務省は、王女の目的が何であるのか、目下調査中です。そして彼女に同行して来た、セシオ・レ・クリオという情報部の部長には、防衛省のスタッフが監視をつけているようです」

（篠原さんかしら？）

と美咲は思った。篠原というのは、シャーロットが葵をからかった時に言った、「防衛省統合幕僚会議情報本部の彼」のことである。

「そんなわけですから、どういう事情でイスバハンのことを調べているのか知りませんが、もし依頼を受けているのであれば、キャンセル料を支払ってでも、手を引くべきだと思いますよ」

神戸は美咲を再び見つめて言った。美咲は真顔になり、

「それは危険だから、ということですか？」

「ええ、そのとおりです」

神戸も真顔で応えた。美咲はニコツとして、

「ご忠告ありがとうございます。所長に神戸さんのご意見、伝えます」

「やはり仕事がらみなのですか？」

神戸は本当に心配そうに尋ねた。美咲は少々困った顔をして、

「ええ、そうですとしか、お答えできないんです」

「・・・」

神戸は黙って頷いた。彼もまた、そういう世界の男である。美咲の立場をよく理解しているのだ。

「美咲さん」

「はい？」

「今度こそ、お返事聞かせて下さいね」

神戸は微笑んで言った。美咲は苦笑いをして、

「は、はい」

と応えた。

「お腹すいちゃいましたよオ」

葵のマンションに着くなり、茜は口を尖らせて言った。葵はそれには応えず、広々としたリヴィングルームに大股で歩いて行き、その奥のダイニングキッチンへ 行くと、冷蔵庫の扉を開いて、
「さ、ここにあるもの、何でも食べていいから、少し大人しくして
いて」

と茜に言った。茜は小走りで冷蔵庫に近づいて中を覗いた。

「えーっ。冷凍食品ばかりじゃないですかア。所長つてば、手抜き料理しかないんですねエ」

「うるさいわね。文句言うのなら、何も食べさせないわよ！」

と葵が怒鳴った時、ドアフォンが鳴った。葵はすぐさま玄関に走り、ドアを開いた。

「よっ！」

威勢良く入って来たのは、黒系のスーツの上着を腕にかけた、浅黒い顔に角刈りの、いかにも鍛錬しているといった体型で、どちらかというとイケメンタイプの男であった。葵はムスツとして、

「一体何の用よ・・・」

と言いかけたところを、いきなりその男の唇で塞がれてしまった。

「うん・・・」

男と葵は数秒間、そのままキスをしていた。男の右手が葵の腰に延びた時、

「ちよ、ちよっと！」

と葵は男を突き放し、口を拭って睨みつけた。

「いきなり何するのよ、この変態！」

「変態はないだろ？ 俺達、恋人同士じゃないか？」

「誰が？」

葵は今にも噛みつかんばかりに男に怒鳴った。男は肩を竦めて、

「へいへい。私が悪うございました」

と謝ってみせた。するとそこへ、ハムをくわえた茜がピョコンと顔を出し、

「もういいですか、所長？」

と尋ねた。葵は顔を赤くして、

「何よ、その言い方は？」

「へへへエ」

と茜はハムをパクツと食べて笑った。すると男は茜を見てニヤツとし、

「茜ちゃんも、あと5年したら可愛がつてあげるからねエ」

「やアだア、篠原さんたらア」

茜はケラケラ笑いながら、リビングルームの方へ歩いて行った。

葵はそれを見届けてから篠原と呼ばれた男を見て、

「話を元に戻すわね。一体何の用？」

と尋ねた。篠原はフツと笑って、

「お前ら、イスバハンとどういう取引しているんだ？」

と尋ね返した。葵はギョツとして、

「どうしてそんなこと知っているのよ？」

「イスバハン情報部のセシオ・レ・クリオは、来日した時から、我々情報本部がマークしているんだ。今日、奴を尾行していたら、お前の事務所に立ち寄ったんでな」

「セシオを尾行？ どうして？」

葵は篠原にスリッパを出した。彼はスリッパを履きながら素早く葵の肩を抱き、

「詳しい話は、酒でも呑みながらにしようか」

とリビングルームに向かって歩き始めた。葵はうつとうしそうな顔で、

「ええ、そうね」

と応えた。その時、またドアフォンが鳴った。葵はいい口実とばかりに、

「失礼」

と篠原の手を振り払い、玄関に戻った。

「どうぞ」

葵の声に応じてドアノブが回り、美咲が入って来た。

「あら、早かったわね。神戸君は？」

と葵が尋ねると、美咲は恥ずかしそうに、

「もう帰りました」

と答えた。

「よオ、美咲ちゃん。元気か？」

篠原が戻って来た。美咲はビクツとして篠原を見上げ、

「ど、どうして篠原さんが？」

「まア、詳しい話はあとあと！ ささっ、奥へ行きましょ」

篠原はヘラヘラしながら、葵と美咲の肩を抱き、両手に華状態でリビングルームに向かった。

「日本政府は信用していない、か」

葵と美咲から概略を聞いた篠原は、ソファに身を沈めてそう呟いた。葵はフローリングの床に敷かれたカーペットに直に腰を下ろしてガラスのテーブルに頬杖をつき、

「そうよ。セシオって男、かなり危ない感じがしたわ」

「そりゃそうさ。だからこそ、防衛省は独自の判断で、奴を尾行することにしたんだからな」

と篠原は水割りを飲みながら言った。美咲が空になったグラスに焼酎を注ぎながら、

「神戸さんも、イスバハンは危険だから手を引いた方がいいって言うてました。どうして危険なんですか？」

篠原は美咲を見て、

「得体の知れない国なんだよ。だから外務省も警戒しているし、俺達も過敏になっている」

「もう尾行はいいの？」

葵が口を挟んだ。篠原はニヤツとして、

「まアな。交代したのさ」

と言ってから真顔になり、

「王女のガード、引き受けるつもりか？」

「断ったら何かありそうだからよ」

「それはな」

篠原は腕組みをして考え込んだ。そこへ茜がピザを持って来た。

「さアさ、食べて下さい、冷食ですけど」

「おおつ、こりやありがたい。朝からロクなもん食ってないんだ」

篠原はピザを皿ごと受け取ると、まるで流し込むようにペロリと一気に食べてしまった。

「・・・」

持って来た茜と美咲は啞然としていたが、葵は呆れて、

「全く、下品なんだから」

「ハハハ」

篠原は口の周りをティッシュで拭いながら苦笑いした。そして真顔に戻り、

「俺も神戸と同じ意見だ。手を引いた方がいい」

「でも・・・」

と葵が反論しようとする、篠原は葵の唇に人差し指を押し当てて、
「手を引くリスクの方が、このまま依頼を受けるリスクより小さい
と思うんだが？」

「そ、それは・・・」

葵は篠原の指を払いのけて、口籠った。篠原は美咲からグラスを受け取って、

「それに俺が気になるのは、あのイギリスのじゃじゃ馬が王女に同行しているってことだ」

「シャーロットがどうかしたの？」

と葵は篠原を見た。篠原は大きく頷いて、

「あの女、仮にもスコットランドヤード特別局の捜査官だぜ。その

辺のこそ泥相手に動くような奴じゃない。あの女が動いたのには、それなりの理由があるはずだ」

「そうね。いくら女王の頼みでも、日本にまで同行するっていうのは、何かあるとしか思えないわね」

葵は考え込みながら同意した。すると茜が、

「篠原さんもあのデカ乳女、嫌いなんですか？」

と口を挟んだ。篠原はニヤツとして、

「そう。俺は胸のでかい女は嫌いなんだ」

「だから所長のことが好きなんですね？」

茜のあっけらかんとした言葉に篠原はゲラゲラ笑い、

「そうかもな」

「何よ、それ？」

当の葵はカンカンになり、茜を睨みつけた。茜はまずいと思ったのか、

「あつ、ピザもう一枚焼いてたんだ」

とキッチンに走って行ってしまった。

「俺、何の話してたんだっけ？」

篠原がとぼけると、葵はキツとして彼を睨み、

「シャーロットのことよ！」

「あ、そうそう。あの女にも、要注意だぜ、葵」

篠原はクスクス笑いながら言った。葵はツンとして、

「ええ、そうね」

と応えた。そして、

「それより、王女のこと、何か知らない？」

「ファラ王女のことか」

篠原はグラスをテーブルの上に置き、

「あの王女、ホントに箱入り娘って感じだよ。でも、我が儘ではないらしい」

「で、胸はでつかいんですか？」

茜がピザをテーブルの上に置きながら尋ねた。篠原は笑って茜を

見上げ、

「茜ちゃんも葵と同じで、相当胸にコンプレックスあるみたいだな？」

「あら、私はまだ発育中ですけど、所長はもう成長の見込みはありませんから」

と茜が言ったので、葵が、

「何ですって？」

「きゃっ！」

茜は楽しそうに再びキッチンに行ってしまった。葵は鋭い眼で篠原を睨み、

「胸のことはどうでもいいわ。王女のこと、他に何か知らないの？」と尋ねた。篠原はピザを一枚パクつきながら、

「そうだな。王女の来日理由、憲法の研究だったよな？」

「ええ、そうみたいね」

「彼女、日本国憲法を全部暗記しているらしいぜ。しかも、日本語でな」

葵は目を見開いて、

「じゃあ、彼女が憲法の研究をしているっていう話は本当なのね？」

「そのようだ。その辺歩いているバカな大学生より、よっぽど詳しいらしいぜ」

「フーン……」

葵は意外そうに頷いた。

「私、王女の好奇心を利用して、セシオが日本に来る口実を設けたのかと思ったんだけど」

「セシオはその点では無実だな。奴は王女にせがまれて、仕方なくついて来たようだ。ただ、それだけなのかどうかは、今後の展開次第だな」

「……」

葵は納得できないという顔で考え込んだ。

「王女は自分の命が狙われていることは知っているようだ。セシオ

に同行をせがんだのも、そのせいだろう。セシオにしてみれば、それが渡りに船だったのか、それとも厄介な仕事が増えたのか、今のところはわからないけどな」

と篠原は言い、グッとグラスをあおった。葵が、
「防衛省は、王女の命を狙っている殺し屋の正体、わかっているの？」

と話題を変えた。篠原はグラスを美咲に渡して、

「まだだ。何しろ、日本政府を無視して、民間の探偵事務所に護衛を依頼するような連中だからな。俺達のような人間には、ガードが固いのさ」

「じゃあ、尾行しているのもわかっていたのね？」

「だろうな。全然気づいていないフリが、アカデミー賞ものの演技だったよ」

と篠原は言ってから、目を細めて葵を見ると、

「お前を選んだ理由、シャーロットからの推薦だという話を信じるか？」

と尋ねた。葵はピザを手に取り、

「半分も信じちゃいないわ」

とピザをほおばった。篠原はニヤリとして、

「さすが、葵だ。俺も信じていない。何か裏がある。でなきゃ、王女のお守りはシャーロット一人で十分なはずだ」

「そうね」

二人の会話に全く入り込む余地のない美咲と茜は、顔を見合わせ
て立ち上がった。美咲が、

「それじゃ、私達、そろそろ帰ります」

「えっ？ まだ早いじゃないの。ゆっくりしていきなさいよ」

葵は篠原をチラチラ見ながら言った。しかし美咲は、

「明日早いので。それにお邪魔のようですから」

と篠原の顔を見た。篠原はニマーツとして美咲を見た。葵はカツと赤くなつて立ち上がり、

「バ、バカね。そんなこと、気にしないでよ。こいつももう帰るから」

「お、おい！」

篠原は葵の発言にびっくりして彼女を見上げた。ところが葵は、

「さ、早く立って！」

「冷てえなア」

篠原は仕方なさそうに立ち上がった。葵は美咲と茜を見てから、

「二人を送ってあげて。何かと心配だから」

「ああ、わかった」

篠原は葵の本心に気づき、真顔で応えた。美咲と茜は、再び顔を見合わせた。

三人を送り出した葵は、そのままバスルームに行き、ドレスを脱ぎ捨て、熱いシャワーを浴びた。

（イスバハンか……。とにかく明日、セシオから詳しい話を聞き出そう）

彼女の美しい肌を雫が流れ落ちる。茜にあまり「小さい」と言われるので、自分でも気にしてしまっているが、葵の胸は決して貧弱ではない。もちろん、巨乳と いうほどではないが……。

「どっちにしても、久しぶりに面白い仕事になりそうね。相手がどんな奴かわからないけど、私達にちょっかい出したこと、たっぷり後悔させてあげるわ」

と葵は呟いた。

第五章 王女の訪問 7月 2日 午後4時

「出納帳だけかと思つたら、請求書も杜撰ですね。一体どうなっているんですか、水無月さん？」

昨日来た税務署の調査官が再び事務所にやって来ていた。葵はただニコニコして、

「はい、申し訳ありません」

と言った。若い調査官は葵の笑顔を見て赤くなり、

「とにかく、これでは青色申告とは言えません。今回は厳重注意という事ですませますが、次回からはそうもいきませんので、必ずキッチンと記帳して下さい」

「わかりました。ありがとうございます」

葵はスツと調査官の右手を両手で握りしめた。調査官は真つ赤になり、

「し、失礼します」

と慌ててカバンを抱え、逃げるようにして事務所を出て行ってしまった。葵はケラケラ笑って、

「可愛いこと。またいらっしゃいね」

「所長つてば、ホント、意地悪ですね」

茜は調査官に出したコーヒートを片づけながら言った。葵は肩を竦めて、

「あの男、どうも私に気があるみたいなのよ。去年も同じこと言つて帰ったんだから」

「ええっ？ 去年からこんな状態なんですか、ここの経理って？」

茜は仰天して手を止めた。葵はフツと笑って、

「ま、去年は始めたばかりでわからなくてって、私が嘔泣きしたんだけどね」

「あっきた。若い男をあまりからかうと、行き遅れますよ」

茜がたしなめるように言うと、葵はムツとして、

「何よ、行き遅れるって？ 他人聞きの悪いこと、言わないでよ」と言ってから、美咲の机に目をやり、

「そう言えば美咲はどうしたの？ 今日はず定はなかったでしょ？」

「神戸さんに呼び出されて、銀座で待ち合わせです」

「えっ？ また？ とうとう結婚迫られるのかな？」

「あつ、でもイスバハンの件みたいです。昨日の帰りに美咲さんの携帯に神戸さんから電話があつて。私、その場に居合わせてたので」「イスバハンのか」

葵の眉がピクンと動いた。茜も神妙そうな顔で、

「かなり差し迫った様子でしたよ。ただ、会議があつて抜け出せないの、今日の夕方に会う約束をしたみたいですよ」

「そうか。それで、貴女の方は？」

葵がそう尋ねると、茜は顔を引きつらせて、

「はい。5時に赤坂のレストランで、待ち合わせです」

「あら、そう。頑張つてね」

「所長オ・・・」

茜は半べソ状態だ。しかし葵は、

「ダメ、甘えたつて。仕事なんだから」

「はい」

と茜は渋々返事をした。葵は真剣な顔になり、

「警察庁も、防衛省とは別行動をとっているはずだから、その辺のこと、うまく聞き出してよ」

「はい」

茜は覚悟を決めたのか、真顔になった。

「行つてきまアす」

茜は暗い表情のまま、事務所を出て行つた。葵はそれを見届けてから、自分の机に戻り、机の上のノートパソコンを開き、電源を入れた。ピツと音がし、齧りかけのリンゴが現れ、システムが立ち上がった。

「依頼のメールは届いているかな？」

彼女はブラウザを起動させ、電子メールをチェックした。

「新しいメールは届いていませんか。迷惑メールばかりだな」

迷惑メールの中にも何か情報が混じっていることがあるので、彼女は敢えて迷惑メールをブロックしていない。その時、ドアフォンが鳴った。

「どうぞ」

葵はドアを見て応えた。ドアノブが回り、一人の人物が入って来た。

「あつ、貴女は・・・」

と葵は席を立って訪問客に近づいた。

「はい、私はイスバハンの王女、ファラ・ピクノ・ルミナです」

訪問客はニコツとして答えた。葵も微笑んで、

「お一人ですか？」

「はい。セシオは下の駐車場で待たせております」

とファラは言った。顔はやや黒いが、どこかでフランスの血が混じっているのか、目の色は緑色で、髪も黒ではなく少し茶色っぽい。

服装は地味で、白でまとめてはあるが、特に飾りらしいものもないワンピースで、靴も平凡なアンクルブーツ。どこから見ても、気のいい田舎娘という印象を、葵は受けた。

「写真よりずっと素敵なので、びっくりしました」

葵が右手を差し出すと、ファラも、

「私も、貴女がセシオから聞いていたのよりずっと美しい方なので、びっくりしました」

と右手を差し出し、葵と握手を交わした。

「それはどうも。どうぞ、おかけ下さい」

葵は右手でソファを示し、給湯室に向かった。するとそれに気づいたファラが、

「どうぞ、おかまいなく。お話はすぐにすみからです」

「そうですか？」

葵は歩を戻し、ファラが座るまで待つてから、彼女と向かい合っ

て腰を下ろした。

「昨日はセシオが失礼いたしました。唐突な依頼をして、ご迷惑だったでしょうね」

ファラの日本語は茜よりよっぽどまとまだ、と葵は思った。そして、

「いえ、とんでもありません。当事務所のモットーは、他の事務所にできないことをすることです。王女様のご依頼をお受けできるのは、当方だけだと自負しております」

「まア・・・」

ファラはクスツと笑った。葵は、あどけなさの残るファラの笑顔を羨ましく思いながら、

「昨日のお話の続きでしょうか？」

と尋ねた。ファラは頷いて、

「そうです。セシオは概略を話ただけでしょうから、私が詳しいお話をいたしましょう」

「わかりました」

葵は脚を組んで応えた。ファラは真顔になり、

「私の命を狙っている殺し屋は何人もいるようなのですが、その中でも手強いのが、ソレイユと呼ばれているテロリストです」

「ソレイユ？ フランス語で太陽ですね？」

「はい。そのソレイユが、国籍と姓名を偽り、日本に來ているらしいのです。これは、ホームズさんに教えてもらいました」

とファラが話すと、葵はムツとして、

「シャーロットに？ 彼女、今度の事件、どこまで関わっているのですか？」

ファラは葵の反応に少々驚いたようだったが、

「ホームズさんは、女王陛下のご依頼で、私に同行されただけで、それほど深く関わっていないと思いますか？」

「そうですね・・・」

葵は納得しかねるという顔で、ファラを見た。そして、

「それで、ソレイユとかいう殺し屋は、どうしているかわかっているのですか？」

「いえ。日本に来ているらしいことが、ICPO（国際刑事警察機構）の連絡でわかっているだけです」

ファラは困惑した顔で言った。葵は腕組みをして、

「貴女は何故命を狙われているのだと思いますか？」

と尋ねた。ファラは小さく首を横に振り、

「わかりません。私のような者の命を狙って、一体誰が得をするのか・・・」

「王族に怨みを持つ者はいませんか？」

「いるかも知れません。でも、それなら私を狙わずに父を狙うはずです。でも、父は一度も殺し屋に襲われたことはありません。私だけなのです」

ファラの目は悲しみに潤んでいた。葵はそれでも構わず、

「貴女が唯一の王位継承者なのですね？」

「えっ？」

ファラはハツとして葵を見た。葵は、

「なるほど。殺し屋をけしかけた者の狙いは、王家の断絶かも知れません」

「そんな・・・」

ファラの潤んだ目が凝固したように動かなくなった。しばらく沈黙の時間が流れた。

「そこまで怨まれることがあるとは思えません」

とファラはやつと口に出して言った。葵は、

「かも知れませんが、憎しみとか怨みは、個人の主観によるところが大きいからです。勝手に怨む人間だっているでしょうしね」

「だとしたら、私はずっと命を狙われるのですね。死ぬまで・・・」

ファラのその言葉に、葵は少し言い過ぎたと思い、話題を不意に変えた。

「それより、貴女は自分の命が狙われているのに、何故日本にいら

したんですか？」

ファラは潤んだ瞳をハンカチで拭ってから、

「私は日本の憲法に大変興味があります。特に、第九条に」

「戦争の放棄、ですか？」

葵は自分の憲法に対する知識不足を思い知りながら言った。

（美咲がいれば、大丈夫だったのになア）

法律部門は、葵より美咲の方が詳しい。彼女は某国立大学の法学部の全課程を2年で修了させ、さっさと中退してしまった秀才なのだ。ファラは急にニコニコして、

「そうです。我が国には現在王国軍が存在していますが、ゆくゆくはこれを廃して、日本の憲法のような条文を作り、今のイスバハンの憲法に加えたいのです」

「そうですか。でも、日本国憲法は、押しつけられた憲法で、今の時代にはそぐわないと言われていますよ」

と葵が精一杯の知識で言うと、ファラは目を丸くして、

「とんでもありません。日本国憲法は、21世紀に向けて作られた、すばらしい憲法です。ちょっと時代を先取りし過ぎたので、今の時代にそぐわないように見えるだけです」

（ヘエ……。そういう見方もできるのか・・・）

葵はファラの考え方にすっかり感心していた。

「日本はまた、昔の歴史を繰り返すつもりなのかのように、第九条改正とか、自衛隊を増強しようとかしています。とても悲しいことです」

「・・・」

ファラほどの考えを持つ日本人女性が、一体何人いるだろう？

葵は自分も含めて、日本は女が政治に対して無知過ぎると思った。

「私の使命とっているのです。イスバハンの憲法に戦争の放棄を書き加えることが」

ファラの目は、キラキラと輝くように生き生きとしていた。

「その使命感が今の貴女を突き動かしているのですか？」

葵は居ずまいを正して、ファラを見ていた。ファラはそんな葵の態度に気づいて赤面し、

「ごめんなさい。私、つい・・・」

「いいえ、とんでもない。すばらしいです。日本の若い女共に、少しは見習わせたいくらいです」

と葵はニツコリして言った。ファラは嬉しそうな顔で葵を見て、

「そ、そうですか・・・」

と照れ笑いをした。葵は再び真顔に戻り、

「それからもう一つ伺いしたいのですが」

「はい」

ファラもキリツとした顔になり、葵を見た。葵は、

「貴女は私達の正体をどこまでご存じなのですか？ 英国の女王陛下から、何をお聞きになりましたか？」

と尋ねた。ファラはキョトンとしていたが、

「私、女王陛下から伺ったのは、貴女方が日本で最高のボディガードだということですが。それが何か？」

と答えた。今度は葵が驚く番だった。

（ どういうこと？ シャーロットは、私達の秘密の漏洩源は女王陛下だと言っていた。でも王女は女王陛下から何も聞いていない・・・ ）

「あの・・・」

ファラが不思議そうな顔で葵を見ているので、彼女は苦笑いをし
て、

「あつ、失礼しました。変なことをお尋ねしてしまいましたね。気になさらないで下さい」

「はい・・・」

ファラはそれでも不思議そうな顔をしていた。葵はそんな王女の視線を避けるように、

「あつ、そうそう。王女様、ご依頼をお受けいたします。いつからガードを始めたらよろしいですか？」

と唐突に尋ねた。ファラは虚を突かれたような顔で、

「はい、その、今からでもよろしいでしょうか？」

と応えた。これには逆に葵も意表を突かれたようだったが、何とか、

「ええ、大丈夫です」

と応え返した。そして、ホツとしたせいか、ニコツとした。王女も

それに応じてニコツとした。

「ありがとうございます、水無月さん」

「葵でいいですよ、王女様」

と葵が言うと、ファラも、

「では私も、ファラで結構ですわ」

と応えた。

葵とファラはその後とりとめもない話をした。どこの店の何がおもしろいとか、どこの店のどんな服が日本で流行っているとか。そのうちに、ファラは駐車場にセシオを待たせていることを思い出し、話を終わらせた。

「これから首相官邸に行きますので、一緒にいらして下さい」

ファラは立ち上がって言った。葵も立ち上がり、

「わかりました。参りましょう」

と答えた。そしてそのままドアに近づいたので、ファラが、

「身支度はいいのですか？」

と声をかけた。葵は振り返ってニコリし、

「はい、大丈夫です」

「何も持たないのですか？ 銃とか？」

ファラはびっくりして尋ねた。葵は微笑んだままで、

「ええ。日本では、私立探偵は武器の携帯を許されていません」

「ああ、そうですね」

ファラは自分の情報不足に気づき、恥ずかしそうに笑った。葵は急に真顔になり、

「それに武器を持たなくても、私はファラ王女を守る自信がありま

す」

「はい」

ファラも真面目な顔で応じた。葵は再びニコツとして、

「さア、参りましょう、王女様」

「ええ」

葵はドアを開き、ファラを送り出した。そしてドアを後ろ手に閉じ、鍵をかけ、ファラの前に立った。

「こんなに明るいうちから襲って来るとは思えませんが、とにかく警戒するに越したことはありませんから」

「わかりました」

葵はスツと横にどいて、

「前をお歩き下さい。私は後からついて行きますので」
「はい」

二人は長い外廊下をエレベーター目指して歩き出した。

第六章 いくつもの影 7月 2日 午後5時

茜は、相手を待ちながらいろいろ考えていた。

確かにあの男は、別に何かして来る訳ではないし、嫌らしいことをする訳でもない。しかし、目が怖い。茜を見る目は、普通の女性を見る目と明らかに違う。今一部地域で流行している「アキバ系」の目だ。あの人、私にメイド服か、セーラー服でも着させたいのではないだろうか？ それで写真を撮って、「萌えー」とか言い出しそう。だが、肩書きは警察庁のお役人だ。もうわけわかんない。茜は思わず、フーツと溜息を吐いてしまった。

「ごめん、茜ちゃん。待たせたみたいだね？」

男の声に、茜はハツとして我に返り、顔を上げた。一気に現実に取り戻された感じがした。

（ああ、ここ、レストランの中だったんだ・・・）

茜は男の顔を見て、やっと状況を把握した。

「まだ何もオーダーしていないの？」

男はスーツの襟を直し、ネクタイを締め直して尋ねた。茜はうつむいたままで、

「は、はい・・・」

と答えた。男はフツと笑って、ウェイターを呼んだ。

顔は悪くない。いやむしろ、周りの女性に羨ましがられるようなイケメンだ。しかし、性格に問題がある。男の名前は大原 統^{しゅう}。警察庁警備局外事課勤務の、キャリアである。この男、はつきり言う。とロリコンの部類に入る。それもストライクゾーンと真ん中くらいだ。しかも、自覚症状がないという悪質さまで兼ね備えているのだ。「まさか君の方から誘いの電話をくれるなんて思っていなかったよ」大原は実に嬉しそうに言った。茜は苦笑いするだけだ。

（そりゃそうよ。所長が私の声を真似て、大原さんに電話しちゃったんだから・・・）

しかし葵には逆らえない。そんなことをしたら、大原に会う以上に嫌な思いをしなければならぬからだ。

その内容のことはともかく、今はこいつを何とか利用して、情報を手っ取り早く入手しようと茜は考えた。

「で、今日はどうしたのかな？」

大原はニコニコしながら茜に尋ねた。茜は作り笑いを精一杯して、
「実はア、大原さんにイ、お聞きしたいことがあるんですウ」

といつにも増して、大原が喜びそうな口調で喋った。すると大原はますます嬉しそうに笑って、

「どうぞ。僕で答えられることなら、何でも聞いてよ」

と茜をジッと見つめて言った。茜は全身に鳥肌が立つ思いがしたが、葵の激怒した顔を思い浮かべて何とか我慢し、口を開いた。

「実はア、今私達イ、イスバハン王国の人に依頼をされているんですウ」

茜がそこまで話すと、あれほどニコニコしていた大原の顔が文字通り別人のように険しくなり、目が辺りを探るようにせわしく動いた。

「イスバハンだって？ 茜ちゃん、あの国のどんな人から、何の依頼を受けているの？」

大原のその顔は、茜が初めて好感を持った顔だった。彼はまさに今、警察庁のエリートに戻ったのだ。

（あれエ、どこまで話しちゃっていいんだっけ？）

茜は一瞬迷ったが、すぐに考えるのをやめた。

（そんな難しいことさせようっていう、所長が悪い！）

そう結論を出した彼女は、知っていることを全て大原に話した。

「・・・」

大原はしばらく腕組みして黙り込んでしまった。茜も仕方なさそうに黙って、テーブルに置かれた冷めかけたスープをジッと見つめていた。

「ここじゃできないな。とにかく食事をすませてしまおう」

とやつと大原が口を開いた。茜はピクンとして、

「え、ええ・・・」

と応えた。

その後二人はただ黙って出される料理を食べた。そして、食後のコーヒーを出されたところで、再び大原が口を開いた。

「この話、できれば水無月さんの事務所でいたいんだけど。大丈夫かな？」

「そ、それは大丈夫だと思いますけど・・・」

あまりに意外な展開のため、茜は半分呆気にとられていた。大原はニコツとして、

「じゃあ決まりだね。出ようか」

と立ち上がった。

「は、はい・・・」

と茜もゆつくり立ち上がった。

「ターゲット確認。ターゲットAは、今Aの車をレストランの正面に乗りつけたところです」

「了解。そのまま、監視を続行しろ」

「了解」

暗がりの中に何人が動く連中がいた。彼らは、大原と茜を監視しているようだった。

大原は黒塗りのセダンをレストランの正面に回すと、運転席から出て助手席を開き、茜を乗せた。

「茜ちゃん、誰かに見られている気がしないか？」

「えっ？」

茜はハツとして周囲を見た。しかし大原は、

「あまりキョロキョロしない方がいい。つけさせよう」

「・・・？」

大原は運転席に戻り、セダンをスタートさせた。外はすっかり夕

闇に染まり、ほんの少しだけ、太陽の光が西の空に残っていた。

「どうするつもりなんですか？」

茜はシートベルトを着けながら大原に尋ねた。大原も左手でシートベルトをカチツと固定して、

「まず相手が何者で、何のために僕らを監視しているのか、その理由を知らないかね」

「はい・・・」

茜は少しずつ大原のことを見直し始めていた。

（この人、だたのロリコンじゃなかったんだ・・・）

それはそうだ。単なるロリコン男が、警察庁の幹部候補として、エリートコースに乗れる訳がない。大原は優秀な警察官なのである。セダンは大通りを法定速度を守って走った。この辺もやはり警察官だ。決して無茶な運転はしない。

「三台尾けて来ているね」

大原はルームミラー越しに後方を見て言った。茜もショルダーバッグからコンパクトを取り出して後方を確認し、

「はい。巧みに車両を入れ替えています、確実に三台、この車をマークしているようですね」

いつものダーダー口調を封印して、キチンとした日本語を喋った。「一応、撒いてみようか」

大原はスイツとハンドルを切り、左折した。すると三台のうち二台はそのまままっすぐ走って行き、残りの一台が左折して来た。その後ろを先程まで停止していた車が走り出し、追跡を始めた。

「こいつは・・・」

大原は少しだけ驚いたようだった。茜もギョツとしていた。

「只の悪戯じゃなさそうだな。仕方がない」

大原はアクセルを踏み込むと、セダンを加速させた。

「スピード違反ですよ、大原さん」

と茜が言くと、大原はフツと笑って、

「緊急だから仕方ないさ」

と答え、セダンをグングン加速させ、黄信号で交差点を通過し、つけて来る車が赤で停まったのを見届けると、中央分離帯の切り目を右折し、細い路地に入った。

「まさかこの道にもいるとは思えないんだけど・・・」

と大原は独り言のように呟き、アクセルを戻し、減速した。

確かに尾行して来る車はいなくなった。取り敢えず撒いたようだ。「さてと。水無月さんに連絡して、茜ちゃん」

「はい」

セダンは右手にお堀を見ながら、水道橋方面へと進路を変えた。

一方葵は、茜からのメールをファラと一緒に乗っているリムジンの中で受けていた。

（ 尾行された？ ）

葵もさすがにビクンとした。

（ 一体何者？ どういうことなの？ ）

「どうかされたのですか、葵さん？」

ファラが葵の様子に気づき、声をかけて来た。葵はハツとしてファラを見ると、

「あ、いえ、別に大したことではありません。ちょっと部下の子がトラブルを起こしたみたいで・・・」

「まア、それはご心配ですね」

「はア・・・」

葵は苦笑いした。それより彼女は、ファラと会った橋沢首相の態度が気になっていた。

（ もともと胡散臭いオジさんだけど、ファラに対するあのバカ丁寧な態度、何か変だった・・・ ）

しかし今は、目の前に迫った緊急事態を解決する方が先である。

（ 私はファラから離れる訳にはいけないから・・・ ）

葵は美咲の携帯にメールを送り、すぐに事務所に向かうように指示した。

（茜達を尾行したということは、当然のことながら、事務所の位置もわかっているはず。でもじゃあ何故、見え見えの尾行をしたのかってことになるわね）

葵はある推論を立てた。

（茜達を尾行することが目的じゃないとしたら？）

そう考えるとすつきりするが、それだとさらに相手の考えがわからなくなる。

（かなり手強い連中が相手ってことか・・・）

葵はファラをチラツと見てから、シートにもたれかかった。

美咲は葵からのメールをホテルの一室で受けていた。とうとう彼女は神戸の要求に応じてしまったのかと思いきや、そこは外務省がお忍びで日本に来る外国の王室クラスの人物を宿泊させるために常にキープしている、盗聴を完全にシャットアウトできる特別室で、彼女は神戸から重大な話を聞いていた。

「どうしたんですか？」

話を終えて椅子から立ち上がりかけた神戸が尋ねた。美咲も立ち上がりながら、

「あ、ちよつと業務連絡です」

と言って話をそらせた。神戸はそんな美咲の考えを知っているのかどうかかわらないような顔で、

「今日は仕事の話でしたが、今度はプライベートでこのホテルにお誘いしてもいいですか？」

と尋ねた。美咲はビクツとして苦笑いをし、

「え、あの、その・・・」

と口籠り、俯いた。困ってみせると、神戸は慌てて前言を撤回する男なのだ。

「す、すみません。調子に乗り過ぎたようです」

美咲はそんなところに少し惹かれてもいた。彼女も神戸のことが嫌いな訳ではない。ただこういう関係が嫌なだけなのだ。

茜と大原は、グランドビルワンの地下駐車場に来ていた。辺りはシーンと静まり返っていたが、二人は何者かの視線を感じていた。

「茜ちゃん、普通にしていって。何かあっても、僕が必ず君を守るから」
「は、はい」

茜は大原とタイミングを測って車を降り、エレベーターの扉に向かって歩き出した。

影が動いた。何人かが、確実に二人を取り囲むように動いている。
（何者なんだろう？）

茜は顔はエレベーターの方に向けたままで、目だけで影の動きを追っていた。大原も同じである。

（仕掛けて来るつもりはないのか？）

大原は影共から殺気を感じないので、少し不審に思っていた。

（じゃあ一体何のために？）

それは大きな疑問であった。仕掛けるつもりがないのなら、何のための尾行なのか？ 大原は思案した。

（まさか・・・）

彼は一つの結論を得た。

（もしそうだとしたら、どうする？）
額を汗が伝わった。

「どうしたんですか？」

大原の異変に気づいた茜が尋ねた。大原は作り笑いをして、

「いや、何でもないよ。さっ、エレベーターに乗ろう」

「はい・・・」

茜は不満そうに口を尖らせて頷いた。

（自分の読み通りだとすれば、連中は仕掛けては来ない。問題は
その真意だ・・・）

大原は上昇して行くエレベーターの中で、ずっと思索に耽っており、扉が開いたのにも気づかないほどだった。

「大原さん、着きましたよ」

茜が声をかけると、彼はハッとして、

「あ、そう、ごめん。ボンヤリしてたみたいだ」

と答え、慌ててエレベーターを降りた。

「美咲さん、もう戻っているかなア」

事務所へ通じる外廊下を歩きながら、茜が呟いた。彼女は影が追って来ていないのを悟り、すっかり気を緩めていた。しかし大原は、彼らの真意を測りかね、まだ当惑していた。

「早かったわね」

二人が事務所に入ると、ソファに座っていた美咲が言った。

「美咲さんこそ、早かったですね。また、屋上飛びですか？」

茜が悪戯っぽく尋ねると、美咲は恥ずかしそうにして、

「緊急の時は、あれが一番早いだよ」

「屋上飛び」とは、ビルの屋上、トラックの荷台の上と、まさしく忍びの技を駆使しての高速移動のことである。

「そうですね」

茜はニコニコしながらソファに近づいた。しかし、大原はまだ警戒しており、ドアを閉じながら、左右を見て、誰もいないことを確認してから閉じ切った。

「どうしたんですか、大原さん？ 誰も尾けていないはずですよ」

美咲も不思議に思い始めて尋ねた。茜も頷いて、

「そうですよ。この事務所に近づくのに、内部の者に気づかれない方法なんて、存在しないんですから、大丈夫ですよ」

「それはわかっているんだけどね」

と大原がトアに背を向けて言った時、美咲と茜がバツと身構えた。何かを感じたのだ。大原もハッとして、ドアの方を向き、一歩飛び退いた。

「ドアの向こうに誰がいる・・・」

美咲が小声で言った。茜が頷く。大原も、

「らしいな。しかし、殺気はないぞ」と言った。

「あつ、気配が消えた・・・」

と美咲は身構えるのをやめた。茜もスツと構えを解いた。

「何者なんだ・・・？」

大原は呟いた。美咲は大原を見て、

「何にしても、所長と連絡をとりましょう。でないと、これから先のことが決められませんから」

「そうだね」

大原は頷いて、ソファに座った。

その頃葵は、ファラと共に彼女の宿泊先である赤坂のホテルのツインルームにいた。

「ごめんなさい、葵さん。もう少し広い部屋を予約すれば良かったのですが・・・」

ファラは申し訳なさそうに言った。しかし葵は微笑んで、

「いえ、大丈夫です。むしろ、このくらいの方が王女様を守るのが楽になります。お気遣いなく」

と答えた。ファラはニツコリして、

「ありがとう、葵さん。お腹がすいていませんか？ 何かお部屋に持ってきてもらいましょう」

とベッドの脇にある電話に近づいた。

「伏せて下さい！」

葵がファラに飛びつき、彼女と共にベッドの間に伏せた。次の瞬間、窓ガラスが粉々に砕けて、二人の黒づくめの男が、上から垂れ下がったロープを伝って、飛び込んで来た。

「王女はここに伏せていて下さい」

葵はファラにそう言い聞かせると、バツと立ち上がった。

「へエ。顔まで隠しちゃってどういいうつもり？ このホテルのルームサービスは、いつから窓を割って入って来るようになったのよ？」

葵が挑発めいたことを言ったが、二人の男は黙ったままピアノ線のようなものを出し、ピーンと張った。

「そいつで首を絞めて殺すつもりなの？ もっとスマートな殺し方考えなさいよ」

葵は至って冷静だった。

（この手の連中は、あっさり片づけられる。問題は廊下にいる奴ね）

彼女は既に別の殺し屋が部屋の前に来ていることも承知していた。

「！」

二人の男は目で合図を交わすと、バツと葵達の方へ突進して来た。葵はすぐさまベッドのシーツを引き剥がし、二人に投げつけた。

「うわっ！」

いきなり視界を奪われた二人は、葵の回し蹴りの餌食になり、シーツごと床に崩れ落ちた。

「葵さん？」

ファラが顔を上げると、葵は、

「まだ伏せていて下さい。廊下にも一人、もっと手強いのがいます」
「えっ？」

ファラは一瞬キョトンとしたが、すぐに身を伏せた。葵はそれを確認し、シーツの中で気絶している二人を調べた上で、部屋のドアに目を向けた。

（こいつ、何を探っているの？ 何で仕掛けて来ない？）

次の瞬間、別の気配が背後に現れたので、葵はビクンとして振り返った。

「お前が、日本の女ニンジャか？」

イントネーションは多少おかしいが、流暢な日本語を使う、真っ黒なスーツに身を包んだ、金髪で長身の男が窓のそばに立っていた。

「い、いつの間に・・・」

葵は、手が汗でジツトリと湿っているを感じた。この金髪男は、全く存在を感じさせずに、部屋の中に入って来たのだ。葵にとって、男の強さよりも、そのことが衝撃的であった。

「ターゲットはお前ではない。その姫様だ。お前は消えろ」

「何ですって？」

葵はドアの外の殺し屋の気配がしなくなったのを知り、金髪男に全神経を集中させることにした。

（ファラと男の距離は2m。私とファラの距離は1m。ドアの外の奴に向かわなくて正解だった。でも・・・）

しかし葵は目の前の金髪男より、ドアの外にいた殺し屋の方が気がかりだった。

（まさかあいつ、この男の存在に気づいていたの？）

「一緒に死ぬのか？」

金髪の男はサングラスすらかけていない。端正な顔立ちで、シャロットの好みだ。私の趣味じゃない。あの女の好みだと思つと、心置きなく顔面を殴れる。

「あんた、顔に自信があるみたいね。王女に会いに来るバカ共は、ほとんど仮面を着けてるみたいだけど」

「私の顔を見た者は全て神に召されるから、隠す必要はない」

男は自信満々に言った。葵はムツとして、

「その癪に障る自信過剰もこれまでよ」

と身構えた。男はニヤリとして葵を見据えると、

「そんなに神に召されたいのか？」

「残念ねエ、私は仏教徒なのよ。神になんか召されたくないわ！」

葵が応じると、金髪男は、

「ならば地獄に落ちるがいい！」

と突進して来た。葵はスツと一歩引き、左へ飛んだ。

「かわせんぞ！」

男はまるで自動追尾装置付きのミサイルのように、葵を追いかけて来た。

（読まれてる？）

「終わりだ！」

男は右手をガツと開いた。人差し指の先に、キラリと光る鋭い刃が見えた。

「くっ！」

葵は男の攻撃を、ギリギリのところでかわした。しかしスーツは裂け、彼女の髪の毛も何本か切られた。

「遅いな。ニンジャとは、その程度なのか？」

金髪男は右手の指をクネクネと動かしながら言った。葵は切り裂

かれたスーツのジャケットを脱ぎ捨て、

「この服、高かったのよ。その分、あんたには地獄を見せてあげるわ」

と言い返し、キツと男を睨んだ。金髪男はフツと笑い、

「ほオ。地獄とはどんなものか、見てみたいものだな」

「望み通りにしてあげるわよ！」

葵はそう言くと、フツと姿を消した。男はビクツとした。

「ど、どこだ？」

「ここよ」

声は天井の方からした。男はハツとして上を見た。しかし葵はそこにはいなかった。

「何！？」

「バーカ」

葵は男の真後ろにいた。男が気づいた時は、すでに遅かった。葵の渾身の右フックが、男の鳩尾に決まっていたのだ。

「グエエエッ！」

男は胃液を吐きながら膝を折った。そして絞り出すような声で、

「バカな……。声は確かに天井から……」

と言った。葵はその男の顔面に回し蹴りを入れた。男はそのまま後ろにドサツと倒れ、白目を剥いて動かなくなった。葵はペロツと舌を出して、

「ほーんと、バカね。今の忍者はハイテクも使うのよ」

と超小型のスピーカーをピンと指で弾いて壁に張りつけてみせた。

「王女、もう大丈夫ですよ」

葵はベッドの方を見やり、ファラに声をかけた。ファラはそっと起き上がり、葵を見つけるや、彼女に抱きついた。

「怖かったわ、葵さん！」

「もう大丈夫ですよ、王女」

葵は苦笑いをしてファラを優しく抱きしめ返し、頭を撫でた。

「長い間うずくまっていたいらしたので、汗をかかれていますよ。シャ

「ワ―をお浴び下さい。私が浴室の外でガードしますから」

と葵が進言すると、ファラは目をウルウルさせて、

「葵さんも一緒にシャワー浴びてください。怖い・・・」

と怯えた様子で言った。葵は一瞬呆気にとられたが、すぐに気を取り直し、

「わかりました。私も一緒に入ります」

と肩を竦めて答えた。ファラは葵を見上げてニコツとした。

美咲達は、葵と連絡を取ろうとしていたが、運悪く葵は殺し屋との戦いの最中で、メールの着信に気づいていなかった。

「所長に何かあったみたいね」

美咲は携帯電話をスーツの内ポケットにしまつて呟いた。茜が大きく頷いて、

「そうですね。給湯室で私が小声で悪口言つても聞き逃さない所長が、メールの着信音に気づかない訳ありませんよね」

「そ、そうね」

茜の妙な話に、美咲は思わず大原と顔を見合わせた。

「ここにいても仕方がないから、水無月さんのいるホテルに行こうか」

と大原が言った。美咲と茜は、黙って頷いた。

葵達がいるホテルの浴室は、部屋から入るとまず洗面台がある。

トイレは別になっており、安ホテルのユニットバスとは違う。ファラは葵の目の前で服を脱ぎ始めた。姫様は別に葵に見られていることを恥じる様子もなく、スパツと衣服を脱ぎ、ブラジャーを外し、パンティーを落とした。彼女は普段から多くのお付きの前で裸になつているから、人が見ていてもあまり気にならないのであろうか。

（はア、10代って感じねエ・・・）

葵はファラの裸体に見とれてしまった。ツンと上がった乳房は、まさに若さの象徴だ。腰のくびれ方は、某メーカーの清涼飲料水の

ピンそっくりだ。尻もほどよく肉がついており、全く垂れていない。腿も、脹ら脛も、申し分のない太さだ。足首がキュツとしまっているのも羨ましい。ファラはそのまま浴室のドアを開けて中に入った。そして顔だけ出して、

「葵さんもすぐ来て下さいね」

と言いつつ、ドアを閉じた。まもなく、シャワーの音が聞こえて来た。

「フウツ・・・」

葵は思わず溜息を吐いてしまった。ファラの裸身を見てしまった以上、自分が裸になって後から入って行く自信がない。それはあまりにも恥ずかしいことだ。茜に言われると腹が立つのだが、ファラに現実というものを見せつけられると、自分の身体がそろそろピークを過ぎていることを実感せざるを得なかった。

「何迷ってるんだか・・・」

葵は我に返り、服を脱ぎかけた。その彼女の間が、後々まで響くことになるのだが、今の葵にそんなことを知る余地はなかった。

「キヤーツ！」

中からファラの悲鳴が聞こえた。葵はハッとしてドアに近づいた。「開かない!？」

浴室のドアは何故かロックされており、開かなくなっていた。

「チツ！」

葵はスツと肘を構えて、思い切りドアにぶつけた。しかし高級ホテルの浴室のドアは思いの外丈夫で、ビクともしない。

「それなら！」

葵は半歩離れて、ドアを回し蹴りした。ドアがミシツと音をたてて少し歪んだ。

「もう一発！」

次はジャンプして両足で蹴った。やっとドアが枠から外れ、葵はドアを上げて中に飛び込んだ。

「王女！」

と叫んだが、バスタブとの間のカーテンの向こうからは、シャワーの音が聞こえて来るだけだ。上を見ると、天井にある点検用の出入り口の板が外されており、何者かが侵入して来たのか、煤のようなものがタイルの上に落ちていた。

（しまった！ 一瞬でも隙を作った私のミスだ・・・）

葵は意を決して、カーテンを引いた。そこには、バスタブに半分浸かり、顔にシャワーを浴びせかけられて気を失ったままのファラがいた。どうやら殺されてはいないようだ。

「王女！」

葵はファラの脈を診て、瞳孔反応を調べた。異常は見られない。

「王女、しっかりして下さい」

「うっ・・・」

軽く呻いて、ファラは目を開いた。葵はずぶ濡れになりながらもシャワーを止め、ファラを抱き上げてそのままベッドまで運んだ。そしてバスタオルで身体を拭き、バスローブをかけた。

「王女様、大丈夫ですか？」

「葵さん・・・。私、さつき誰かに・・・」

「お考えにならない方がよろしいですよ。お休み下さい。フロントに電話をして、部屋を替えてもらいますから」

と言うと、葵はもう一度浴室に戻り、中を調べた。天井から侵入者そして、さつきは気づかなかったが、窓も破られており、そこから誰か侵入した形跡がある。葵は部屋に戻り、ジャケットのポケットから携帯を取り出し、

「警視庁ですか？ 総監室につないで！ えっ？ 私は水無月葵よ。そう言えばわかるわ」

彼女はいつになく腹が立っていた。誰にでもなく、自分自身に。（こんなヘマ、初めてだわ。ファラが無事だったから良かったけど・・・）

しばらくして警察が来た。その中にシャーロットの姿もあった。

もちろん、葵が呼んだのだ。

「大変なことになっているわね」

窓ガラスの破片を眺めて、シャーロットは言った。葵は濡れた髪を触りながら、

「全くよ。殺し屋共、さつさと連行してね」

と応じた。その時、鑑識課員の一人がシャーロットに近づき、耳打ちした。シャーロットは鑑識課員に頷いてから葵を見た。

「何？」

シャーロットの妙に嬉しそうな顔に、嫌な予感がしたため、葵の声には棘があった。

「葵、とうとうやっちゃったのね」

「えっ？　どういうこと？」

シャーロットの言っている意味が、おとぼけでなく、わからなかった。シャーロットは辺りをはばかりように、

「殺し屋達は三人とも、首の骨を捻られて死んでいたそうよ。浴室の天井裏にも一体、首を捻られた死体が転がっていたんですって」と小声で言った。葵は仰天した。

「まさか！？　私、誰も殺していないわよ。それは貴女もよくわかってるはずよ」

「もちろん、貴女達が決して人を殺めたりしないのはよくわかってるわよ。でも、状況が状況だけに、貴女の容疑は濃厚よ。ただ、正当防衛は成立するでしょうけどね」

葵はムツとしてシャーロットを睨んだ。シャーロットは肩を竦めて、刑事の一人に説明を求めた。

「どの殺し屋も、まるで巨人にでも捻られたように首が真後ろを向いてしまっています。恐らくこの連中は全員、自分が死んだと認識する間もなかったでしょう」

と刑事は答えた。それでも葵はムツとしたままだった。シャーロットは刑事に礼を言っ立去らせ、葵を見た。

「そんな地獄の門番みたいな顔で睨まないでよ。貴女も探偵なら、

自分が今すごく微妙な立場にいるってことくらい、わかるでしょ？
取り敢えず、事情聴取は受けてよね」

「わかったわよ」

葵は部屋の隅ですっかり驚愕して動けなくなっているファラに近づき、

「王女様、申し訳ありません。こんな状況なので、私はシャーロットと警察に行つて来ます。もうすぐ私の部下がここに参りますので、その者と一緒に私のマンションへ行つて下さい。今はあそこが一番安全だと思いますので」

と言つた。ファラは震えながら頷き、

「わかりました」

とだけ応えた。葵はシャーロットに目配せして、部屋を出た。廊下には人だかりができており、葵は好奇の目に晒された。そこへ美咲と茜が大原と共に現れた。

「所長、一体何があつたんですか？」

美咲が小声で尋ねた。茜はニコニコしているシャーロットを睨みつけてから、葵を見た。大原は身分証を見せて、近くにいた刑事に何かを訊いている。

「詳しく話している時間はないわ。王女を連れて、私のマンションに行つてちょうだい。私も後からすぐ行くから」

と葵は言い残し、シャーロットと共に去つて行つた。美咲と茜は顔を見合わせた。

「どうやら水無月さん、事情聴取のようだよ。ファラ王女を襲撃した殺し屋が全員、首を捻られて殺されたらしい」

と大原が説明した。美咲と茜はすっかり驚いてしまった。

第八章 最強の殺し屋 7月 2日 午後9時

葵とシャーロットを乗せた車は、ホテルから一番近い所轄署に向かった。

「犯人はどうやって脱出したのかしら？」

と葵が尋ねると、シャーロットは真顔で、

「脱出してないんじゃないの？」

「あのね・・・」

「葵、貴女立場わかつてる？ 今は私は貴女の友人じゃないのよ。その質問には答えられないわ」

シャーロットは妙に冷たい。彼女は何かを警戒しているようだ。運転している刑事か？ いや違う。もつと上だ。シャーロットは、警察内部に妙な動きをしている部署があるのを知っているのだ。彼女は小さな紙片を葵の手にそつと渡した。葵はそれを刑事に気づかれないように見た。

（盗聴の恐れあり？ 公安が動いている？）

葵はさすがに身震いしそうだった。公安が動いているとなると、一大事だ。やり方を考えないと、つけ込まれてしまうかも知れない。官庁の中には、葵達の存在を疎ましく思っている者もたくさんいるのだ。

一方美咲達は、ファラを連れ、大原の車で葵のマンションに向かっていた。

「公安が動いているんですか？」

後部座席で、ファラを気遣いながら美咲が尋ねた。大原は小さく頷き、

「そうだ。僕と茜ちゃんを尾行していたのは、間違いなく公安だよ。連中は遠巻きに尾行して、入れ替わりながら確実に追いつめて来る。僕が一緒だったから直接行動は控えたけど、美咲さんや茜ちゃんだ

けだったら、取り囲んで何らかの理由を付けて、連行していたかも知れないね」

「まア・・・」

美咲は驚きながらも、ファラの様子を観察していた。最初に比べ、随分落ち着いたようだが、まだ震えている。

「今は尾行されていないようですね」

美咲は顔を上げて後ろを見た。大原はフツと笑って、

「そのようだね。多分、水無月さんをマークしているんだろう。我々から得るものはないと判断したのだと思うよ」

「所長なら大丈夫ですよ。公安の人達なんて、一瞬で黙らせるスーパーテクがありますから」

助手席の茜が陽気に言った。大原は茜をチラッと見て、

「水無月さんが気づいていればいいけど」

「シャーロットさんが教えていると思いますよ」

とは美咲。大原は口笛を吹いて、

「なるほど。彼女なら、そのくらいのことは気づいているだろうね」と答えた。

葵達を乗せた車は、所轄署の車寄せに停止した。シャーロットはその玄関先に、署長と警視總監が来ているのに気づき、仰天した。彼女は呆れ顔で葵を見て、

「貴女、何かしたわね？」

「何もしてないわよ。ただ、友人にちよつと連絡しただけよ」

葵はすました顔で言っただけだ。

「水無月さん、申し訳ない。部下がとんだことを……」

警視總監は自分からドアを開き、葵の手を取って降車の手助けをするほど恐縮していた。

「これは總監、お忙しいのに所轄署までお出かけですか？ どうされたんです？」

葵は意地悪そうな笑顔でそう尋ねた。警視總監は額の汗をハンド

タオルで拭いながら、

「そういじめんで下さい。今回は我が方の勇み足です。ファラ王女を襲った殺し屋を始末したのは、他の誰かであって、貴女ではありません。とにかく、詳しい話は署長室で」

「わかりました」

葵はシャーロットと共に、警視總監と署長に先導されて、警察署奥の署長室に向かった。周囲の刑事や警官達は、一体何者だという目で、葵達を見ていた。

美咲達は葵のマンションに到着し、ファラ王女を葵の寝室に通し、葵のパジャマに着替えさせた。

「このマンションは私達の知り合い以外は住んでおりませんので、見知らぬ者が近づいたら、すぐにわかります」

と美咲は説明し、王女をベッドの端に腰掛けさせた。

「でも万が一に備えて、私と茜で守ります。王女様はお休み下さい」

「はい、でも・・・」

ファラは不安そうだ。いくら一国の王女とはいえ、所詮はまだ10代の少女なのだ。

「大丈夫です。絶対にお守りいたしますから」

「いえ、そういうことではないのです。私のせいで、皆さんが危ない目に遭われて」

ファラが言うと、美咲は微笑んで、

「それもお心配なさらないで下さい。私達はプロですから」

と言った。その力強い言葉にファラはようやく安心したのか、ベッドに入り横になった。

「お休みなさい」

ファラは二人に言い、目を閉じた。美咲は茜に目配せし、動いた。美咲は寝室の窓、茜はドアの近くに立ち、警戒に当たる。大原は寝室に通じる居間の椅子に座り、辺りの気配を探っていた。

葵は署長室で、警視總監と向かい合って、来客用のソファに座っていた。シャーロットは外で待たされている。署長は席を外すように言われ、渋々外に出た。この署の主なのに、と言いたそうな顔つきだった。しかし警視總監相手では何も言えない。官僚とはそういうものだ。

「犯人の侵入経路はわかったの？」

葵は唐突に尋ねた。總監はハンドタオルで汗を拭いて、

「一課の報告ですと、浴室の窓のようです。屋上からロープを下げた降り、ガラスを割って侵入したようです」

「そう。で、どうやって浴室のファラを襲ってから、殺し屋共を始末したのかしら？」

「その辺はまだ不明です。もしかすると、殺し屋を始末してから王女を襲ったのかも知れません」

「殺された連中が、風通しを良くしてくれたものね」

葵はソファに寄りかかり、總監を見た。

「公安は何を調べているの？」

「はっ？」

總監のリアクションは、本当に何も知らないようだった。葵はすぐにそれを悟り、

「貴方が何も知らないとなると、警察庁の方かしら？」

「はア。もし公安が動いているのであれば、警察庁でしょうね。大原君の方がわかるのでは？」

「そうね。それは大原君に訊いてみましょうか。それとも一つ」

「はい」

總監はまるで上司と話す平巡査のようだった。葵は身を乗り出して、

「ソレイユと言う殺し屋の情報が知りたいの。日本に入国しているらしいことは聞いているんだけど」

「ソレイユですか。ICPOから照会があった殺し屋ですが、まだ何の情報も入っていませんね。一応、調べさせましょう。ただし、

警察庁が独自に動いているとなると、難しいですよ」

「それは仕方のないことね」

葵は肩を竦めた。総監は苦笑いをして、

「まア、警察庁には私の同期や後輩もおりますから、うまく聞き出しますよ」

「ありがとう」

葵はそう言っただけで席を立った。

「水無月さん、お疲れ様です」

葵が署長室を出ると、そこにはシャーロットの他にセシオが立っていた。葵はセシオを見て、

「セシオさん、こんなところで何してるの？ 王女が襲われたんですよ」

「わかっております。しかし、私が王女を警護するまでもないようです」

セシオの意味不明の言葉に、葵はシャーロットと顔を見合わせた。「どつという意味？」

葵の問いにセシオは声を潜めて、

「イスバハン王家には、王族を守護する者がおります。いわゆる、暗殺者（アサシン）です」

「アサシン？」

葵とシャーロットは異口同音に尋ねた。セシオはフツと笑みを浮かべて、

「王族の守護者が動き出したとなれば、私は用済みでしょう。国王陛下も日本に向かわれているようですし」

「国王も？ 余計危ないのでは？」

とシャーロットが言うと、セシオは、

「いいえ。守護者が動けば、何人もイスバハン王家の者を殺めることは叶いません。イスバハン王家の者は、世界で一番安全なのですよ」

「じゃあ何故最初からその守護者がファラ王女に同行しなかったの

？」

葵が不機嫌そうな顔で尋ねた。セシオは葵を見て、

「さア、それは私にもわかりません。守護者は自分の意志で動く聞いております。それに、我々に守護者と接する手段はないのです。水無月さんも、ホームズさんも、任務終了ということ。ありがとうございました」

「納得いかないわね」

葵とシャーロットは申し合わせたかのように同時に言ってセシオを睨みつけた。

「そうおっしゃられても、私にはどうすることもできません。もちろん、お二人にはお約束の報酬は全額お支払いいたしますので」とセシオは言くと、会釈してその場から立ち去ってしまった。葵はセシオの後ろ姿を憤然として見送ったが、

「シャーロット、報酬ってどういうこと？」

と今度はシャーロットを睨んだ。シャーロットは苦笑いして、
「ハハハ。それは聞かないで。私、クビになっちゃうからさ」

と歩き出した。葵はシャーロットを追いかけながら、

「それより、セシオってホントは何者なのかしら？ 挙動がおかし過ぎるわ」

シャーロットも真顔になって、

「そうね。何か裏がある感じがするわね」と言った。二人は警察署の玄関まで来た。

「これからどうするの？」

シャーロットが尋ねた。葵は彼女に目を向けずに、

「私のマンションに行くわ」

「私も一緒に行つていい？」

「ダメよ。肝心な時に姿をくらましていた貴女は、別行動してよ」

葵は冷たく言い放ち、シャーロットから逃げるように小走りで警察を出て行った。

「ホーント、つれないんだから、葵は」

と言いながらも、シャーロットは何やら嬉しそうに含み笑いをした。

成田空港に、一機の自家用ジェット機が降り立った。ジェット機はゆっくりと滑走路を進み、端にある乗用車を目指した。乗用車の脇には黒いスーツ姿の大男が二人立っており、辺りを警戒していた。「そこまで気を張る必要はない。国王陛下を狙う者など、この世界におらんよ。何故なら、国王陛下を狙ったが最後、そやつは死ぬまで逃亡生活を送ることになるからだ」

と乗用車の助手席に座っている男が言った。彼はイスバハン王国の日本国国交樹立委員会の委員長である。

「日本国の首相は、我が国を極秘に訪れ、我が国の国情を知っている。国王陛下が来日するのは、外務省すら知らぬ極秘事項だ。内閣官房のわずかな幹部が知っているのみだ。漏れる恐れはない」

委員長はジェット機が停止するのを見て、助手席から外に出た。

「アッラーフ・アクバル」

ジェット機から、一人の長身の老人が現れた。彼こそイスバハン王国の国王、エクセル・ピクノ・ルミナである。ファラの父親にしては歳を取り過ぎているように見えるが、彼女が第十子であると言えば、納得できよう。ファラの母親であるシンシア・ピクノ・ルミナは、第二夫人なのである。では何故第十子のファラが王位継承者なのか？その理由はやがて明らかになるう。

「ファラはまだ無事か？」

国王は低い声で委員長に尋ねた。どういう意味であろうか？

「はい、まだご無事です」

「そうか。ゲームは始まったばかりであるからな」

国王は不敵な笑みを浮かべて、乗用車の後部座席に乗り込んだ。その両脇を大男二人が固めた。

「ホテルへ向かえ。今日はひとまず休む」

「はい」

乗用車は滑走路を離れ、空港の外へと向かった。

「所長、早かったですね」

茜がドアを開いて出迎えた。葵は、

「まアね。それより王女は？」

「ベッドで眠っています」

「そう」

葵はリヴィングルームに行くと、大原に目をやった。大原は立ち上がって、

「公安が動いていますよ」

「ええ。大原君、何とかならない？」

「無理ですよ。連中は公安と言っても、公安調査庁です。僕らとは全くの別物ですから」

「そっちの公安なの？ それはまた厄介ね」

葵は腕組みした。

「しかし公安調査庁が何故動くのか理由がわかりません。イスバハンがいくら不可解な国だとしても、公安調査庁が動くとは、穏やかじゃありませんよ」

「そうねエ」

と葵はソファに腰を下ろして脚を組んだ。

「警視総監くらいじゃ、太刀打ちできないくらいの大物が動いてるってことかしら？」

「そうですね。内閣官房辺りではないでしょうか」

大原も向かいのソファに座った。

「もしかすると、首相が黒幕かしらね。ファラと二人で会った時のあいつの態度、妙だったわ」

「でも何故、という疑問が常に湧いて来ます。イスバハンに関して、我々は情報不足ですよ」

葵は茜を見た。茜は頷いて美咲を呼んで来た。

「何でしょうか？」

美咲は葵の脇に立って尋ねた。葵は美咲を見上げて、

「神戸君に訊いてほしいの。イスバハンがどんな国なのか。そして、外務省がイスバハンについて調べていることを」

「はい」

大原が、

「篠原さんにも協力してもらいましょう。情報本部も何か知っているはずですよ」

と口を挟むと、葵は渋い顔をして、

「うーん」

と考え込んだ。すると茜が、

「どうして所長は篠原さんのことを毛嫌いするんですか？」

「だってあいつスケベなんだもん。必ず私の胸やお尻を触るんだから」

と葵はムツとして答えた。茜は、

「篠原さんだけです、所長にそんなことしてくれるの。あとはいないじゃないですか？」

「何ですって!？」

「きゃっ!」

茜は葵の怒鳴り声に驚いて、パツと葵から離れた。大原は笑ってそれを見ていたが、

「とにかく、いろいろ調べる必要がありますね。僕はこれで失礼して、情報を集めてみます」

と真顔になって言い、立ち上がった。

「じゃあ茜ちゃん。デートの続きはまた今度ね」

「は、はい」

茜は何故か赤面して応えた。

第九章 イスバハン王国 7月 3日 午前7時

葵達はろくに眠ることもできず、夜を明かした。

「何かわかったことある？」

葵は徹夜でパソコンに向かっていた茜に尋ねた。茜は大欠伸をしてから、

「世界中の主だった情報部のホストコンピュータにアクセスしてみましたけど、イスバハンのことは記録されていませんね。不思議なくらい、出て来ないんです」

「そう。じゃあ後は美咲と大原君か」

と葵が言うと、茜はニタツとして、

「それと篠原さんでしょ？」

「うるさい！」

葵はプリプリしてバスルームに入ってしまった。

「眠いと機嫌悪くなるんだから」

茜は半ば呆れ気味にそう呟いた。

一方美咲は、朝早くから外務省の門のそばで神戸を待っていた。

「あつ、神無月さん」

神戸は美咲に気づき、駆け寄って来た。

「どうしたんですか、こんな朝早くから？」

「実は・・・」

と美咲は理由を説明した。すると神戸は、

「昨日も言いましたが、もう手を引いた方がいいですよ。イスバハンは危険な国です。貴女も命を狙われますよ」

「そうならないために教えてほしいんです。イスバハンはどんな国なんですか？」

神戸は周囲を見渡してから、

「省内では盗聴の恐れがあります。24時間営業の店にでも行きま

しょうか」

「はい」

二人は近くのファーストフード店に入った。そこは朝食を摂る学生やサラリーマンでごった返していた。

「イスバハンはアラブ諸国で一番危険な国です。外務省が調査しているのは、イスバハンの内状ではなく、国の成り立ちなのです」
「どういうことですか？」

美咲は注文したハンバーガーを手に取って尋ねた。神戸はコーラを一口飲んで、

「イスバハンはフランスの統治領でした。さしたる独立運動もなく、フランスはイスバハンから手を引き、国は王制のまま独立しました。僕らの先輩の中に、これを不審に思った人がいて、フランスに行って調査したんです」

「変に思ってたって何をですか？」

美咲はハンバーガーをトレイに戻した。神戸は逆にハンバーガーを手に持ち、

「一般的に、統治領となった国は王制が倒されて傀儡政権ができるか、独立後、王制が倒されるかするものなんです。しかし、イスバハンの場合、統治領になる前からずっと王制が続いており、しかも王族も直系で、王朝が交替した訳ではありません。妙なんですよ」
「・・・」

美咲は呆然とした。イスバハンの不可解さは、相当根深いようだった。

「先輩はフランスでいろいろ調べたんですが、フランスの外務省が全く非協力的で、結局何もわかりませんでした。ただ一つ言えることは、フランス政府は、イスバハンを非常に恐れていたということです」

「恐れていた？」

美咲の手が止まった。神戸もハンバーガーをトレイに置いて、
「ええ。俗に言う、『腫れ物に触る』ような雰囲気だったそうです」

「どうということですか？」

美咲は身を乗り出して尋ねた。神戸は彼女の顔が間近になったので、ほんの一瞬たじろいだが、すぐに気を取り直して、

「聞いてくれるな、とまではつきり言われたそうですよ。イスバハンの国民総生産なんて、日本の神奈川県一県分もないのですよ。しかも軍隊は旧式のもので、フランス軍の一部隊で制圧できる程度のものです。それなのに何故そこまで及び腰なのか、皆目見当がつかなかったそうです」

「・・・」

美咲も神戸の話に疑問がたくさん湧いて来た。何故？ しかし、答えはわからない。

「外務省の内部資料で、フランス政府高官の死亡者リストのようなものがあります。自殺や事故死、それに行方不明者が載っているものです」

「それが何か？」

美咲は念を押すように言った。神戸は頷いて、

「そのリストに載っていた人達の中に、何人もイスバハンの国情を調査していた人がいたんですよ。妙でしょう？」

「！？」

美咲は改めて自分達が関わろうとしている国がどんな国なのか、思い知らされた。

「ですから、貴女達ももう、イスバハンの人間と関わらない方がいいですよ。死亡した人は全員、自殺は原因がわかりませんし、事故にしても不自然でした。しかし、フランスの当局は、それ以上調べようとしないうです。何かを恐れるかのように」

神戸の声は悲痛そうだった。美咲は声を潜めて、

「つまり、暗殺の可能性があるということですか？」

「そうです。神無月さん、お願いですから、手を引いて下さい。僕は貴女を危険な目に遭わせたくないんです」

と神戸は美咲の右手を両手で握りしめて言った。しかしその目は真

剣そのものだった。

（この人がここまで真剣に止めようとするほど、イスバハンという国は危険なの？）

美咲の額にじんわりと汗がにじんだ。

大原は警察庁でイスバハンに関する情報を集めようとしたが、イスバハンを検索しようとすると、パスワード入力画面が現れそれ以上先に進めなくなっていた。資料室に行っても、ただの一枚もイスバハンに関するものは見つからない。なす術もなく、彼は警察庁を出た。

（何故だ？ どうして情報を見られないようになってるんだ？）

公安調査庁が動いたのは、葵達がイスバハンと関わっているためだろう。だとすれば、公安調査庁は絶対に何か知っているはずだ。いや、知らないはずがない。「日本のCIA」とも、「日本のFBI」とも呼ばれることのある組織が、イスバハンの情報を掴んでいないとは考えにくい。

（しかし、俺がいることを知りながら、連中は尾行をしていた。あそこに行っても、何も見せてもらえないな）

大原はいろいろと考えを巡らせながら、通りの向こうに見える法務省を見た。距離にして数十メートルしか離れていないが、警察庁と公安調査庁の官庁としての距離は相当離れている。

「無駄かも知れないが、行ってみるか」
と大原は呟き、歩き出した。

葵はバスルームを出ると、そのままファラのいる寝室に行った。

「王女様、起きてらっしゃいますか？」

葵が声をかけると、ファラはベッドから起き上がって力なく微笑み、

「はい。夕べは一睡もできませんでした」

と眠そうな目で答えた。葵はニコツとしてファラに近づき、
「心配なさないで下さい。大丈夫です。今、朝食の用意をしますから」

「ありがとうございます」

とファラは言い、ベッドから出て、

「私もお手伝いいたします」

「いえ、お休みになっていて下さい」

「何かしていないと、おかしくなりそうなんです」

ファラのその言葉に、葵はハツとなった。

（そうだね。普通の女の子に、耐えられるようなことじゃないんだよね・・・）

「わかりました。一緒に作りましょう」

「はい」

ファラは笑顔で答えた。

「篠原、ちょっといいか」

篠原は、情報本部内の廊下で、上司に呼び止められた。

「何でありますか？」

「お前、イスバハン王国のことを調べているようだが、理由を教えてくださいませんか？」

上司は口調こそ穏やかであったが、有無を言わさぬ威圧感で尋ねて来ているのが、篠原にはわかった。

「自分の幼なじみが、イスバハンの王女の護衛を依頼されたからであります」

と篠原は答えた。上司は篠原の顔をジッと見据えたままで、

「護衛？ 何故イスバハンの王女は、日本政府に依頼しないのだ？」

こいつ、知っていないがらわざととぼけて訊いてやがる、と篠原は心の中で舌打ちした。そして、

「それは自分にはわかりません。何か事情があるのでしょう」

「本当に知らんのか？」

「はい」

上司は篠原に背を向けて、

「お前は防衛省のエリートなのだぞ。つまらん同郷意識で、自分の出世コースを棒に振るなよ」

「はっ！」

篠原は深々とお辞儀をしたが、腹の中は怒りで煮えくり返っていた。

（つまらん同郷意識だと？　ここがどこか外の路地裏だったら、記憶がなくなるくらいぶん殴ってやるところだ！）

彼にとって自分の故郷、つまり忍びの里は、命に代えても守らなければならぬところだ。そこを「つまらん」と言われたことは、面と向かって「バカヤロウ」と言われる以上の屈辱である。

（情報本部にも俺達の動きを快く思わない連中がいるらしいな。葵達、大丈夫だろうか・・・）

彼は葵のことがとても心配になった。

内閣総理大臣橋沢龍一郎は、執務室の椅子に座り、ある電話を受けていた。

「もちろんです、大統領閣下。貴国の不利益になるようなことはいたしません。はい、そのとおりです。計画がうまく進めば、今まで以上の協力することが可能となりましょう。では後程、首脳会談で」

橋沢首相は、ニヤリとして受話器を置いた。

「日本が変わる。もうすぐ・・・」

その時、机上のインターフォンが鳴った。橋沢は迷惑そうにボタンを押し、

「何だ？」

「最高顧問がお見えです」

「お通ししろ」

橋沢にとって、最高顧問とはただの年寄りに過ぎなかったが、ま

だ邪険にすることはできない。党の内外に隠然たる力を持っているからだ。

「橋沢、元気そうだな」

執務室に入りなり、小柄な着物姿の白髪の老人は言った。橋沢は立ち上がって老人に近づき、

「岩戸先生もお元気そうで何よりです。本日はどういっご用向きで？」

と尋ねた。老人はソファに無言で腰を下ろし、あごで向かいを指し示した。橋沢は慌てて向かいのソファに座った。

「お前、何をしでかそうとしている？」

「はっ？ 何のことでしょうか？」

橋沢はシラを切るつもりでいた。しかし岩戸老人は、

「とぼけるなよ、若造。アメリカの大統領と、党には内緒で何かを話し合っているらしいではないか？ それにアフリカの王国の件もだ」

橋沢は、どこから情報が漏れたのだと一瞬焦ったが、

「党に内緒とは他人聞きが悪いですよ、岩戸先生。党執行部は了承済みのことです。幹事長や、総務会長は知っております。それを反対派の党幹部が、ねじ曲げて噂を広めているのでしよう」

と説明した。しかし岩戸老人は眉をひそめて、

「ならば何故、内閣官房がせわしなく動いているのだ？ アメリカ合衆国へ何人もの人間を派遣した上、防衛庁の情報部の幹部まで動員しているらしいではないか？」

とさらに詰め寄った。さすがに橋沢はグツと言葉に詰まった。

「アメリカとの密談はよしとしよう。しかし、解せんのはアフリカの王国、イスバハンの件だ。正式な国交もない国の王女に監視をつけ、国王を極秘で招いたりしているのは、どういうことだ？」

「そ、それは・・・」

（このクソジジイ、一体どこでそんな情報を？）

橋沢は、岩戸老人の底知れぬ情報網の存在に恐れをなした。

「言えぬ理由があるようだ。お前の顔にはつきりとそう書いてあるぞ」

「・・・」

橋沢の額を汗が滴り落ちた。

「お前、よくわからぬ国に首を突っ込み、日本を破滅に追いやるなよ」

「そんなことはいたしません。私は常に日本国のことを考え・・・」
と言いかけた橋沢を岩戸老人は遮り、

「一世紀前、日本はロシアに勝ったことに勢いづき、破滅への道を歩み始めた。わしはまさにその最後の瞬間に立ち会った。だからこそお前に問うておるのだ。つまらん企みをして、一億の民を追い込むようなことにならんだろうな、と」
と右手の人差し指で橋沢を指し示した。

「アフリカや西アジア諸国は、我が国には推し量ることのできない闇を持っている。イスラム教とユダヤ教、そしてアラブとイスラエルの確執。何でも信仰の対象としてしまう日本人には窺い知ることのできない部分があるのだ。わかっておろうな？」

「はい・・・」

岩戸老人は立ち上がり、

「そのこと、ゆめゆめ忘れるなよ。お前には一億国民の行く末が託されているのだからな」

「は・・・」

橋沢は立ち上がり、深々と頭を下げた。岩戸老人は橋沢に背を向け、執務室を出て行った。

（老いばれが・・・この俺は、先人の轍を踏むほど、愚か者ではない）

橋沢には橋沢なりの、自信と計略があった。

葵達は朝食を終え、リビングルームのソファで寛いでいた。
「日本食、ほとんど食べられるのですか？」

と葵が尋ねると、ファラはニツコリして、

「はい。日本食はとても健康に良い食事です。日本人が長寿なもの、頷けます」

「それはどうもありがとうございます」

「それより、殺し屋達を殺した犯人のことなのですが・・・」
とファラが言い出したので葵は、

「セシオさんから聞きました。王家に仕える、守護者が現れたのですよね」

「そうですか。セシオが話したのですか。その守護者はファヴールと言つのですが・・・」

ファラの顔色は冴えなかった。葵は不審に思つて、

「どうされたのですか？」

「ファヴールはフランス語です。イスバハンの言葉ではありません。昔イスバハンにいたフランス軍の中の情報部員が流した二セの噂なのです。その者は、イスバハンの女性と恋に落ち、軍を脱走しました。そして、イスバハンの独立を助けるために、ファヴールという暗殺者を捏ち上げて、フランス軍を撤退させ、独立を勝ち取らせたのです。ですから、王家の守護者は存在しません。恐らく、真犯人はソレイユでしょう」

「ソレイユ!？」

ファラが最初に会った時、教えてくれた最も手強い殺し屋の名前だ。

「セシオさんは、ファヴールの存在を信じているのですか？」

「王家の者以外は、皆信じています。王国の危機には必ずファヴールが現れ、救ってくれると。王家はファヴールの噂のおかげで、今日まで存続しているのです」

ファラの話は、葵にとって非常に衝撃的だった。

第十章 殺し屋 ソレイユ 7月 3日 午前10時

ファラは話を続けた。

「ソレイユは、私達王族が存在しない殺し屋を利用してフランス軍を撤退させた時、我が国を助けてくれたフランスの外人部隊の一人で、セシオとも面識がある男です。彼はその後、自分が活躍したはずなのに、ファヴールなどという存在しない者のおかげとした王家の人間を憎むようになりました。そして、王族を狙うようになったのです」

「それではソレイユは私怨で殺しをしているということですか？」

葵が尋ねた。ファラは小さく頷き、

「そうです。ソレイユは他の殺し屋達と違って、私を全く怨みを晴らすために狙っているのです」

「では何故浴室で貴女が他の殺し屋に襲われた時、他の殺し屋を殺して貴女を助けたのですか？」

葵はさらに質問した。コーヒーを入れて戻って来た茜も、話に聞き入っていた。

「ソレイユは他の殺し屋に私を殺させたくないらしいのです」

「他の殺し屋を始末した後、貴女を殺せたのではないのですか？」

「その時貴女が入って来たのでしょうか。貴女が入って来るのがもう少し遅ければ、私も殺されていたかも知れません」

とファラは蒼ざめた顔で言った。葵は頷いて、

「わかりました。ソレイユに対して、私達は徹底警戒します。それで王女？」

「はい？」

「セシオさんがソレイユと面識があるのですよね？」

「はい」

「では、セシオさんに協力してもらって、ソレイユの顔を再現してみましよう」

「ええ、そうですね」

ファラはあまり乗り気ではないようだ。葵は不審に思い、

「どうしたんですか？ 何か不都合なことでも？」

「いえ……。ソレイユは顔を変えているらしいのです。しかも、変装の名人らしくて、今どんな顔なのか、まずわからないのではな
いかと……」

「……」

葵は茜と顔を見合わせた。

大原は公安調査庁で予想通り門前払いを食い、警察庁へ戻り始めていた。

（思った通り、中にも入れてくれなかったな。連中、ますます水無月さん達への監視を強くするだろう……）

大原は法務省の建物を見上げた。

「やはり、内閣官房が動いているようだ。水無月さんに伝えないと」
彼は携帯を取り出し、葵に連絡した。

美咲は葵のマンションに戻り、神戸から聞いたことを全て葵に話した。葵もファラから得た情報を美咲に話した。互いに相手の話は衝撃的だった。その時、葵の携帯が鳴った。

「大原君からだわ」

葵が携帯に出る。何故か茜はムツとして聞き耳を立てた。どうして私のところにかけて来ないのよ、と言いたそうである。

「そう。やっぱりね。ありがとう。また何かあったら連絡ちょうだい」

葵は携帯を切った。茜はジトーツと葵を見ている。葵はそんな茜の視線に気づかず、

「今の話、王女には内緒ね。動揺するでしょうから」

と美咲に耳打ちした。美咲は黙って頷いた。そこへファラがバスルームから戻って来た。

「日本は水がいくらでも使えて、羨ましいです。我が国は水源が乏しく、水はとても貴重なのです」

「そうなんですか」

いつもまさしく、「湯水のごとく」シャワーを浴びまくっている葵と茜は、耳が痛かった。

「王女様、ソレイユについてなのですが、他に何かご存じのことはありますか？」

葵はファラを見て尋ねた。ファラは濡れた髪をタオルでまとめてから、

「いえ。ただ、ソレイユはプロ中のプロです。割に合わない仕事は決してしません。今回もし動いているのだとしたら、100万ドルが目当てでしょう。もちろん、イスバハン王家に復讐することも考えているでしょうが」

「なるほど」

葵は美咲を見た。そして、

「外務省との連絡はそのまま続けて。無理が出て来たら連絡して。私が何とかする」

「はい」

「茜」

と葵は茜に目を向けた。茜はピクンとして、

「はい！」

「大原君からの情報も貴重だね。随時連絡を取って」

「はい！」

茜は嬉しそうに答えた。葵はそんな茜の様子を不思議に思ったが、「王女様、セシオさんに連絡取れますか？」

「はい、とれます」

「ではこちらに来るように伝えていただけますか？」

「わかりました」

とファラは大きく頷いた。その時また、葵の携帯が鳴った。

「はい」

葵は妙に不機嫌そうに応えた。相手はどうやら篠原らしい。

「わかったわ。待ってて、すぐ行くから」

葵は携帯をスーツの内ポケットに入れると、

「ちよつと出かけて来ます」

とファラに告げた。

「はい。いつてらっしゃい」

葵は美咲と茜を見て、

「王女様をお願いね」

「はい、所長」

葵はスツと玄関に向かい、外へと出て行つた。

「デートですか？」

茜が美咲に尋ねた。美咲は、

「違うわよ。篠原さん、何か情報を得たのよ」

「じゃ、どうしてここに来ないんですか？」

「来られない訳があるんでしょ」

「フーン・・・」

ファラは、美咲と茜のやり取りをびつくりしたような表情で見ている。
いた。

葵のマンションの前の大通りの反対側にある、別のマンションの屋上に、殺し屋達は何人も集まっていた。どこで情報入手したのか、葵のマンションの場所を突き止め、ファラ暗殺を執行するため
に集合したのだ。

「いいな。怨みつこなした。王女を仕留めた奴が、取り分を一番多くする。いいな？」

「了解だ」

殺し屋達はニヤリと笑い、葵のマンションを見下ろした。すると、

「お前らが賞金の分け前の心配をする必要はない」

とどこから声がした。殺し屋達はムツとして、辺りを見回した。

「何だと？　どこのどいつだ、つまらねえこと言いやがるのは？」

一人が怒鳴った。すると、屋上の出入り口の上にある給水タンクの後ろから、黒スーツに黒い仮面を着けた金髪の男が現れた。

「誰だ、てめえは？」

もう一人が言った。その金髪の男は、サッと飛び降りて来て、

「我が名はソレイユ。賞金は俺のものだ」

「ソ、ソレイユ？」

殺し屋達は皆動揺した。誰も彼も、その世界で彼の名を知らない者はない。

「慌てるな。いくらソレイユが強くても、この人数相手に勝てる訳がねえ。やっちまうんだ！」

「おーっ！」

殺し屋達は一斉にソレイユに向かった。

「愚かな・・・」

ソレイユは素早い身のこなしで、20人ほどいた殺し屋達を全員、ほんの数秒で皆殺してしまった。

「貴様らはもとより眼中にない。俺の目的は、あの日本の女ニンジャ。俺の気配をドア越しに感じ取り、他の連中と戦いながらも、俺に常に注意を払い続けた、あの女だ」

そう、ホテルで葵がドア越しに感じた殺し屋は、ソレイユだったのだ。

「100万ドルとファラの命は俺が頂く。そして、あの女ニンジャも・・・」

ソレイユはスッと姿を消してしまった。

その頃葵は、近くの公園のベンチで篠原と並んで座っていた。

「あなたにまで圧力かけて来るとは、やっぱり黒幕は内閣官房ね。」

大原君もそう言ってたし」

「ああ、他に考えられない。神戸にもそのうち、圧力がかけられるだろう。美咲ちゃんにも気をつけさせるよ」

と篠原が言つと、葵は、

「言われるまでもないわ。こうなったら、あの人に動いてもらうしかないわね」

「ジイさんか。ま、政治家が黒幕なら、それでOKだな」

と篠原は葵の肩を抱いた。

「ちよつと、何するのよ!？」

「恋人同士がイチャイチャするのは、当たり前だろ?」

「もう!」

葵はムツとして篠原を睨んだ。すると篠原は、

「俺はマークされている。尾行もされてる。このままにしている」

と耳元で囁いた。葵がハツとして辺りに気を配っていると、篠原はさらに身体を密着して来た。

「ホントに尾行されてるの?」

葵は篠原から離れた。篠原は苦笑いをして、

「ホントさ」

「私はあんたの恋人じゃないのよ。勘違いしないで」

「そんな冷たいこと言うなよ、葵」

葵は篠原に小声で、

「反対側のベンチと、あの大きな木のそばにいるカップルらしき男女が、尾行ね?」

「ご名答。連中、尾行はプロでも、この公園の常識は知らないらしい。あんな不自然なカップルはいないぜ」

「そうね」

と葵が言つと、篠原は、

「俺達も自然なカップルになろうか?」

と顔を近づけて来た。葵は両手で篠原の顔を押し止めて、

「調子に乗らないで! そういうのを職権乱用って言つのよ!」

「ハハハ」

しかし、そんなやり取りは、返って恋人同士の痴話喧嘩に見えなくもなかった。二人は葵がどう思おうと、息の合ったコンビなのだ。「つれないなア、葵ちゃん」

篠原が言っと、葵は立ち上がって、

「私、戻るわね」

と言い終わるかどうかというタイミングで、篠原の唇に軽い、触れる程度のキスをした。篠原は意表を突かれて、呆然として葵を見上げた。

「これから頑張ってもらうための、前金よ」

葵は照れ臭そうに笑い、歩き去った。篠原は、唇に指を当て、信じられないような目で葵を見送った。

「自分からする時は何ともなかったけど、不意にあいつからされると、こんな子供みたいなキスでもドキドキするんだな」

篠原は苦笑いした。そして、

（ 尾行の連中、いなくなっただか。葵をマークしているのか？ ）と辺りを見渡してから、ベンチから立ち上がり、葵と反対方向に歩き出した。

「あのオジさんに聞いてみるとするか」と篠原は呟いた。

美咲と茜は、ファラと一緒にリビングルームで葵の帰りを待っていた。

「所長、遅いですね」

茜が言った。美咲は茜を見て、

「そうね。どうしたのかしらね？」

「ホテル、行っちゃったんですかね？」

茜がアツケラカンとした顔でもう一度尋ねる。すると美咲は自分のことではないのに真っ赤になり、

「茜ちゃん、バカなこと言わないで！」

「ハハハ、どうして美咲さんが赤くなってるんですか？ 何か想像しちゃいました？」

茜が美咲を指差して笑った時、ドアフォンが鳴った。

「えっ？」

二人は顔を見合わせた。葵が戻ったのなら、鍵を開けて入って来るはず。来客の予定はない。セシオはさっきファラの携帯に連絡があり、あと30分で到着する予定だ。

「招かれざる客ですかね？」

「そうかもね」

茜は王女を寝室に誘導し、美咲は身構えてドアに近づいた。再びドアフォンが鳴った。

「・・・」

美咲はドアの向こうの気配を探った。しかし人の存在を感じることができない。

（何？ どういうこと？ そこにいないの？）

葵は茜から何者かがマンションのドアの前にいることをメールで知らされていた。

（一体何者が？）

葵は全速力で走った。まさしく忍びの走りだった。風の葵。それは彼女の速さを表す名である。

葵はマンションの前に辿り着くと、エントランスを使わず、壁を素早くよじ登った。

（？）

葵は自分の部屋がある階の外廊下に着いたが、どこにも人影はない。しかも気配も感じられない。

（どこ？）

美咲が葵の到着を感じ取って、ドアを開いた。

「どこにもいないわよ、美咲」

葵はドアに近づいて美咲に言った。その時、二人は同時にハッとなった。

「窓へ？」

二人は素早く部屋を駆け抜け、リビングルームに行った。そこには、窓ガラスの破片が散らばり、風が吹き込んでいた。そしてそ

ここには、あのソレイユが立っていた。

「誰、あんた？」

葵は無作法な侵入者に尋ねた。ソレイユはニヤリとして、

「やっと会えたな、女ニンジャ。我が名はソレイユ。世界最強の殺し屋だ」

「何ですって!？」

葵と美咲は、異口同音に叫んだ。ソレイユは不敵な笑みを浮かべたまま、

「フェア王女はどこだ？ 100万ドルの賞金首はどこにいる？」
と尋ねた。

第十一章 王女脱出 7月 3日 午前11時

ソレイユはジリジリと間合いをつめて来る。

「美咲、王女を守って！ こいつは私一人で食い止める！」

「はい！」

美咲はダツと寝室へ走った。ソレイユはけたたましく笑い、

「そうか、フアラはそこか！」

と美咲を追おうとした。すると葵がソレイユの前に立ちはだかった。

「あんたはここで私の相手をするのよ！」

「私は金にならん戦いはしない！」

「あんたがしたくなくても、私がしたいのよ！」

「ムツ・・・」

ソレイユは葵のすさまじい気に気づき、後ろへ飛び退いた。葵はスーツをバツと脱ぎ捨て、忍び装束になった。とは言え、時代がかった物ではない。ハイテク満載の、バトルスーツである。

「ほオ。面白い。私を止められるものなら、止めてみよ！」

ソレイユの動きが急に速くなった。

「何！？」

葵はソレイユの突きをかわした。ソレイユはしかし、続けて後ろ回し蹴りを放った。それも葵はかわした。ところがすぐにソレイユの次の突きが葵の顔面に向かって来た。

「くっ！」

葵はその突きを蹴り上げ、後ろへと飛んだ。

（何、今の連続技は？）

「さすがだ、女ニンジャ。今の私の攻撃を全てかわしたのは、お前が初めてだ。後は皆、後ろ回し蹴りで首が飛んでいる」

ソレイユは愉快そうに言った。葵も作り笑いをして、

「ヘエ、それじゃあ私は運がいいのね、かなり」

と言い返した。そう言いながらも、葵は時間を稼ごうとしていた。

（早く、寝室の奥の隠し部屋から王女を逃がしてよ、美咲、茜！）

「何を企んでいる？ 時間を稼ごうとしているのか？」

「・・・」

葵の額に汗がにじむ。ソレイユは満足そうに笑って、

「通らせてもらおう！」

と突進して来た。葵は身構えてソレイユを止めようとした。

「えっ？」

ソレイユはサッと身を屈めると、葵の脚の間をすり抜け、寝室へと駆け込んだ。

「こら、レディーの股下通るな！」

葵はソレイユを追った。

（もう脱出しているわよね？）

彼女も寝室に飛び込んだ。案の定、中にはソレイユしかいなかった。

「ファラをどこに隠した！？」

ソレイユがすさまじい形相で叫んだ。葵はホッとして、

「教えられる訳ないでしょ」

と壁のボタンを押した。すると部屋全体が巨大な檻となり、ソレイユを閉じ込めた。

「何だと！？」

ソレイユは仰天していた。一本の太さが5cmほどもある鉄格子が何十本と降りて来たのだ。ソレイユにも脱出はできない。しかも、床と天井も鉄板入りで、破ることは不可能。葵はわざとソレイユを寝室に入らせたのだ。

「見事に引っ掛かってくれたわね。王女はもうとくに脱出して、このマンションにはいないわ。あんたはここで、警察が来るまでおとなしくしてなさい」

葵は携帯を取り出した。

「まさしくニンジャ屋敷だったというわけか。しかし、この程度で

この私を捕えたと思うなよ」

とソレイユが言うと、葵は携帯をしまつて、

「何強がり言つてるのよ。無理よ。鉄格子を曲げることも、鉄板を破ることもね」

「それはどうかな」

「何よ、どうするつもり？」

ソレイユはフツと笑い、スーツの内ポケットから小ビンを取り出した。そして、

「こうするのさ！」

と床に放り投げた。小ビンが床に落ちて割れた途端、凄まじい爆発が起こった。

「ニ、ニトログリセリン？」

葵が仰天する番だった。床には大きな穴が開いていた。ソレイユは葵に手を振り、

「また会おう、女ニンジャ」

と言に残すと、穴の中に飛び込んだ。

「しまった！」

葵はすぐさま鉄格子を上げ、ソレイユを追つて穴に飛び込んだ。

一方美咲と茜は、ファラを連れてマンションの地下駐車場から葵の車で走り出していた。見た目はごく普通のミニバンだが、やはりこれもハイテク満載の忍び仕様だ。スピードなら、250 km/hは出る。

「しまった！」

美咲は通りに出ようとして叫んだ。大渋滞していたのだ。彼女はカーナビを作動させ、すいている道を検索すると、ミニバンを急速後退させて、Uターンし、反対側の出口に向かった。地下の駐車場内に、タイヤが軋む音が鳴り響いた。

「美咲さん、もっと安全運転して！」

茜は王女をかばいながら叫んだ。しかし美咲は真顔で、

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！」

と言い返した。

その頃、ソレイユは一つ下の部屋に降り立っていた。そこは空き部屋になっており、人のいる気配はなかった。

（何だ、ここは？）

しかし彼は、その部屋の不自然さに気づいていた。そこへ葵が降りて来た。

「脱出したつもりでしょうけど、まだよ。このマンションそのものが、あんたの言う忍者屋敷なんだから」
「なるほど」

ソレイユは葵を見た。何故か葵が斜めに見える。実はソレイユが立っている床が傾いているのだが、部屋全体が黒いので、それがわからない。その上、葵が何人も現れた。

「何？ バカな！？」

葵はソレイユの前後左右上下、あらゆる場所に立っていた。

「ニンジャめ！ 目くらましを！」

ソレイユは周りにいる葵を振り払おうと動き回った。しかし、「葵達」は、スツとそれかわし、逆に蹴りや拳でソレイユに反撃して来た。

「うおっ！」

ソレイユは獣のような雄叫びを上げ、元来た穴へと飛び上がった。

「あっ！」

葵は虚を突かれた感じになった。

（鉄格子は上げてしまったんだ。まさか戻るとは・・・）

葵は他の「葵達」（実は一族の者の変装）に目配せし、ソレイユを追った。

美咲の載るミニバンは、ようやく大通りに出て、葵の事務所に向かっていた。

「何あれ？」

大通りから一本入った脇道の先に、一人の男が立っているのを茜が見つつけ、呟いた。見た目でわかるが、2 m以上ある黒人の男だった。

「味方には見えないわね」

美咲が言った。茜は頷いて、

「美咲さん、私が引き受けます。王女を頼みますね」

「ええ」

茜は制服を脱ぐと、忍び装束になり、びっくりしているファラを尻目に、

「では王女、ご無事で」

「は、はい」

茜はサンルーフから飛び出し、大男の前に降り立った。ミニバンはその手前を右折した。

「何の御用なの？」

茜は大男にニッコリ笑って尋ねた。大男は全く無表情のままで、
「お前のような子供に用はない。俺が用があるのは、ファラ王女だ」と茜を無視して、その巨体に似合わない速さで、ミニバンを追いかけ始めた。茜はムツとして、

「子供ってどういう意味よ!? 待ちなさいよ!」

と大男を追いかけた。

葵が寢室に戻ると、ソレイユの姿はすでになかった。

「ちっ!」

葵は舌打ちをし、寢室を飛び出した。その瞬間、ソレイユの蹴りが葵の脇腹に決まった。

「ぐっ!」

葵はそのままリヴィングルームまで飛ばされ、転げた。ソレイユはそれを満足そうに見てからスーツの襟を直し、

「そこで寝ている。貴様には後でタツプリと礼をしてやる!」

と言い捨て、玄関から飛び出して行ってしまった。葵は脇腹を押さ

えて立ち上がり、

「この装束を着ていなければ、完全に気を失っていた……。しくじったわ……」

と呟いた。

ソレイユは外廊下に出ると、何人もの葵が待っているのに気づき、苛立ちを募らせた。

「ええい、まだその目くらましを使うか？」

ソレイユはそう言うと、バツと地上へ飛び降りた。葵達は驚いて下を見た。ソレイユはスーツを羽のように広げて、空中を飛び、地上に降りた。

「車を借りるぞ」

ソレイユはそばに停車していた若い男女の乗る四輪駆動車を奪い取り、美咲達を追い始めた。しかし、彼は美咲達がどこに向かっているのか、知っているのだろうか？

「遅かったか！」

葵も地上に飛び降りたが、ソレイユの四駆車は走り去った後だった。

「お嬢様！」

と一人の葵の影が、モトクロス用のバイクを乗り付けた。葵はヘルメットを受け取り、バイクに跨がった。

「逃がしやしないわよ、ソレイユ！ この脇腹の痛み、何倍にもして返してあげるわ！」

葵のバイクは、凄まじい加速でソレイユを追いかけた。

美咲の運転するミニバンは、もう少しで葵の事務所というところまで来ていた。

「ビルが見えた！」

美咲が呟いた時、ドスンとミニバンのルーフに何かが落ちて来た。「えっ？」

美咲はサンルーフ越しに上を見た。するとそこには、背中まで伸

ばした金髪を振り乱し、大きく開いた口からダラダラと涎をたらした、目が完全にイッてしまっている、白人の男がいた。上はタンクトップ、下は薄汚れたジーパン。美咲はすぐさまハンドルを切って、男を振り落としにかかった。

「ケーケツケ！」

男は奇声を上げ、ルーフにしがみつき、振り落とされないようにへばりついた。

「きゃっ！」

ファアラが後部座席で転げ回る。美咲は前を見たまま、

「王女様、少しの間、我慢して下さい！」

と蛇行運転を続けた。周囲の車は美咲の車をかわして停止したり、歩道に逃げ込んだりしていた。

「じゃあ、これならどう？」

美咲が右手奥にあるレバーを引くと、サンルーフが跳ね上がり、

白人の男は後ろに飛ばされ、転げ落ちた。

「よし！」

美咲はそれを見届けると、事務所のあるビルの地下へとミニバンを進ませた。

「ケーケツケツ！」

白人の男は、美咲達を走って追いかけ始めた。

「待ちなさい！」

茜はバツと飛び上がると、スライディングで大男の脚を払った。

「ぬおっ！」

大男はバランスを失って、仰向けに転んだ。茜はすかさず大男の首に肘鉄を叩き込んだ。

「決まった！」

と茜が喜んでいると、大男の右手が彼女をつまみ上げた。

「ええっ？」

茜は手を振り払おうとしたが、どうにもならない。

「どけ、邪魔だ！」

茜はブワンと振り回されると、上空へ投げられた。大男はそのままそこから歩き去った。

「ああっ！」

茜はアスファルトの地面に叩き付けられる直前に、誰かの手で受け止められた。

「大丈夫か、茜ちゃん？」

「あっ！」

それは大原だった。彼はスーツ姿ではなく、上下スポーツウェアだった。茜は赤くなって、

「あ、ありがとう、大原さん」

「間に合って良かったよ。篠原さんからの連絡で、君達をサポートしてくれて言われてね」

と大原は茜を地面に立たせて答えた。そして、

「取り敢えず、君を猫扱いしたあの木偶の坊にお礼をしておこうか」

「気をつけて、大原さん！ あいつ、普通の人間じゃないわ！」

と茜が叫んだ。しかし大原はニッコリして、

「大丈夫。茜ちゃんが見ていてくれれば、格闘技の世界チャンプにだって負けないよ」

と言った。茜はちよつとだけ引いてしまった。

白人男が地下の駐車場に飛び込むと、男の鼻先を銃弾が掠めた。

「こ、この銃声は・・・？」

白人男の額に汗が伝わった。

「覚えていたようね。案外記憶力いいんじゃないの、ジェフリー・ジョーンズ？」

銃を構えて現れたのは、シャーロットだった。いつもの彼女と違い、とても真剣な表情である。

「やっぱりあんたか、シャーロット・ホームズ。今のはW&Sのオートマチックマーク1だな。口径が世界で一番大きい銃の音は、一

度聞いたら忘れられないぜ」

シャーロットはフツと笑って、

「あんたは必ず来ると思っていたわ。イスバハンの王女を殺れば100万ドルなんていうおいしい仕事を、金に汚いあんたが見逃すはずはないと思って、待ったかいがあったわ」

ジェフリーもニヤリとして、

「そうか。あんた、まだあの事件のこと、恨んでいるのか。確かあんたの同僚だったよな、俺が頂いて、殺して、また頂いたのはよ」

「忘れようと思っても、忘れられないわよ。私のミスで、同僚のジェニーがあんたに捕まって……。殺されただけじゃなくて、暴行までされて！」

シャーロットの目に、涙が浮かんでいた。ジェフリーはそれを見てせせら笑い、

「へっへっへ、そんな感傷的なことでデカが勤まるとは、ヤードも先が見えたな。結局あの事件は証拠不十分で俺は不起訴だったんだ。もう終わってるんだよ、法的にな」

「法律がなんだろうが、そんなことは関係ないわ。私には私のけじめがある！」

シャーロットはマーク1の銃口をジェフリーに向けた。

第十二章 三つの戦い 7月 3日 午後12時

「待てよ、デカブツ。レディを投げておいて、そのまま行くつもりか？」

大原が大男に声をかけた。大男はゆっくりと振り向き、

「何だ、貴様？ 邪魔すると、殺すぞ」

「どうかな、それは」

「何イツ！」

大男が大原に突進した。大原はそれを素早くかわして大男の後ろに回り込むと、タックルをした。

「うおわっ！」

大男はそのまま前に倒れ、顔を地面で強打し、鼻血を滴らせた。

「貴様アツ！」

大男は鼻血を拭い、大原を睨んだ。大原はフツと笑って、

「かかって来い、デカブツ。レディを物扱いした罰は、そんなものじゃすまないぞ」

と挑発した。

ソレイユの駆る四駆車は、あらゆる交通規制を無視し、対向車をスピンさせ、先行車に追突し、ガードレールに激突させた。本来なら、暗殺者はここまで目立っては命取りなのだが、彼の高過ぎるプライドが、今はその制御装置をオフにしていた。

「いた！」

葵のバイクがソレイユに追いついた。彼女はまるで戦場のような道路の惨状に驚いていた。

「あいつ、絶対ぶちのめしてやる！」

葵はウィリーをしたまま、ソレイユの四駆車を追いかけた。

「あのバイク、女ニンジャか？」

ソレイユもルームミラーとサイドミラーで、葵の追跡を確認して

いた。

「邪魔はさせん！」

ソレイユはアクセルを踏み込み、車線を変更しないで右折した。当然対向車は仰天し、歩道に乗り上げたり、中央分離帯に突っ込んだりした。

「あいつ、何故美咲達の行く先がわかるの？」

葵はその時ふとそう思った。

（誰かが教えているの？ 一体誰が？ 何のために？）

葵は停止している車の間をすり抜けて、ソレイユを追跡した。

「銃で俺を殺せると思っているのか？ 俺は悪魔と呼ばれた男だぜ。そんなものじゃ、俺は殺せねえよ」

ジェフリーはシャーロットを指差して笑った。シャーロットは銃をホルスターに戻すと、

「そうだったわね。あんたは直接私のこの拳でぶちのめすわ！」
と言ってジェフリーに向かった。

「俺は強いぜ、シャーロット。覚悟しとけ！」

とジェフリーは涎を垂らしながら叫んだ。シャーロットはそれには答えず、ジェフリーに右正拳を放った。

「おっと！」

ジェフリーはそれを左手で受け、右手でシャーロットの右手首を持ち、合気道のように彼女を投げ飛ばした。

「ムッ！」

シャーロットは空中で一回転して着地した。ジェフリーは蹴りを見舞った。しかしシャーロットはすでにそこにはいなかった。

「はアッ！」

ジェフリーは空振りし、バランスを崩した。シャーロットはジェフリーの上にいた。

「何！？」

シャーロットの渾身の踵落としが、ジェフリーの脳天に炸裂した。

「ぐはアッ!!」

ジェフリーは血を吐きながらそのまま後ろに倒れた。シャーロットは着地し、ジェフリーを見下ろした。

「立ちな、ジェフリー。あんたをそれくらいで眠らせやしない」

「くそ・・・」

ジェフリーは血の混じった唾を吐き出し、唇を舐め回して、

「お前もよく見ると、いい女だよなア。やっぱり、殺す前に頂くか？」

とシャーロットに向かって来た。

大原は思った以上に苦戦していた。大男はいくら殴っても蹴つても、倒れはするが、気を失ったり、動けなくなったりする様子がない。

「こいつ、化け物か・・・？」

大原の額に汗が噴き出した。すると茜が、

「大原さん、選手交替よ。今度は私が戦う!」

「だめだ、茜ちゃん。君に勝てる相手じゃない」

と大原が言つと、茜はニコツとして、

「大丈夫よ。私、案外強いんだから」

「・・・」

茜は大原をよけて、大男の前に立った。そして、

「さア、もう一度私が相手よ。今度は容赦しないわ。男だからってね」

「何を言っているのかわかってるのか？ お前は俺の半分くらいしか身体の大きさが無いのだ。何をしても無駄！ そっちの男の攻撃すら、俺には通用しなかったのだぞ」

と大男は高笑いした。茜も負けずに甲高い声で笑い、

「だから言っただでしょ、男だからって容赦しないって!」
と走り出した。大男は、

「バカめ！ 今度は確実に地面に叩きつけてやる!」

と茜を捕まえようと両手を前に出した。しかし茜はそれよりも早く、大男の懷に飛び込んでいた。

「食らえっ！」

茜の後ろ回し蹴りが、大男の股間に炸裂した。

「ぬぐおおおおっ！」

大男の顔中から、脂汗が流れ出た。大原は啞然としていた。

「次はここ！」

茜は逆立ちをし、反動を利用して倒れかけた大男の顎を両足で蹴り上げた。

「ぐはアッ！」

大男は口から涎と血の混じった物を吐きながら、仰向けに倒れた。「まだまだ！」

茜は飛び上がり、大男の鳩尾に両手で突きを入れた。

「ゲボオッ！」

今度は大男は、胃液を吐き出した。そしてついに白目を剥き、失神した。

「すごいな、茜ちゃん。僕の方が守られちゃったね」

大原が感心して言う、茜は真つ赤になって、

「や、やだ、大原さんがいること忘れて、私ったら・・・」

ともじもじした。大原はニッコリして、

「それにしても、茜ちゃんの急所蹴りは、すごかったなア」

と言った。茜は爆発しそうなくらい赤くなり、

「やだアッ！」

と大原の背中を叩いた。大原は危うくダウンしかけた。するとそこへ、猛スピードで走って来るソレイユの四駆車が現れた。

「危ない！」

大原はギリギリのところまで茜を庇いながら、ソレイユの四駆車をかわした。

「今のは・・・？」

大原は茜と顔を見合わせた。茜はハッとして、

「ソレイユです！ ファラ王女を追っているんです。追わないと！」と走り出した。大原もすぐに茜を追った。

「茜、大原君、どいて！」

と葵が大声で叫びながらバイクで二人を追い越した。

「所長！」

「水無月さん！」

ソレイユの車は、葵の事務所のあるグランドビルワンの地下駐車場に入って行った。葵のバイクがそれを追いかけた。

シャーロットとジェフリーの戦いは、壮絶だった。シャーロットはタンクトップのあちこちを引き千切られ、身体中傷だらけだ。対するジェフリーも、タンクトップはすでにボロボロになって上半身はほとんど裸同然、ジーパンもあちこち破れて血がにじんでいた。「おい、もうそろそろ降参しろよ、ホームズ。それ以上ブサンクになっちまったら、さすがの俺でもその気になれないぜ」とジェフリーが言った。シャーロットは血の混じった額の汗を右手の甲で拭い、

「あんたこそもう倒れなさいよ。ただでさえブサイクな顔が、もっとブサイクになってるわよ」

と言い返した。

「ムッ？」

ジェフリーは自分に向かって来る車に気づいた。シャーロットもそれに気づいた。

「何だ？」

ジェフリーは慌ててその車をかわした。シャーロットは葵のバイクをスツとかわした。

「葵！」

「シャーロット、話は後で！」

葵はそのままソレイユを追いかけた。ソレイユは車を乗り捨てる

と、非常階段を昇り始めた。

「待て！」

葵もバイクを乗り捨て、非常階段を駆け上がった。

「油断大敵だぜ、ホームズ！」

シャーロットがほんの一瞬、葵に気を取られたのを見逃さず、ジェフリーはシャーロットに飛びかかった。

「キャッ！」

シャーロットはそのまま地面に倒れた。ジェフリーの右手がシャーロットの喉にかかった。

「くっ！」

シャーロットは抵抗しようとしたが、ジェフリーは両膝で彼女の両腕を押さえつけ、身動き取れない状態にしていた。

「このまま、天国に行きな、ホームズ」

ジェフリーの両手がシャーロットの首にかかった。ググッとその指に力が入って行く。

「うっっ！」

シャーロットは頭を動かして何とか抜け出そうとしたが、ジェフリーの両膝が彼女の腕と腰をしっかりと押さえ込んでおり、全く抜け出すことができない。

「ほらよ。だんだん気持ちよくなって来るぜ。それが死ぬ寸前の快感で奴だ。どうだ、意識が朦朧として来ただろう？」

「・・・」

シャーロットはすでにジェフリーの言葉も聞こえなくなっていた。ジェフリーはニヤリとして、

「死ぬ寸前に、もっと気持ち良くしてやるよ、ホームズ」

ともう抵抗する力もないシャーロットから離れ、ファスナーを下ろし、ジーパンを脱ぎ始めた。シャーロットは、ジェフリーがこれから何をしようとしているのかくらいは認識できたが、身体を動かすことができなかった。

「さア、ホームズ、最高に気持ち良くしてやるぜ！」

とジェフリーがシャーロットにのしかかろうとした時だった。

「うげっ！」

ジェフリーは後頭部を殴られ、そのまま仰向けに倒れた。下半身丸出しの彼は、何ともみっともない格好だった。

「うん？」

シャーロットは朦朧とする意識の中で、目の前に立っている人物に焦点を合わせた。それは、茜だった。

「大丈夫、デカ乳女さん？」

「あっ・・・」

シャーロットは頭を振りながら、ゆっくりと起き上がった。茜はそれをジッと見つめて、

「何か言い忘れてるんじゃないのオ？」

と言った。シャーロットはカチンと来たが、

「あ、ありがとう、発育不良さん」

「それって、全然お礼に聞こえないんだけどなア」

茜は悪乗りしていた。シャーロットは作り笑いをして、

「ありがとう、茜さん。助かったわ」

「そうそう」

シャーロットは茜に見えないようにベーツと舌を出した。茜は、

「あっ、そうだ、こんなことしてる場合じゃなかった！ソレイユを追わなくちゃ！」

と駆け出した。シャーロットはビクツとして、

「ソレイユですって！？」

と茜を見たが、

「う、うーん・・・」

と目を覚ましかけたジェフリーに気づき、

「まだ寝てる！」

と顔面に蹴りを入れた。ジェフリーはまた気絶した。

「取り敢えず、貴女の仇は討てたわよ、ジェニー」

シャーロットはそう呟いて涙を拭った。そして、

「葵達なら、ソレイユでも勝てるか」
と葵達が走り去った方を見た。

事務所の中では、美咲がファラを周囲が全て壁のロッカールームに隠れさせ、ドアの近くに忍び装束に着替えて立った。

「来た！」

美咲は半歩退き、ソレイユが入って来るのを待ち構えた。次の瞬間、ドスンとドアに何かが当たる音がした。

「えっ？」

美咲は携帯が鳴ったのに驚いて、出た。

「所長……。えっ、二トログリセリン？」

美咲は咄嗟にドアから離れた。今度は轟音と共にドアがバラバラに砕け散り、煙が事務所に立ち込めた。

「ファラはどこにいる？」

とソレイユが煙の中から現れた。美咲は身構えて、

「そんなこと、教えられる訳ないでしょう！」

「ならば、この中をくまなく探すまでだ」

ソレイユは美咲に近づいた。美咲はソレイユを誘導しようと、わざとロッカールームから離れ、給湯室へと下がった。ソレイユは美咲の行動を不審に思ったのか、

「俺をおびき寄せているのか？ 何を企んでいる？」

と言った。美咲はビクツとしたが、

「王女に手は出させないわ。今、所長と、もう一人の仲間が来たから」

と言い返した。ソレイユは入り口に目を転じた。そこには葵と茜が立っていた。

「マンションだけじゃなく、事務所までこんなにしてくれて！ もう、絶対許さないわよ、ソレイユ！」

葵が指差すと、ソレイユはせせら笑って、

「許さない？ どうするっていうのだ？」

「ぶっ飛ばす！」

と葵は言つと、風のような速さでソレイユに向かった。

「うつ！」

ソレイユは葵の速さが予測を超えていたので、彼女の右正拳をまともに顔面に喰らい、仰向けに倒れた。

「くっ！」

ソレイユは鼻血を滴らせて葵を睨んだ。葵はズンと右足を踏み出し、

「こんなもんじゃ、まだ脇腹への蹴りの分にもならないわ！ あと

99発はぶん殴る！」

と拳を前に突き出した。

第十三章

ソレイユとの決着

7月 3日

午後12時30分

ソレイユは葵を睨んだまま、ゆっくりと立ち上がった。

「貴様……。もう普通には殺さん！ バラバラにして、魚のエサにしてやる！」

ソレイユはまさしく激怒していた。彼は未だかつて、顔を殴られたことなどない。しかも相手が女だというのが、彼のプライドをズタズタにしていた。

「王女の首を獲る前に、貴様らを殺す。この俺の顔に泥を塗った貴様らをな！」

ソレイユは葵達を一人ずつ指差した。

「殺される前に一つだけ教えてよ。どうして貴方は、ファラ王女の居場所がわかったの？ マンションはともかく、ここへ来るのは誰も知らなかったはずよ」

と葵が言うと、ソレイユは急に大笑いをして、

「何だ、お前達、俺達が誰の依頼でこの仕事を引き受けたのか知らずに、王女をガードしていたのか？ こいつは笑える」

「どういうことよ！？」

葵はソレイユの笑い方に苛立つて尋ねた。するとソレイユは真顔になり、

「クライアントの名前を、教えられる訳がない。知らずに死ね！」
と言い放った。

「美咲、茜！」

「はい！」

葵は美咲、茜と共に、ソレイユと向かい合って立った。ソレイユはフツと笑い、

「死ぬ覚悟ができたようだな」

「冗談じゃないわ。あんたをメッタメタにする陣形を組むのよ」

「何イ？」

ソレイユが三人を見た時、美咲と茜が、彼の斜め後ろに飛んだ。ソレイユは三人に三角形の形に囲まれた。

「絶対にかわせない、三者同時攻撃よ！」

と葵が言った瞬間、三人の姿が消えた。ソレイユはハッとしたが、周囲に気を配り、身構えた。

「はアッ！」

葵、美咲、茜が、同時にソレイユに突進して来ていた。ソレイユはニヤリとして、

「絶対かわせないだと？」

と言うと、バツと飛び上がり、

「かわせたではないか？」

と言った。その時、

「甘い！」

葵の回し蹴りが脇腹に炸裂した。

「ぐはアッ！」

ソレイユはバランスを崩し、ドスンと床に落下した。

「まだよ。あと98発、残ってるわ」

と葵は言った。茜が小声で美咲に、

「所長つて、そんなにあいつに殴られたんですか？」

「さア・・・」

美咲は苦笑いして言った。

その頃、あるホテルの一室で、エクセル・ピクノ・ルミナは、国交樹立委員長から、報告を受けていた。

「そうか。主だった殺し屋は大半が倒れ、あとはソレイユしか残っておらぬか」

「はい。ソレイユも日本の女ニンジャ達に苦戦しております。決着は時間の問題かと思われます」

エクセルはニヤリとして、

「もう一波乱あった方が、ゲームは面白くなるな」

と呟いた。一体どういうことであろうか？

ソレイユはまたゆっくりと立ち上がった。彼はすぐ後ろにあるロツカールームのドアを見て、

「この中だな、ファラがいるのは」

「！？」

葵達は一瞬凍りついた。三人の位置からでは、ソレイユがロツカールームのドアを開くのを阻止することは不可能だ。しかも、ロツカールームには窓も他にドアもないため、ファラは逃げることもできない。

「ハハハ！ 俺の勝ちだな、女ニンジャ！」

ソレイユはドアを開き、中に入った。

「待て！」

三人は一斉にロツカールームのドアに向かった。

「いやーっ！」

ファラの叫び声があった。葵が中に入ると、ソレイユがファラを壁際に追いつめていた。

「王女！」

「葵さん！」

ソレイユはファラの右手首を掴んだ。ファラはガタガタと震えている。

「100万ドルは俺のものだ」

ソレイユはファラと葵を見比べながら、そう言い放った。葵は歯ぎしりした。どうあがいても、ソレイユがファラの首を折る前にファラを助けることができそうにない。するとそこへ茜が飛び込んで来て、

「ほら、殺し屋さん、忘れ物！」

と小ビンをソレイユに投げつけた。

「何！？」

ソレイユは小ビンをみて仰天し、ファラから離れて小ビンを受け

止めた。

「いつの間に……。しかし、同じ手は通用せんぞ」

ソレイユは小ビンをスーツの内ポケットにしまった。彼は美咲が姿を現さないのに気づき、

「しまった、陽動か？」

と上を見た。美咲はロッカーの上を伝ってファラに近づき、彼女を保護していた。

「形勢またまた逆転ね、ソレイユさん」

葵が挑発した。ソレイユはムツとした。

「さっ、王女様！」

葵がソレイユを牽制する中、美咲はファラをロッカールームの外へ連れ出した。

「さア、そろそろ決着をつけましょうか、ムツシュ・ソレイユ」

葵がソレイユに近づいた。するとソレイユは内ポケットから小ビンを取り出し、

「どけっ！」

と前に突き出した。しかし葵は身じろぎもしない。ソレイユはフンと鼻で笑い、

「脅しと思っているのか？ 私は脅しなどしない！」

と小ビンを葵に向かって投げつけた。しかし、小ビンは床にぶつかって砕けただけで、何も起こらなかった。

「フエ、フエイクか？」

ソレイユは茜を睨みつけた。茜はベーツと舌を出して、

「バーカ、当たり前でしょ！ 私がニトログリゼリンなんか、持つてる訳ないでしょ？」

「愚弄したな！」

ソレイユは一步前に踏み出した。

「俺をここまで追いつめたのは褒めてやる。だが、最後に立っているのは、この俺だ！」

「強がり言ってんじゃないわよ！」

葵が怒鳴り返すと、ソレイユはスーツの中から鞭を取り出した。

「あら、SMショーでも始めるつもり？」

「それも一興だな。しかし、これから始まるのは、お前達の死のダンスショーだ！」

ソレイユがブンと鞭を振るうと、茜の身体にそれが巻きついた。

「きゃアッ！」

彼女はロッカーに叩きつけられて倒れた。

「茜！」

「次はお前だ！」

茜から離れた鞭が、葵に蛇のようにうねりながら向かった。葵はこれかわし、ロッカールームの外へ出た。ソレイユが追いかける。

「美咲、ファラ王女を連れて逃げて！」

「はい！」

美咲はファラを伴い、事務所の外に出ようとした。しかしソレイユの鞭が美咲を捕えてしまった。

「くっ！」

美咲は鞭を振り解こうとして身体をねじった。

「王女様、早くお逃げ下さい！」

「は、はい！」

ファラが駆け出した。ソレイユは鞭をグッと引き、美咲を倒そうとした。しかし、美咲は逆にソレイユを引きずった。

「な、何だと？」

ソレイユは渾身の力を込めて美咲を引っ張っているが、美咲はビクともせず、むしろソレイユが次第に美咲に引き寄せられていた。

「バカねえ、貴方。綱引きする相手を間違えたようね。美咲と綱引きして勝てる力士、日本にいないわよ」

「くっ・・・」

ソレイユは鞭を放した。美咲は身体に巻きついた鞭をほどき、葵と二人でソレイユを睨んだ。

「万事休すね、ソレイユ」

と葵が言うと、ソレイユは再びスーツの下から鞭を取り出した。今度は2本同時に。

「まだだ！」

不意を突かれた葵と美咲は鞭に捕まった。そして二人は互いの身体をぶつけられ、倒れた。

「ファラの命、もらった！」

ソレイユは葵の背中を踏みつけ、事務所から飛び出して行った。

「待て！」

葵と美咲は鞭を振り解き、ソレイユを追った。

「女ニンジャも皆倒れたか。やはり、ソレイユが最強か？」

エクセルは身支度をしながら尋ねた。すると委員長は、

「いえ、違います、陛下。最強は、ファヴールです」

と答えた。エクセルは高笑いをして、

「そうであつたな。ゲームは終了だな」

と言った。

「王女様！」

葵と美咲は外廊下を逃げるファラとそれを追うソレイユを見た。

（今度こそもうダメ？ でも、一つ気になる・・・）

葵はソレイユに次第に追いつめられるファラを見つめた。

「ファラ、覚悟しろ！」

とソレイユが叫んだ時、外廊下の端のエレベーターの扉が開いて、

シャーロットが現れた。ファラはびっくりして、

「シャーロットさん！」

「王女様、伏せて下さい！」

シャーロットの大声に、ファラはバツと身を屈めた。シャーロットのW&Sオートマチックマーク1がガオンと吠えた。弾丸はまっすぐソレイユの心臓目がけて飛んだ。しかし、ドスツという鈍い音がしただけで、ソレイユは倒れなかった。シャーロットは舌打ちし、

「防弾服か!？」

ソレイユはニヤリとして、

「ほオ。W & Sのオートマチックか。少し衝撃があつたが、無駄だぞ」

「足には着けてないでしょう!」

シャーロットは足を狙つたが、ソレイユの鞭の方が早く、マーク1は弾き飛ばされてしまった。

「くっ!」

シャーロットは右手を押さえてソレイユを睨んだ。ファラが顔を上げてシャーロットを見た。

「王女、早く逃げて下さい!」

「みんな、負けてしまったのですか?」

ファラが叫んだ。ソレイユは鞭をしまいながら、

「ああ、そうだ。皆、戦えん。もう逃げられんぞ、ファラ」

と言つた。ファラはソレイユを見上げて、

「それでは、ファヴールが護ってくれましょう」

「何を言っている? ファヴールなど存在しない。幻に救いを求めても無駄だ、王女!」

「幻ではないぞ、ファヴールは」

突然ファラの口調が変わつた。シャーロットはびっくりしてファラを見た。葵と美咲は立ち止まってファラの変化に見入つた。

「まさか・・・」

ソレイユはファラの言葉をあざ笑い、

「ほオ、そうか。ではファヴールはどこにいるのだ? たとえいたとしても、俺を倒す前に、お前が死ぬ!」

「それはあり得ぬ」

「何?」

ソレイユは自分の首がザックリと切り裂かれ、血を噴き出すのを見た。何が起つたのか全くわからないまま彼は絶命し、倒れた。

「・・・!」

シャーロットは自分の目の前で起こったことが信じられなかった。ファラがスツと右手を振ったのは見えたのだが、何かあったのかよくわからなかった。

「やっぱりそうだったのね」

葵は再び歩き出してそう言った。美咲が、

「私、茜ちゃんの様子を見て来ます」

と言いつ残し、事務所に戻った。ファラは右手に着いたソレイユの血を白いハンカチで拭った。

「そう、私がファヴール。最強の暗殺者」

「ファラ王女・・・」

シャーロットはすっかり驚いていた。ファラはフツと笑って、

「葵さん、シャーロットさん、ちょっとがっかりしました。ソレイユごときに手こずるなんて。お二人共、もう少し強いと思っていたのに」

葵はファラに近づきながら、

「やっぱり、ホテルで殺し屋達を始末したのは、貴女だったのね、ファラ？」

「ええ」

ファラはまるで大したことではないようにあっさりと認めた。

「何故!？」

葵は怒鳴った。殺さなくてもいい相手まで殺したファラの行動に對する怒りだった。ファラは笑って、

「この私に賞金を賭けたのが誰がわかっていないようだから、教えてあげるわ。私の父、エクセル・ピクノ・ルミナよ」

「何ですって!？」

葵とシャーロットは異口同音に叫んだ。ファラは続けた。

「我がイスバハン王国は、石油が出る訳でもなく、鉱産資源もない。工業が発達している訳でも、観光が盛んな訳でもない。何の取り柄もない、アフリカの小国が、フランスほどの大国を追い出し、二度と手出しさせないなんて、考えられないでしょう? 何故か、わか

る？」

葵はキツとして、

「イスバハンが、暗殺者国家だからよ。世界最高の軍事国家であるアメリカ合衆国さえ、テロや暗殺は防ぎ切れない。貴女の国は、フランスの要人を何人も暗殺し、フランス政府を震え上がらせたのよ」と答えた。ファラはニコツとして、

「そう。よくわかりね。私達イスバハン王国の多くの者が、暗殺者。世界各国の依頼を受け、ターゲットを始末して来た。ところが最近、売り手市場だったこの世界が、供給過剰で買い手市場になつてしまったのよ」

「・・・」

葵は黙ったままファラに近づいた。ファラはシャーロットから離れ、ソレイユの死体を踏みつけて葵に近づきながら、

「どうすればいい？ 答えは簡単。需要と供給のバランスをとればいいの。つまり、殺し屋達の数減らせばいいのよね」

「勝手な考え方ね！」

と葵が怒鳴った。ファラはクスツと笑って、

「そこで私の父エクセルは、私に賞金100万ドルを賭け、世界中の殺し屋達に呼びかけた。もちろん、イスバハン国王としてではなく、もう一つの顔、スイスの大銀行の頭取としてね。こうして、何の事情も知らない愚か者共が、私を殺すために日本に押し寄せて来た訳」

「思い通りになつたっていう訳ね？」

葵が皮肉たつぷりに言うと、ファラは大声で笑って、

「そうね。後は、貴女とシャーロットさんを始末すれば、完璧ね」

「私とシャーロットは殺し屋じゃないわよ」

と葵が言い返すと、ファラは、

「違うわよ。貴女達は、私達の仕事の邪魔をするでしょ？ だから死んでもらうの」

と言い、また大声で笑った。

ファラはゆっくりと葵に近づく。シャーロットがファラを後ろから捕えようとしたが、

「シャーロットさん、動かないで。動いたら貴女から先に死んでもらうわよ」

とファラは振り返らずに言った。シャーロットはギクツとした。

（私が動こうとしたのがわかったの？ 私だって、気配を消す訓練を受けているのに・・・）

ファラはそんなシャーロットの心の内を見透かすかのように、「いくら気配を消しても、大気の流れを変えずに動くことはできない。貴女が動こうとしたと、地球が教えてくれたわ」

と答えた。シャーロットはジツトリと掌に汗をかいていた。ファラは葵を見据えて、

「まずは貴女から死んでもらうわ。本当は貴女の実力を測って、イスバハンの戦士として戦ってもらおうと思ったのだけど、どうやら不合格のようなので・・・」

「たとえ合格しても、こっちからお断りよ。人殺しの手伝いなんかしたくないわ」

葵は立ち止まって言った。ファラはクククと低く笑い、

「なるほどねエ。人を殺したことがないのを、唯一の誇りとしている、時代錯誤のニンジャの貴女らしいわ」

と蔑むように返した。葵の中で何かが弾けた。彼女は風になった。

「遅いわ、葵さん」

しかし、ファラはその風よりも速かった。葵は装束をザツクリと切り裂かれ、ガクツと膝を着いた。

「何、今の？」

シャーロットには何も見えなかった。

（葵の正拳がファラを直撃したように見えたのに、そこにはファ

ラはいなかった。速過ぎるの、彼女？」

「何でできているの、そのスーツ？ 私の爪は、鋼鉄でも貫くのに」
ファラが振り返って尋ねた。葵は立ち上がってファラを見ると、
「教えてあげない！」
と言い返した。

その頃、茜はようやく立ち上がり、美咲の手を借りて歩き始めた。
「大丈夫、茜ちゃん？」

と美咲が尋ねると、茜はガッツポーズをして、

「大丈夫です！ちよつと全身痛いけど、すぐに治りますよ」

「とにかく所長のところへ」

「はい」

二人は事務所を出た。そして、信じられない光景を目にした。

「しょ、所長……」

美咲は自分の判断を疑った。ファラがこの一連の事件の真犯人だとすれば、彼女は葵の敵ではない。そう判断して、茜の様子を見に行つたのだ。しかし、今葵とファラを見比べると、明らかにファラが優勢に見える。

「そんな……。あの子、強い……」

美咲のその言葉に、茜もビクツとしてファラを見た。しかし、ファラもまた、葵の鋭い突きで服を破られていた。

「やるわね、葵さん。考え直したわ。私達と一緒に、闇の世界を支配しない？ 貴女なら、できるわ」

「やらないって言うてるでしょ！ しつこいと怒るわよ！」

葵は切り裂かれた忍び装束を脱ぎ捨てた。その下は、鎖帷子になっていた。そして、

「次は外さないわ。覚悟しなさい、ファラ！」

とファラを指差した。ファラはせせら笑って、

「まだわかっていないようね。さっきは手加減したのよ。次は本気で貴女を殺す気で行くわ」

と言うと、殺気をみなぎらせ、構えた。葵も構えた。その後方でシヤロットがゴクリと唾を呑み込んだ。

「はアッ！」

「おおおっ！」

葵とファラが同時に突進した。葵の右正拳がファラに向かう。ファラはそれをかわし、右手の突きを葵の胸元に叩き込む。しかし葵はそれを左手で払いのけ、右のハイキックを見舞った。ファラもこれを同じく右のハイキックで受けた。互いに衝撃を受け、離れた。この間わずか数秒の出来事だった。

「す、すごい・・・」

美咲は他に何も言えないくらい驚いていた。

（ 所長はとてつもなく強いけど、それと全く互角、いえ、むしろ所長を押し気味に戦っているファラ王女は一体・・・？ ）

「思いの外、苦戦しているのか？」

エクセルは移動する車の中で尋ねた。委員長が、

「いえ、苦戦というほどではありませんが、ソレイユは先に倒れ、

女ニンジャ共と英国の女刑事が残るといふ番狂わせがありまして・・・

」

エクセルはニヤリとして、

「番狂わせではない。ファラは日本に来る前から、女ニンジャが一番強いはずと言っていた。だからこそ、女ニンジャにガードを依頼し、間近でその实力を見極めようとしたのだ。まさしく予想通りの展開だ」

「ははっ・・・」

委員長は深々と頭を下げた。エクセルは窓の外を見て、

「早く会ってみたいものだな、その女ニンジャに」

と言った。

「どうしたの、私を殺すんじゃないの、ファラ？」

葵は挑発めいたことを言った。ファラはキツと葵を睨み、
「それほど死にたいのなら、今すぐに殺してあげるわ!」

と葵に向かった。ファラはジャンプし、葵目がけて爪を立て、襲いかかった。

「くっ!」

葵はきわどい差でそれをかわし、逆にファラの空振りした右手を捕え、背負い投げで廊下に叩きつけた。

「うつっ!」

ファラが低く呻いた。とかと彼女は反動をつけてすぐに立ち上がり、振り返りもしないでいきなり後ろ蹴りを繰り出した。葵は意表を突かれ、これをまともに胸に受け、後ろに倒れた。

「所長!」

美咲と茜が叫んだ。葵は立ち上がって二人を見ると、

「大丈夫よ」

とウインクした。美咲と茜はホッとして顔を見合わせた。

「そんな余裕があるの、葵さん? 今ので肋骨が何本か折れたはずよ」

とファラが言った、葵は作り笑いをして、

「十何本があるうちの、2、3本よ。大したことないわ」

「呼吸が乱れてるわよ。謝るなら、今のうちよ」

ファラが高飛車な態度で言つと、葵はフンと鼻で笑って、

「謝ったら許してくれるの?」

「いいえ。謝っても許さない。ただ、すぐに楽にしてあげる。謝らないなら、じっくりと時間をかけて殺してあげるわ」

「じゃあ謝らない!」

「強がりもそこまでよ!」

ファラが再び葵に向かった。葵は身構えた。ファラは上体を低くし、葵の脚を切り裂きにかかった。葵はこれをかわし、ファラに口キックを見舞った。しかしファラは葵の脚を捕え、彼女を引き倒した。

「うつ！」

葵は衝撃で折れた肋骨に激痛が走り、呻いた。ファラは葵に馬乗りになった。

「逃げられないわ。止めを刺してあげる！」

「それはどうかしらね？」

「！？」

ファラの後頭部に、W & Sの銃口が押し当てられた。シャーロットが二人の戦いに割って入ったのだ。

「葵から離れるのよ、ファラ。ゆっくりね」

「・・・」

ファラは苦笑いをしてゆっくりと立ち上がり、葵から離れた。

「お礼は言わないわよ、シャーロット」

葵は立ち上がって言った。シャーロットはニヤリとして、

「後でフランス料理のフルコースね」

「何でよ！？」

ファラはそんな一瞬の隙について、シャーロットの銃を蹴り上げ、地上に落としてしまった。

「やっぱり貴女から殺すわ！」

ファラの突きがシャーロットに向かう。しかしシャーロットはそれを受け止め、逆にミドルキックを繰り出す。ファラはそれをかわし、シャーロットの軸足を払った。シャーロットはバランスを崩して、ドスンと尻餅をついた。

「どうにも戦い辛いわ。もっと広い場所でやりましょうか」

とファラは上を見ると、まるで猿のように壁を伝い、屋上へと上がって行ってしまった。葵がこれを追った。シャーロットも慌てて壁をよじ登った。

「上に行っちゃいましたね」

この様子を見ていた茜が言った。美咲は頷いて、

「私達も行きましょう。茜ちゃんは無理しないでエレベーターで来なさい」

と言うと、スツと壁を登って行った。茜は痛みをこらえながら、エレベーターへと歩き出した。

「到着しました」

委員長がエクセルに言った。エクセルは無言で頷いた。運転手がドアを開き、エクセルは車を降りた。

「このビルの屋上で、姫様は戦っておられます」

と委員長が言うと、エクセルは眉間に皺を寄せて、

「時間がかかり過ぎているな。女ニンジャ、予想以上に強いようだな」

「はア・・・」

エクセルはビルの正面玄関に向かった。委員長は慌ててこれを追った。

「ここなら障害物を気にせず、貴女を叩きのめせるわね」

ファラは屋上を見渡して言った。葵はムツとして、

「一つ訊いておきたいことがあるわ。貴女はあの時、私がすぐに浴室に入ろうとしたら、どうするつもりだったの？」

と尋ねた。ファラはクスクス笑って、

「それは絶対にあり得ないと思っていたわ。何故私がわざわざ貴女の目の前で裸になったか、わからないの？」

「!？」

葵はその時の自分の思考を思い出した。ファラはそんな葵を見て、
「あの時貴女は、私の美しい肢体に気後れして、服を脱ぐのをためらっていたわ。それはそうよね。私は10代。貴女は20代、それももうすぐ30代。肌の艶も張りも、全然違う。恐ろしくて一緒にシャワーなんて浴びられないわよね」

とまさしく凶星を突いて来た。葵はグツと詰まった。ファラは続けた。

「だから貴女は絶対にすぐ入って来ない。いえ、恐らく入って来ら

れないし、しかもしばらくその場で考え込んで、脱衣所から部屋に戻ることもないと結論づけたの。そして私は悠々と浴室の窓から侵入して来た愚か者の首を捻って天井裏に放り投げ、窓から部屋に戻り、貴女が倒した連中の首を捻り、再び浴室に戻った。その全作業に、2分とかからなかったわ」

葵は黙ったまま、ファラを睨んでいる。シャーロットも同じだ。美咲はあのホテルの一件の真相を知り、驚愕していた。そこへエレベーターを使って上がって来た茜が現れた。

「無駄話はこのくらいにしましょう。そろそろ貴女達を片づけないと、父上にお叱りを受けてしまうから」

とファラは言うのと、ダツと駆け出し、葵に向かった。葵は、

「もうアツタマ来た！ さっきまで女の顔は殴らないって思ってたけど、あんたの顔はボッコボコに殴る！」
と走り出した。

「所長があんなに怒ったの、初めて見ました」

と茜が言うと、美咲は、

「そう？ 私は三回目よ」

と答えた。茜はギョツとして美咲を見た。

「そんなことできないわよ」

ファラが葵に仕掛けた。彼女の素早いパンチが、的確に葵の顔、胸、腹を連打し、葵は後ろに吹っ飛ばされて倒れた。

「くっ・・・」

葵は鼻孔からダラダラと鼻血を流して立ち上がった。足下がおぼつかない。ファラは甲高い声で笑い、

「みつともないわ、葵さん。大人の女性が鼻血を流して。拭きなさいな」

「余計なお世話よ！」

葵は袖口で鼻血を拭いた。鎖帷子が血で赤黒く染まった。

「葵！」

「所長！」

シャーロット、そして美咲と茜が加勢に走ろうとした。しかし葵は、

「手助け無用よ！ この女だけは、私が一人でボッコボコにぶっ潰す！」

と言い放つと、両手を胸の前で合わせた。ファラはその様子を見て目を丸くして面白がり、

「あら、神にでも祈るの？」

とバカにしたような口調で尋ねた。葵はキツとファラを睨みつけ、
「違うわよ。私達には神はいない。頼るのは己の力のみ！」

葵はフーツと肺にある空気を全て吐き出した。折れた肋骨から激痛が走るが、彼女はそれに耐え、空気を出し切った。そして次に、肺が破裂するのではないかというくらい、大きく息を吸った。また激痛が彼女を襲ったが、葵は怯まず続けた。美咲はハッとして、

「あれは確か・・・」

「何ですか、一体？ 所長は何をしてるんですか？」

と茜が尋ねた。美咲は葵を見たままで、

「茜ちゃん、見ていなさい。所長の強さがどこから来るのか、今わかるわ」

「えっ？」

茜はびっくりして葵に目をやった。そして、彼女は感じた。

「気が、凄い勢いで高まつてる・・・」

「でしょ？ 所長は負けないわ。いえ、もう勝ったも同然よ」

ファラは葵の変化に気づいていた。

「何をしたの、葵さん？ 貴女今、急に強くなったわ」

ファラが尋ねた。すると葵はニヤリとして、

「それがわかったのは褒めてあげる。でももう許さないから、覚悟しなさい！」

と言うと、フツと消えた。ファラは周囲を見た。しかし葵はいなかった。

「はアッ！」

葵は突然ファラの目の前に現れ、彼女を滅多打ちにした。

「くっ！」

ファラはそれでも葵のラッシュから逃れ、腕で顔を防御した。

「・・・」

ファラに焦りの色が見え始めた。葵はそんなファラの動揺などおこまいなく、突進した。

「ええい！」

葵のパンチがファラのガードを打ち砕き、ついにアッパーカットがファラの顎を捉えた。ファラはそのまま後ろに飛んで倒れた。彼女の鼻と口から血が流れ出した。葵はフツと笑って、

「今度はあんたの番よ、ファラ。鼻血流してみつともないわ！」と挑発した。ファラはカッとなって葵に向かった。

「その減らず口、塞いでやる！」

ファラのハイキックが葵に向かう。葵はそれをかわし、ファラの顔面に正拳を見舞った。ファラは再び後ろに飛び、倒れた。

「何故？ どうして？」

ファラは頭が混乱しているようだ。さっきまで圧倒的に優位だったのに、今は逆に追い込まれている。現状が理解できない顔をしていた。

「止めよ！」

葵が再びファラに突進した。ファラはそれをかわそうとしたが、葵に右足の甲を踏まれた。

「さア、さっきのお返しよ！」

「・・・！」

葵の正拳が何発もファラの顔面を襲った。足を踏まれているため、倒れることもできないファラは、見る見るうちに顔を腫れ上がらせた。

「ぐふっ・・・」

ついにファラは白目を剥き、気絶して葵にもたれかかった。葵の逆転勝利だった。

「ふう……。少しはすつきりしたわ」

と気を失っているファラを見て、葵は呟いた。シャーロットが駆け寄り、

「殺してないでしょうね？」

「そのくらいの手加減はしてるわよ」

葵は美咲が差し出したハンカチで顔の血を拭いながら答えた。

第十五章 結末 7月 3日 午後2時

エクセルはエレベーターの前でファラの敗北を知った。

「ファラが敗れたと・・・？」

「は、誠に信じられませんが、女ニンジャに倒されてしまいました」
委員長が答えた。エクセルは無表情のままクルリと踵を返すと、
「ならばファラはそのまま捨て置き。我らは直ちに日本を離れる。
ファラとして自分の身の処し方はわかっていよう」

「はい」

エクセルはそのまま車に戻り始めた。委員長がこれに続いた。その時、

「待ちなよ」

と後ろから声がした。エクセルは立ち止まり、振り返った。

「誰だ？」

そこには篠原と、彼に襟首を掴まれて縮み上がっているセシオがいた。エクセルはセシオに気づいて一瞬ギョツとしたようだったが、すぐに冷静な顔になり、

「何の用だ？」

と篠原を睨みつけた。篠原はニヤリとして、

「自分が仕掛けたコンテストで、自分の駒が負けたら、その駒まで置き去りにして、てめえはサッサとトンヅラかよ？ 随分と虫が良過ぎねえか、ジイさん？」

と言った。エクセルはフツと笑って、

「なるほど。お前の隣にいる男が、ベラベラと喋ったようだな」
とセシオに一瞥をくれた。セシオはエクセルの視線に耐えられず、顔を俯かせた。エクセルは再び篠原を見て、

「お前はどこまで知っているのだ？」

「ゼーんぶ、知ってるよ。あんたの娘がイスバハン最強の殺し屋ファヴールだということから、イスバハンが、暗殺請け負い業で成り

立っている国だつてことまでな」

篠原がおどけた口調で答えると、エクセルはギラツと目を光らせて、

「ほオ。ならば先代のファヴールがこの私だということもか？」

と言った。篠原はわざとらしく驚いた顔をして、

「そいつは知らなかった。しまったなア」

「減らず口もそれまでだ！」

エクセルは老人とは思えない動きで、篠原に向かった。

「知り過ぎたお前には、死あるのみだ！」

エクセルの右手の爪が光った。ファラと同じく、鋼鉄をも切り裂くもののようなものだ。

「死ねっ！」

エクセルの爪が篠原を切り裂いた、かに見えたが、それは篠原の残像だった。

「何！？」

エクセルは呆然とした。篠原はエクセルの真後ろに立っていた。

「悪いな、ジイさん。俺も忍者でね。少なくとも、あんたなんかより、ずうっと強いぜ」

「・・・！？」

エクセルは次の瞬間、ボコボコに殴られ、倒れた。それを見た委員長が震えながら、

「き、貴様、イスバハン王国の国王陛下に向かって！」

と怒鳴ると、篠原はフツと笑って、

「何言つてやがる。密入国同然に日本に来たジイさんが襲いかかって来たのを殴ったって、せいぜい過剰防衛だぜ。しかも俺は、防衛省統合幕僚会議情報本部の者だ。無罪だな、確実に」

委員長はヘナヘナと座り込んだ。セシオはその隙に乗じて逃げようとしたが、篠原に、

「どこ行くんだよ、おっさん？」

と声をかけられ、ビクツとして立ち止まった。

「篠原さん！」

そこへ、パトカー数十台と共に、大原が現れた。篠原は呆れて、
「おいおい、随分と大部隊だな、大原？」

大原は苦笑いをして、

「水無月さん達が苦戦していると聞いたので、応援部隊を連れて来たんですけど、必要なかったみたいですね」

「ハハハ。まあ。取り敢えず、そのジイさんとこのおっさん二人、拘束してくれ。密入国者とその幫助者だ」

「はい！」

大原は倒れているエクセルと、座り込んでいる委員長、そして直立不動で固まっているセシオを警官隊に拘束させた。

「水無月さん達は大丈夫なんですか？」

「ああ。まあ、キレたあいつに勝つのは、アメリカ軍の海兵隊でも無理だろうな」

と篠原が言っていると、

「何悪口言ってるのよ、護？」

と葵の声がした。篠原はビクツとして振り向いた。そこには気を失ったファラを背負った葵と、シャーロット、美咲、茜がいた。篠原は苦笑いをして、

「悪口なんか言ってるじゃないよ。お前がどんなに強いか、大原に話していただだけだぜ」

「どうだか」

葵はフンとソップを向いた。篠原は肩を竦めてから、

「ファラは父親であるエクセルによって、催眠術をかけられ、その上で薬も射たれ、操られていたようだ。自分の身が危なくなったり、エクセルからキーワードを言われると、暗殺者に変身するようにな」
「やっぱりね。私の方が強いとわかった途端、急に戦闘力が下がったから、そうじゃないかと思ったのよ。でもその情報、どこで仕入れたの？」

と葵は篠原を見て尋ねた。篠原はパトカーに乘せられるセシオを見

て、

「あのおっさんから聞き出したのさ。ちょっと虐めたら、たちまち吐いたよ。奴がフランス軍の外人部隊にいたというのは本当だが、ソレイユとは面識はないし、所属していたのはごく短期間で、大して活躍はしていない。お前の事務所のことは、お前達の正体を知っていたから、カマをかけただけのようだ。奴は情報部の部長と言っても、人を殺すどころか、殴ったことすらない、文官だとさ」

「そう。じゃあ、あのおじさんが言ってた、ファヴールの話とかは、みんなエクセルが仕込んだものだったのね」

「そんなとこだな」

「これで一件落着ですね」

と茜が言くと、篠原は、

「そう言いたいところだが、まだ一人いるんだよ、この一連の事件の黒幕が」

「ええっ、そうなんですか？」

と茜は葵を見た。葵は頷いて、

「そうよ。それも一番タチの悪い奴がね。ちょっと行って、懲らしめて来るわ」

と言った。茜は美咲と顔を見合わせた。

橋沢首相は、警察庁長官から、密入国者としてイスバハン人一名、そしてその幫助者としてイスバハン人二名を拘束したと報告を受け、仰天していた。

「バカな……。私の計画が、崩れて行く……」

橋沢はガツクリとうなだれて、椅子に沈み込んだ。

「自衛隊法改正と、スパイ防止法の成立……。そしてゆくゆくは憲法を改正という、私の長年の夢が消えてしまう……」

と橋沢が呟いた時、

「何が長年の夢よ。自衛隊法を改正させて、自分のファミリー企業が造る武器を大量に買わせるように仕向け、スパイ防止法を成立さ

せて、ファミリー企業の通信機器を大量に買わせる。それでも飽き足らず、憲法を改正して、自衛隊を国防軍に昇格させ、自分の私兵同然に使うつもりだったんでしょ？」

という声がしたので、橋沢はハツとして顔を上げた。そこには葵が立っていた。すっかり正装した、スリーピース姿で。橋沢はムカツとして、

「貴様、あの時、イスバハンの王女と一緒に来た、ボディガードの女だな？　どうやってここへ入った？」

と立ち上がり、葵を指差した。葵はツカツカと橋沢に歩み寄り、
「そんなことはどうでもいいわ。あんた、自分が何をしていたのかわかってるの？　イスバハン王国の国王の申し入れを受け入れて、世界中の殺し屋が日本に入国するのを黙認して、国内各所で被害が出ることも予測していたのに、公安調査庁を動かして私達の行動を監視し、殺し屋達は野放しにした。これは日本国民全員に対する、重大な裏切り行為よ！」

と指差し返した。橋沢はそれでも、

「何を言うか！？　アメリカの核の傘の下で温々として来た日本が、変革をするために必要なことだ。まず外国のテロリスト達がどれほど危険な存在かを国民に知らしめ、次いで自衛隊の現在の編成では国防もままならんことを知らしめる。さらに憲法を改正し、日本軍とし、アメリカの核の傘ではなく、日本独自の核の傘を持ち、日本を侮る中国や韓国、その他アジアの諸国に思い知らせる。全て国益のため、国民のため。新しい時代にそぐわぬ日本の現体制は葬り去り、全く違った理念の下、日本という国は世界のリーダーシップの一翼を担うのだ」

と反論した。葵は机を両手でバンと叩き、

「何をズレたこと言ってるのよ！　日本が今まで世界に示して来たのは、戦争をせず、武力で外国の人間を一人も殺さず、六十年もやって来られたと言う、すばらしい実績なのよ。それを反古にして、再軍備をし、また百年前と同じことを始めようというの、あんたは！

？」

と叫んだ。すると橋沢は葵を睨みつけ、

「何も知らぬ小娘がふざけたことを言うな！ 原爆を二発も落とされ、国土の大半を焼かれ、思想も信仰も統制され、教育も強制的に変えられ、アメリカ合衆国の都合のいいように作り替えられた偽りの平和日本など、何の実績にもならん！ 私の理想は、打倒アメリカ、打倒ヨーロッパだ。アジアの地に、世界最強の経済軍事大国を築くのだ！」

と狂ったように叫んだ。葵はキツとして、

「ふざけたこと言ってるのはどっちよ？ アジアの人々と協力して、アメリカやヨーロッパとは違う経済圏を確立するのはいいことだわでも、それに合わせて、軍事力の増強をしようとするのよ？ 時代錯誤もはなはだしいわね。バツカじゃないの？」

「何を！？ 貴様、この私をバカと言ったのか！？」

橋沢首相は激怒して机を回り込み、葵に掴みかかった。その瞬間、葵の右のカウンターが橋沢の鼻骨をへし折り、橋沢は壁に叩きつけられて崩れた。

「百年前と同じことをしようというの？ 何度同じことを繰り返すのよ！？ 人は憎しみ合っていたら、前に進めないのよ。何でそんなことがわからないの！？」

葵はクルリと背を向けると、ドアを開き、執務室を出て行ってしまった。橋沢は鼻から出る血をハンカチで押さえて立ち上がり、

「あの女、ただではすまん！ 必ず捕えて、地獄のような苦しみを味わわせてやる！」

と叫ぶと、インターフォンに近づいた。すると、

「やめろ、橋沢。そんなことをしてみろ、日本の国がひっくり返されるぞ」

と岩戸老人が入って来て言った。橋沢はビクツとして岩戸老人を見た。

「どういう意味ですか、岩戸先生？」

橋沢はハンカチで鼻を押さえたまま尋ねた。岩戸老人はゆつくりと橋沢に近づき、

「お前も日本の首相なら、『月一族』の名くらい知っていよう?」

「ツキイチゾク?」

橋沢はポカンとして言った。岩戸老人は頷いて、

「そうだ。平安の昔より、日本の影の部分を支えて来た忍びの一族だ。戦国の世においても、様々な場でその力を発揮し、秀吉や家康はもちろんのこと、あの破壊者信長さえ一切手出ししなかった、日本最強の忍者集団の名だよ」

「あ、ああ・・・」

橋沢はようやく「月一族」のことがわかったらしかった。岩戸老人は続けた。

「彼らは今この平成の世も日本の影の部分を支えている。日本全国の市町村、そして都道府県、国、全ての官公署に、彼ら一族はそれとわからぬように入り込んでいる。もしお前があのお嬢さん、すなわち水無月葵を捕えようとすれば、その一族全てを敵に回す」

「全てを敵に?」

橋沢には合点が行かない。岩戸老人は橋沢にさらに近づき、

「あの水無月葵こそ、全ての『月一族』の長の娘。そして、一族最強の忍びだ」

「・・・!」

橋沢は全身から汗を噴き出し、へたり込んだ。岩戸老人はフツと笑って、

「良かったな、橋沢。わしがいたおかげで、お前の首、繋がったぞ」と言ったが、橋沢には聞こえていなかった。

ファラは、葵のマンションのリヴィングルームのソファの上で目を覚ました。

「こ、ここは?」

彼女は起き上がろうとしたが、

「だめよ、まだ寝てなきゃ。ごめんね、ファラ、ちょっと殴り過ぎたわ」

と葵が押し止めた。ファラはゆっくりと横になり、

「いえ、いいんです。葵さんのおかげで、私はようやく父上から解放されました。ありがとうございます」

「戦闘中の記憶、残っているの？」

「はい。自分の中ではいけないと思っているのですが、別の自分が本当の自分を押さえ込んでしまつて……。どうすることもできませんでした」

「そう……」

葵は悲しそうにファラを見た。ファラはしかし、ニツコリして、

「でももう大丈夫です。私、本当の自分を取り戻しました」と言つた。葵は微笑み返して、

「よかつたわね、ファラ」

「はい。これから私は一生かけて自分が犯した罪を償います。とても償いきれるものではないでしょうが」

「いいえ、そんなことはないわ。償いは、貴女が一生を終える時に完了するのよ。人の死は、全てを清算するの。でなければ、人間はずっと昔に滅んでいたわ」

と葵は言つた。ファラは嬉しそうに頷いた。葵はさらに、

「貴女が最初に会つた時に語ってくれた、平和憲法の話、本心なんでしょう？」

と尋ねた。ファラは大きく頷いて、

「はい。日本国憲法は、21世紀の世界の指針となるべき憲法です。私はイスバハンの王国軍を廃止して平和憲法を作り、最終的には王制を廃止して、共和国政府を打ち立てたいと考えています」

「まア、そうなの。それが貴女の？」

「はい。それが私の償いの形です」

ファラは力強く答えた。そして、
「父上はどうなるのでしょうか？」

「エクセル国王は、正規の手続きを経て日本に入国していないから、密入国者と同じ扱いで裁かれるわ。身元を照会して、あとは本国に強制送還ね。彼は何をしたという証拠はないから」

「でも父は現に・・・」

とファアラが反論しかけると、葵は首を横に振って、

「共謀者である日本政府が、絶対に真相を明かさないわ。そしてその真相はマスコミにも知り得ないところで処分されてしまう。国王はイスバハン本国で裁かれることになるわね」

「そうですか。その程度で、終わってしまうのですね」

ファアラは悲しそうに顔を背けた。葵も暗い顔になり、

「それが今の平和国家日本の生の姿よ。どうにも情けないけどね」

「葵さんには、真相を世に知らせる力があるのでしょうか？ この事件は、伏せるべきではありません。公表しないと・・・」

とファアラが再び葵を見て言うのと、葵は、

「だめよ。そんなことをしたら、貴女も囚われの身になるわ。それはできない」

「・・・」

ファアラは涙を流していた。葵はその涙を拭って、

「泣かないで、ファアラ。私は、貴女のあの言葉に賭けてみたのよ。」

貴女なら、イスバハンを変えられる。闇の国ではなく、光の国にね」

「はい・・・」

ファアラは涙を堪えて、葵を見た。葵は黙って頷いた。そして、

「さア、眠りなさい、ファアラ。もう何も心配いらないわ」

「はい」

ファアラは静かに目を閉じ、眠りについた。葵はファアラから離れ、廊下で待っていた篠原と岩戸老人に近づいた。

「取り敢えず、不安はないようだな」

と篠原が言った。葵は頷いてから岩戸老人を見て、

「岩戸さん、ありがとう。ファアラのこと、よく握り潰してくれました」

「ハハハ。まア、葵ちゃんの頼みを断ったら、あとが怖いからな」

岩戸老人が陽気に答えると、葵はプウツと頬を膨らませて、

「何ですか、それ。私まるで怪獣扱いじゃないですか？」

「怪獣の方が可愛いだろ？」

と篠原が口を挟んだ。葵はキツとして篠原を睨み、

「うるさい！」

と怒鳴った。岩戸老人は篠原と顔を見合わせて大笑いした。葵は膨れっ面のまま、二人を見比べた。

それから一週間が過ぎた。

ファラは回復し、普通に動けるようになった。美咲と茜もすっかり元気になり、彼女達はファラを見送るため、成田空港に来ていた。「元気でね、ファラ」

空港のロビーで葵が言った。

「はい。皆さんもお元気で」

ファラはニツコリして答えた。篠原が、

「あと五年経ったら、遊びに来なよ、姫様。俺がいろいろと案内してあげるよ、日本の名所を」

と言うと、葵が、

「あと五年経ったら、あんたもうおっさんじゃないの。ファラに相手にしてもらえないわよ」

「じゃお前もおばちゃんだな」

と篠原が言い返した。葵はキツとして、

「何ですって!？」

「こんなところでもめないで下さい、所長!」

美咲が葵をたしなめた。葵はフンと篠原から顔を背けた。

「イスバハンまで、私が同行するわ。もうファラは普通の女の子ですからね」

シャーロットが言った。すると茜が、

「姫様、気をつけて下さいね。この女、欲得ずくですから。何か儲かることでもないよ、動きませんよ」

「あーら、発育不良娘さん、随分ね? 長生きしたくないの?」

シャーロットが茜を睨む。茜も負けずに睨み返し、

「ええ、長生きしたいから、胸はあまり大きくならないようにしたいと思いますわ」

「ほオ」

二人の間には、火花が飛び散るようだった。美咲は呆れてこの二人を見ていた。

「皆さん、本当にありがとうございました。またお会いできることを楽しみにしています」

ファラは一同を見渡して言った。

「姫様、元気でね」

「日本に来たら、連絡下さいね」

「待ってるよ」

ファラはニツコリ笑ってからシャーロットを見て、

「シャーロットさん、少しだけ待っていただけますか？」

と言った。シャーロットは腕時計を見て、

「ええ、いいですよ。出発時刻まで、まだ時間がありますから」

と答えた。ファラはそれに頷いてから、葵に駆け寄った。葵は、

「えっ？」

と思ったが、何もできなかった。ファラがいきなり葵に抱きつき、口づけをして来たのだ。

「ああっ！」

びつくりして赤くなる美咲、興味津々の目で見る茜、嫉妬混じりの目を向ける篠原。シャーロットもすっかり驚いて、何も言えなっていた。ファラは10秒ほど葵に口づけして、離れた。

「私、葵さんのこと、大好き。また日本に来たら、是非会って下さい」

「え、ええ・・・」

葵は半ば放心状態で答えていた。ファラは一同に手を振って、搭乗ゲートに歩いて行った。シャーロットが慌ててファラを追いかけた。

「あの子、もしかして、女が好きなのか？」

篠原が呟いた。葵もやっと我に返って、

「そ、そうなのかな・・・。どうしよう、またファラが来たら・・・」

「取り敢えず、デートしてあげれば？ モテモテの葵さん」

と篠原がからかい半分で言うと、葵はムッとして彼を見上げ、

「無責任なこと言うわね！ 少しは対策考えなさいよ！」

「わかったよ。じゃあさ・・・」

「何？」

と葵が尋ねると、篠原はニンマリして、

「今葵とキスすると、姫様と間接キスになるよね？ ちょっとキスさせてよ」

「バカ！」

葵の平手打ちが篠原の頬に炸裂した。

エピローグ

7月10日

午前11時（後書き）

自作解説

神村 律子

いかがでしたでしょうか？

このお話に出て来るイスバハンという国はいうまでもなく架空の国です。そして国王はイスバハンの国王ですが、暗に植民地支配をしていた西欧諸国を表しています。ファラ王女は、西欧諸国の利権のために彼らの思惑のまま翻弄されたアラブ諸国そのものです。イラクはもとはアメリカの支援で、イランと戦い、アメリカが育てた国です。それを言うことを聞かなくなったからお仕置きをする、というのが、アメリカの発想です。

日本にできること。それは「戦争に負けても、決してそれは全てを失うことにはならない」ということを、世界のあらゆる国に示すこと。

アメリカの尻馬に乗って「テロには屈しない」と叫んでみても、何も解決しないのです。

そんな大きなテーマを掲げたつもりはありませんが、そんなメッセージも込められているのだ、ということだけ、お伝えしておきます。

コーヒープレイク 如月茜の困惑

如月茜。

ご存じでない方のために紹介致します。

彼女は東京都文京区にある水無月探偵事務所の経理担当であります。

水無月探偵事務所は、実は忍びの一族で、史上最強とされています。

茜は中でもとりわけ腕の立つ所謂「くのいち」なのです。

そんな茜が、とても困っている事がありました。

所長である水無月葵が契約した会計事務所の担当職員が茜に惚れたらしく、月に一度の会計監査であるはずなのに、様々な理由をつけて何度も事務所にやって来るのです。

「どうしたらいいですかねエ？」

いつも明るいい茜が、非常に暗い顔で先輩所員の神無月美咲に尋ねました。

ちなみに神無月美咲も同じく「くのいち」です。

「別に放っておけば？ 何かして来た訳じゃないんでしょ？」

美咲は、パソコンを操作しながら、片手間に答えました。

「もう、美咲さん、真剣に考えて下さいよオ。私、ホントに困ってるんですからア」

茜は膨れっ面で言いました。しかし美咲はそんな茜の困惑を本気にしていないようで、

「少しも困ってるように見えないんだけど？ 嬉しそうに見えるわよ」

「何ですかア？ 私、ホントに困ってるんですよ」

茜はひよっとこのように口を尖らせて言いました。

「会計事務所の彼、結構イケメンだって、以前言ってたじゃない、茜ちゃん」

「そ、それはア、彼がまだ私にアプローチする前でエ。でも、今はイケメンだけに自信満々なので、それがウザいと言うかア…」

茜はしつこく食い下がりました。美咲は手を休めて、

「大原さんに対して、まずいつて事？」

大原とは、警察庁のキャリアで、こここのところ茜と「いい感じ」な関係の人です。

「大原さんは、関係ないですよ。とにかく、会計事務所君が困ったちゃんなんですウ。美咲さん、一緒に対策考えて下さいよオ」

「じゃ、所長にお願いして、会計事務所を変えてもらったら?」

美咲は悪戯っぽく笑って言いました。茜はビクツとして、

「ダメですよ、そんなの。所長に知れたら、もっとややこしくなりますよオ。面白がって何かされちゃいます」

「そうかも知れないわね」

美咲が同意してしまう程、水無月所長は「人が嫌がるのを見るのが大好き」な性格なのです。

「じゃ、大原さんに相談して、警察から圧力かけてもらっ?」

美咲も面白がっているとしか思えないような提案をします。

「それもダメですよオ。大原さんを巻き込めませんし、そんな事させられませんたらア」

「それなら、篠原さんに頼んで…」

「ダメです! 所長以上に面白がり屋なんですから!」

茜が美咲の話を途中で遮るのも仕方がないのです。

篠原とは、水無月所長の幼馴染み。彼は水無月所長と恋人同士と主張していますが、所長は全然そうではないと言い張っています。

でも性格は似ていて、人の不幸が好きなようです。

端から見ると、夫婦の痴話喧嘩のような事を繰り返している2人なのです。

「もう、真剣に考えて下さいよオ、美咲さん」

茜の口が更に尖った時、彼女の携帯が鳴りました。

茜はまさに光の速さで携帯に出ます。

「大原さん？ どうしたんですか？」

彼女の暗い顔が嘘のように明るくなりました。

「いえ、大丈夫です。渋谷ですね。はい、必ず」

ニコニコ顔で携帯をしまう茜。美咲は呆れ顔で、

「もう悩み事相談はいいの、茜ちゃん？」

「はい。これから大原さんとお食事です。お先です」

茜はショルダーバッグを掴むと、あつと言う間に事務所を出て行ってしまいました。

「ホントに悩んでたのかしら、あの子？」

美咲は首を傾げてからパソコンに向かいました。

そして翌日、再び茜の悩み事相談を受ける事になる美咲でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7456e/>

風の葵 アサシンスコンテスト

2011年7月2日03時25分発行